と只管に諫めしとぞ。聞きたる時の我に罪なければ思はぬ人の誰なるかは知るべくもなく打ち過ぎぬ。思はぬ人の誰なるかを知りたる時、天が下に數多く生れたるものゝうちにて、この悲しき命に廻り合せたる我を恨み、このうれしき幸を享けたる己れを悅びて、樂みと苦みの綯りたる繩を斷たんともせず、此年月を經たり。心疚ましきは願はず。疚ましき中に蜜あるはうれし。疚ましければこそ蜜をも釀せと思ふ折さへあれば、卓を共にする騎士の我を疑ふ此日に至る迄王妃を棄てず。只疑の積もりて證據と凝らん時——ギニヴアの捕はれて枕に燒かるゝ時——此時を思へばランスロツトの夢は未だ成らず。

眠られぬ戸に何物かちよと障つた氣合である。枕を離るゝ頭の、音する方に、しばらくは振り向けるが、又元の如く落ち付いて、あとは古城の亡骸に脈も通はず。靜である。

再び障つた音は、殆んど敲いたと云ふべくも高い。慥かに人ありと思ひ極めたるランスロツトは、やをら身を臥床に起して、「たゞ」と云ひつゝ戸を半ば引く。差しつくる蠟燭の火のふき込められしが、取り直して今度は戸口に立てる乙女の方にまたゝく。乙女の顏は翳せる赤き袖の影に隱れて居る。面映きは灯火のみならず。

「此深き夜を……迷へるか」と男は驚きの舌を途切れ々々に動かす。

「知らぬ路にとそ迷へ。年古るく住みなせる家のうちを——鼠だに迷はじ」と女は微かなる聲ながら、思ひ切つて答へる。

男は只怪しとのみ女の顏を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹の衝立に、花よりも美くしき顏をかくす。常に勝る豐頰の色は、湧く血潮の疾く流るゝか、あざやかなる絹のたすけか。たゞ隱しかねたる鬢の毛の肩に亂れて、頭には白き薔薇を輪に貫ぬきて三輪插したり。

白き香りの鼻を撲つて、絹の影なる花の數さへ見分けたる時、ランスロツトの胸には忽ちギニヴアの夢の話が湧き返る。何故とは知らず、悉く身は痿へて、手に持つ燭を取り落せるかと驚ろきて我に歸る。乙女はわが前に立てる人の心を讀む由もあらず。

「紅に人のまことはあれ。恥づかしの片袖を、乞はれぬに參らする。兜に捲いて勝負せよとの願なり」とかの袖を押し遣る如く前に出す。男は容易に答へぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴ふる如くに下よりランスロツトの顏を覗く。覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んで、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたる儘、當惑の眉

を思案に刻む。やゝありて云ふ。「戰に臨む事は大小六十餘度、闘技の場に登つて槍を交へたる事は其數を知らず。未だ佳人の贈り物を、身に帶びたる試しなし。情あるあるじの子の、情深き賜物を辭むは禮なけれど……」

「禮とも云へ、禮なしとも云ひてやみね。禮の爲めに、夜を冒して參りたるにはあらず。思の籠る此片袖を天が下の勇士に贈らん爲に參りたり。切に受けさせ給へ」とこゝ迄踏み込みたる上は、かよわき乙女の、却つて一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑ふ。

カメロットに集まる騎士は、弱きと強きを通じてわが盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。又わが腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あすの試合に後るゝは、始めより出づる筈ならぬを、半途より思ひ返しての仕業故である。闘技の埒に馬乘り入れてランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳はるゝ丈ならば其迄の浮名である。去れど後れたるは病のため、後れながらも參りたるはまことの疾にあらざる證據よと云はゞ何と答へん。今幸に知らざる人の盾を借りて、知らざる人の袖を纏ひ、二十三十の騎士を斃す迄深くわが面を包まば、ランスロットと名乘りをあげて人驚かす夕暮に、――誰彼共にわざと後れたる我を肯はん。病と

臥せる我の作略を面白しと感ずる者さへあらう。――ランスロットは漸くに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具である。鎧の胴に立て懸けたるわが盾を輕々と片手に提げて、女の前に置きたるランスロットは云ふ。

「嬉しき人の眞心を兜にまくは騎士の譽れ。難有し」とかの袖を女より受取る。

「うけてか」と片頬に笑める樣は、谷間の姫百合に朝日影さして、しげき露の痕なく晞けるが如し。

「あすの勝負に用なき盾を、逢ふ迄の形身と殘す。試合果てゝ再びこゝを過ぎる迄守り給へ」

「守らでやは」と女は跪いて兩手に盾を抱く。ランスロットは長き袖を眉のあたりに揭げて、

「赤し、赤し」と云ふ。

此時櫓の上を烏鳴き過ぎて、夜はほの〴〵と明け渡る。

四　罪

アーサーを嫌ふにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニヴァの已れにのみ語る胸のうち

である。

北の方なる試合果てゝ、行けるものは皆館に歸れるを、ランスロットのみは影さへ見えず。歸れかしと念ずる人の便りは絶えて、思はぬものゝ鑣を連ねてカメロットに入るは、見るも益なし。一日には二日を數へ、二日には三日を數へ、遂に兩手の指を悉く折り盡して十日に至る今日迄猶歸るべしとの願を掛けたり。

「遲き人のいづこに繫がれたる」とアーサーは左迄に心を惱ませる氣色もなく云ふ。

高き室の正面に、石にて築く段は二級、半ばは厚き毛氈にて蔽ふ。段の上なる、大なる椅子に豐かに倚るがアーサーである。

「繫ぐ日も、繫ぐ月もなきに」とギニヰアは答ふるが如く答へざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、床几の上に、織き指を組み合せて、膝より下は長き裳にかくれて履の在りかさへ定かならず。

よそ〳〵しくは答へたれ、心は其人の名を聞きてさへ躍るを。話しの種の思ふ坪に生えたるを、寒き息にて吹き枯らすは口惜し。ギニヰアは又口を開く。

「後れて行くものは後れて歸る掟か」と云ひ添へて片頰に笑ふ。女の笑ふときは危うい。

「後れたるは掟ならぬ戀の掟なるべし」とアーサーも穏かに笑ふ。アーサーの笑にも特別の意味がある。

戀といふ字の耳に響くとき、ギニヰアの胸は、錐に刺されし痛を受けて、すはやと躍り上る。耳の裏には颯と音して熱き血を注す。アーサーは知らぬ顔である。

「あの袖の主こそ美しからん。……」

「あの袖とは？袖の主とは？美しからんとは？」とギニヰアの呼吸ははづんで居る。

「白き插毛に、赤き鉢巻ぞ。去る人の贈り物とは見たれ。繫がるゝも道理ぢや」とアーサーは又から〳〵と笑ふ。

「主の名は？」

「名は知らぬ。只美しき故に美しき少女と云ふと聞く。過ぐる十日を繫がれて、殘る幾日を繫がるゝ身は果報なり。カメロットに足は向くまじ」

「美しき少女！美しき少女！」と續け樣に叫んでギニヰアは薄き履に三たび石の床を踏みなら

す。肩に負ふ髪の時ならぬ波を描いて、二尺餘りを一筋毎に末迄渡る。

夫に二心なきを神の道との教は古るし。神の道に從ふの心易きも知らずと云はじ。心易きを自ら捨てゝ、捨てたる後の苦しみを嬉しと見しも君が爲なり。春風に心なく、花自ら開く。花に罪ありとは下れる世の言の葉に過ぎず。戀を寫す鏡の明なるは鏡の德なり。かく觀ずる裡に、人にも世にも振り棄てられたる時の慰藉はあるべし。かく觀ぜんと思ひ詰めたる今頃を、わが乘れる足臺は覆へされて、踵を支ふるに一塵だになし。引き付けられたる鐵と磁石の、自然に引き付けられたれば咎も恐れず、世を憚りの關一重あなたへ越せば、生涯の落ち付はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吸はれし鐵は無限の空裏を冥府へ隕つる。わが坐はる床几の底拔けて、わが乘る壇の床崩れて、わが踏む大地の殼裂けて、已れを支ふる者は悉く消えたるに等し。ギニヰアは組める手を胸の前に合せたる儘、右左より骨も摧けよと壓す。片手に餘る力を、片手に拔いて、苦しき胸の悶を人知れぬ方へ洩らさんとするなり。

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答へたるは、アーサーを欺けるにもあらず、又已を誣ひたるにもあら

ず。知らざるを知らずと云へるのみ。まことはわが口にせる言葉すら知らぬ間に咽を轉び出でたり。

ひく浪の返す時は、引く折の氣色を忘れて、逆しまに岸を嚙む勢の、前よりは凄じきを、浪自らさへ驚くかと疑ふ。はからざる便りの胸を打ちて、度を失へるギニヰアの、已れを忘るゝ迄われに遠ざかれる後には、油然として常よりも切なき吾に復る。何事も解せぬ風情に、驚ろきの眉をわが額の上にあつめたるアーサーを、わが夫と悟れる時のギニヰアの眼には、アーサーは少らく前のアーサーにあらず。

人を傷けたるわが罪を悔ゆるとき、傷負へる人の傷ありと心付かぬ時程悔の甚しきはあらず。聖徒に向つて鞭を加へたる非の恐しきは、鞭てるものゝ身に跳ね返る罰なきに、自らと其非を悔いたればなり。吾を疑ふアーサーの前に恥づる心は、疑はぬアーサーの前に、わが罪を心のうちに鳴らすが如く痛からず。ギニヰアは悚然として骨に徹する寒さを知る。

「人の身の上はわが上とこそ思へ。人戀はぬ昔は知らず、嫁ぎてより幾夜か經たる。赤き袖の主のランスロットを思ふ事は、御身のわれを思ふ如くなるべし。贈り物あらば、吾も十日を、二

十日を、歸るを、忘るべきに、罵しるは卑し」とアーサーは王妃の方を見て不審の顏付である。

「美しき少女！」とギニヾアは三たびエレーンの名を繰り返す。このたびは鋭どき聲にあらず。去りとては憐を寄せたりとも見えず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回らして云ふ。「御身とわれと始めて逢へる昔を知るか。丈に餘る石の十字を深く地に埋めたるに、蔦這ひかゝる春の頃なり。路に迷ひて御堂にしばし憩はんと入れば、銀に鏤ばむ祭壇の前に、空色の衣を肩より流して、黄金の髪に雲を起せるは誰ぞ」

女はふるへる聲にて「あゝ」とのみ云ふ。床しからぬにもあらぬ昔の、今は忘るゝをのみ心易しと念じたる矢先に、忽然と容赦もなく描き出されたるを堪へ難く思ふ。

「安からぬ胸に、捨てゝ行ける人の歸るを待つと、凋れたる聲にてわれに語る御身の聲をきく迄は、天つ下れるマリヤの此寺の神壇に立てりとのみ思へり」

逝ける日は追へども歸らざるに逝ける事は長しへに暗きに葬むる能はず。思ふまじと誓へる心に發矢と中る古き火花もあり。

「伴ひて館に歸し參らせんと云へば、黄金の髪を動かして何處へとも、とうなづく……」と途

中に句を切つたアーサーは、身を起して、兩手にギニヾアの頰を抑へながら上より妃の顏を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、一しきり打ち返したのであらう。――王妃の頰は屍を抱くが如く冷たい。アーサーは覺えず抑へたる手を放す。折から廻廊を遠く人の踏む音がして、罵る如き幾多の聲は次第にアーサーの室に逼る。

入口に掛けたる厚き幕は總に絞らず。長く垂れて床をかくす。かの足音の戸に近くしばらくとまる時、垂れたる幕を二つに裂いて、髪多く丈高き一人の男があらはれた。モードレッドである。

モードレッドは會釋もなく室の正面迄つか〳〵と進んで、王の立てる壇の下にとゞまる。續いて入るはアグラヱン、逞ましき腕の、寛き袖を洩れて、赭き頸の、かたく衣の襟に括られて、色さへ變る程肉づける男である。二人の後には物色する遑なきに、どや〳〵と、我勝ちに亂れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと竝ぶ、數は凡てにて十二人。何事かなくては叶はぬ。

モードレッドは、王に向つて會釋せる頭を擡げて、そこ力のある聲にて云ふ。「罪あるを罰するは王者の事か」

「問はずもあれ」と答へたアーサーは今更と云ふ面持である。

「罪あるは高きをも辭せざるか」とモードレッドは再び王に向つて問ふ。

アーサーは我とわが胸を敲いて「黄金の冠は邪の頭に戴かず。天子の衣は惡を隱さず」と壇上に延び上る。肩に括る緋の衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓はば、君が傍に坐せる女をも許さじ」とモードレッドは臆する氣色もなく、一指を擧げてギニヴィアの眉間を指す。ギニヴィアは屹と立ち上る。

茫然たるアーサーは雷火に打たれたる啞の如く、わが前に立てる人——地を抽き出でし巖とばかり立てる人——を見守る。口を開けるはギニヴィアである。

「罪ありと我を誣ひるか。何をあかしに、何の罪を數へんとはする。詐りは天も照覽あれ」と纖き手を拔け出でよと空高く擧げる。

「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹の眼を後ろに投ぐれば、竝びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつゝ「神も知る、罪は逃れず」と口々に云ふ。

ギニヴィアは倒れんとする身を、危く壁掛に扶けて「ランスロット！」と幽に叫ぶ。王は迷ふ。肩に纏はる緋の衣の裏を半ば返して、右手の掌を十三人の騎士に向けたる儘にて迷ふ。

此時館の中に「黑し、黑し」と叫ぶ聲が石堞に響を反して、窈然と遠く鳴る木枯の如く傳はる。やがて河に臨む水門を、天にひゞけと、錆びたる鐵鎖に軋らせて開く音がする。室の中なる人々は顏と顏を見合はす。只事ではない。

五　舟

「鎹に卷ける絹の色に、槍突き合はす敵の目も覺むべし。ランスロットは其日の試合に、二十餘人の騎士を仆して、引き擧ぐる間際に始めて吾名をなのる。驚く人の醒めぬ間を、ラヱンと共に埒を出でたり。行く末は勿論アストラットぢや」と三日過ぎてアストラットに歸れるラヱンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉を張る。女は「あな」とのみ髮に插す花の色を顫はす。

「二十餘人の敵と渡り合へるうち、何者の槍を受け損じてか、鎧の胴を二寸下りて、左の股に創を負ふ……」

「深き創か」と女は片唾を呑んで、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪へぬ程にはあらず。夏の日の暮れ難きに暮れて、蒼き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。――二人は一言も交はさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、われは畫の試合のまたあるまじき派手やかさを偲ぶ。風渡る梢もなければ馬の沓の地を鳴らす音のみ高し。――路は分れて二筋となる」

「左へ切ればこゝ迄十哩ぢや」と老人が物知り顔に云ふ。

「ランスロットは馬の頭を右へ立て直す」

「右? 右はシヤロットへの本街道、十五哩は確かにあらう」是も老人の説明である。

「其シヤロットの方へ――後より呼ぶ吾を顧みもせで轡を鳴らして去る。已むなくて吾も從ふ。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶ける事なり。嘶く聲の果知らぬ夏野に、末廣に消えて、馬の足搖の常の如く、わが手綱の思ふ儘に運びし時は、ランスロットの影は、夜と共に微かなる奥に消えたり。――われは鞍を敲いて追ふ」

「追ひ付いてか」と父と妹は聲を揃へて問ふ。

「追ひ付ける時は既に遅くあつた。乘る馬の息の、闇押し分けて白く立ち上るを、いやがうへに鞭つて長き路を一散に馳け通す。黒きものゝ夫かとも見ゆる影が、二丁許り先に現はれたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黒きものは聞かざる眞似して行く。幽かに聞えたるは轡の音か。怪しきは差して急げる樣もなきに容易くは追ひ付かれず。漸くの事間一丁程に逼りたる時、黒きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合點行かぬわれは益追ふ。シヤロットの入口に渡したる石橋に、蹄も碎けよと乘り懸けしと思へば、馬は何物にか躓きて前足を折る。騎るわれは鬣をさかに扱いて前にのめる。戛と打つは石の上と心得しに、われより先に斃れたる人の鎧の袖なり」

「あぶない!」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

「あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロットの事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消ゆる程の聲に、椅子の端を握る。椅子の足は折れたるにあらず。

「橋の袂の柳の裏に、人住むとしも見えぬ庵室あるを、試みに敲けば、世を逃れたる隱士の居なり。幸ひと冷たき人を擔ぎ入るゝ。兜を脱げば眼さへ氷りて……」

「薬を掘り、草を煮るは隱士の常なり。ランスロットを蘇してか」と父は話し半ばに我句を投げ入るゝ。

「よみ返しはしたれ。よみに在る人と擇ぶ所はあらず。吾に歸りたるランスロットはまことの吾に歸りたるにあらず。魔に襲はれて夢に物云ふ人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪罪と叫び、あるときは王妃――ギニヴァ――シャロットと云ふ。隱士が心を込むる草の香りも、煮えたる頭には一點の涼氣を吹かず。……」

「枕邊にわれあらば」と少女は思ふ。

「一夜の後たぎりたる腦の漸く平らぎて、靜かなる昔の影のちら〳〵と心に映る頃、ランスロットはわれに去れと云ふ。心許さぬ隱士は去るなと云ふ。兎角して二日を經たり。三日目の朝、われと隱士の眠覺めて、病む人の顏色の、今朝如何あらんと臥床を窺へば――在らず。劍の先にて古壁に刻み殘せる句には罪は吾を追ひ、吾は罪を追ふとある」

「逃れしか」と父は聞き、「いづこへ」と妹はきく。

「いづこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々と吹く夏野の風の限りは知らず。西東日の通ふ境

は極めがたければ、獨り歸り來ぬ。――隱士は云ふ、病怠らで去る。かの人の身は危うし。狂ひて走る方はカメロットなるべしと。うつゝのうちに口走れる言葉にてそれと察せしと見ゆれど、われは確と、さは思はず」と語り終つて盃に盛る苦き酒を一息に飲み干して虹の如き氣を吹く。

妹は立つてわが室に入る。

花に戯むるゝ蝶のひるがへるを見れば、春に憂ありとは天下を擧げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月さへ闇に隱るゝ宵を思へ。――ふる露のしげきを思へ。――薄き翼のいかばかり薄きかを思へ。――廣き野の草の陰に、琴の爪程小きものゝ潜むを思へ。――疊む羽に置く露の重きに過ぎて、夢さへ苦しかるべし。果知らぬ原の底に、あるに甲斐なき身を縮めて、誘ふ風にも碎くる危うきを恐るゝは淋しからう。エレーンは長くは持たぬ。

エレーンは盾を眺めて居る。ランスロットの預けた盾を眺め暮して居る。其盾には丈高き女の前に、一人の騎士が跪づいて、愛と信とを誓へる模樣が描かれて居る。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地は黑に近き紺を敷く。赤き女のギニヴァなりとは憐れなるエレーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を己れと見立てゝ、跪まづけるをランスロットと思ふ折さへある。斯くあれと念ずる思ひの、いつか心の裏を拔け出でゝ、斯くの通りと盾の表にあらはれるのであらう。斯くありて後と、あらぬ礎を一度び築ける上には、そら事を重ねて、其そら事の未來さへも想像せねば已まぬ。

重ね上げたる空想は、又崩れる。兒戯に積む小石の塔を蹴返す時の如くに崩れる。崩れたるあとの吾に歸りて見れば、ランスロットは在らぬ。氣を狂ひてカメロットの遠きに走れる人の、吾が傍にあるべき所謂はなし。離るゝとも、誓さへ渝らずば、千里を繫ぐ牽き綱もあらう。ランスロットとわれは何を誓へる？エレーンの眼には涙が溢れる。

涙の中に又思ひ返す。ランスロットとそ誓はざれ。一人誓へる吾の渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とは云はじ。われとわが心にちぎるも誓には洩れず。此誓だに破らずばと思ひ詰める。エレーンの頰の色は褪せる。

死ぬ事の恐しきにあらず、死したる後にランスロットに逢ひ難きを恐るゝ。去れど此世にての逢ひ難きに比ぶれば、未來に逢ふの却つて易きかとも思ふ。罌粟散るを憂しとのみ眺むべからず、

散ればこそ又咲く夏もあり。エレーンは食を斷つた。

衰へは春野燒く火と小さき胸を侵かして、愁は衣に堪へぬ玉骨を寸々に削る。今迄は長き命とのみ思へり。よしやいつ迄もと貪る願はなくとも、死ぬと云ふ事は夢にさへ見しためしあらず、束の間の春と思ひあたれる今日となりて、つら〳〵世を觀ずれば、日に開く蕾の中にも恨はあり。圓く照る明月のあすをと問はゞ淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人である。

今は是迄の命と思ひ詰めたるとき、エレーンは父と兄とを枕邊に招きて「わが爲めにランスロットへの文かきて玉はれ」と云ふ。父は筆と紙を取り出でゝ、死なんとする人の言の葉を一々に書き付ける。

「天が下に慕へる人は君ひとりなり。君一人の爲めに死ぬるわれを憐れと思へ。陽炎燃ゆる黑髮の、長き亂れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星變る後の世迄も消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水の因果を受くる理なしと思へば。睫に宿る露の珠に、寫ると見れば碎けたる、君の面影の脆くもあるかな。わが命もしかく脆きを、涙あらば濺げ。基督も知る、死ぬる迄清き乙女なり」

書き終りたる文字は怪しげに亂れて定かならず。年寄の手の顫へたるは、老の爲とも悲の爲とも知れず。

女又云ふ。「息絶えて、身の暖かなるうち、右の手に此文を握らせ給へ。手も足も冷え盡したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ。隙間なく黑き布しき詰めたる小船の中にわれを載せ給へ。山に野に白き薔薇、白き百合を採り盡して舟に投げ入れ給へ。——舟は流し給へ」

かくしてエレーンは眼を眠る。眠りたる眼は開く期なし。父と兄とは唯々として遺言の如く、憐れなる少女の亡骸を舟に運ぶ。

古き江に漣さへ死して、風吹く事を知らぬ顏に平かである。舟は今綠り罩むる陰を離れて中流に漕ぎ出づる。櫂操るは只一人、白き髮の白き髯の翁と見ゆ。ゆるく搔く水は、物憂げに動いて、一櫂ごとに鉛の如き光りを放つ。舟は波に浮ぶ睡蓮の睡れる中に、音もせず乘り入りては乘り越して行く。蓼傾けて舟を通したるあとには、輕く曳く波足と共にしばらく搖れて花の姿は常の靜さに歸る。押し分けられた葉の再び浮き上る表には、時ならぬ露が珠を走らす。

舟は杳然として何處ともなく去る。美しき亡骸と、美しき衣と、美しき花と、人とも見えぬ一

個の翁とを載せて去る。翁は物をも云はぬ。只靜かなる波の中に長き櫂をくゞらせては、くゞらす。木に彫る人を鞭つて起たしめたるか、櫂を動かす腕の外には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、收めたる翼に、波を裂いて王者の如く悠然と水を練り行く。長き頸の高く伸したるに、氣高き姿はあたりを拂つて、恐るゝものゝありとしも見えず。うねる流を傍目もふらず、舳に立つて舟を導く。舟はいづく迄もと、鳥の羽に裂けたる波の合はぬ間を隨ふ。兩岸の柳は青い。

シャロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき聲が、左の岸より古き水の寂寞を破つて、動かぬ波の上に響く。「うつせみの世を、……うつゝ……に住めば……」絶えたる音はあとを引いて、引きたるは又しばらくに絶えんとす。聞くものは死せるエレーンと、艫に坐る翁のみ。翁は耳さへ借さぬ。只長き櫂をくゞらせてはくゞらする。思ふに聾なるべし。

空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挾む左右の柳は、一本毎に綠りをこめて濛濛と烟る。娑婆と冥府の界に立ちて迷へる人のあらば、其人の靈を竝べたるが此氣色である。畫に似たる少女の、舟に乘りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあらう。

舟はカメロットの水門に横付けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙てる樓閣の黑く水に映るのが物凄い。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニヴィアを前に、城中の男女が悉く集まる。

エレーンの屍は凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき顏を、雲と亂るゝ黃金の髮に埋めて、笑へる如く横はる。肉に付着するあらゆる肉の不淨を拭ひ去つて、靈其物の面影を口鼻の間に示せるは朗かにも又極めて淸い。苦しみも、憂ひも、恨みも、憤りも——世に忌はしきものゝ痕なければ土に歸る人とは見えず。

王は嚴かなる聲にて「何者ぞ」と問ふ。櫂の手を休めたる老人は啞の如く口を開かぬ。ギニヴィアはつと石階を下りて、亂るゝ百合の花の中より、エレーンの右の手に握る文を取り上げて何事と封を切る。

悲しき聲は又水を渡りて、「……うつくしき……戀、色や……うつらう」と細き糸ふつて波うたせたる時の如くに人々の耳を貫く。

讀み終りたるギニヴィアは、腰をのして舟の中なるエレーンの額——透き徹るエレーンの額に、

顫へたる唇をつけつゝ「美くしき少女！」と云ふ。同時に一滴の熱き涙はエレーンの冷たき頰の上に落つる。

十三人の騎士は目と目を見合せた。

趣味の遺傳

——三九、一、一〇——

一

陽氣の所爲で神も氣違になる。「人を屠りて餓えたる犬を救へ」と雲の裡より叫ぶ聲が、逆しまに日本海を撼かして滿洲の果迄響き渡つた時、日人と露人ははつと應へて百里に餘る一大屠場を朔北の野に開いた。すると渺々たる平原の盡くる下より、眼にあまる奏狗の群が、腥き風を横に截り縱に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出した樣に飛んで來た。狂へる神が小躍りして「血を啜れ」と云ふを合圖に、ぺら〳〵と吐く餤の舌は暗き大地を照らして咽喉を越す血潮の湧き返る音が聞えた。今度は黑雲の端を踏み鳴らして「肉を食へ」と神が號ぶと「肉を食へ！肉を食へ！」と犬共も一度に咆え立てる。やがてめり〳〵と腕を食ひ切る、深い口をあけて耳の根迄胴にかぶり付く。一つの脛を啣へて左右から引き合ふ。漸くの事肉は大半平げたと思ふと、又曝

暴たる雲を貫ぬいて恐しい神の聲がした。「肉の後には骨をしやぶれ」と云ふ。すはこそ骨だ。犬の齒は肉よりも骨を嚙むに適して居る。狂ふ神の作つた犬には狂つた道具が具はつて居る。今日の振舞を豫期して工夫して呉れた齒ぢや。鳴らせ鳴らせと牙を鳴らして骨にかゝる。ある者は摧いて髓を吸ひ、ある者は碎いて地に塗る。齒の立たぬ者は横にこいて牙を磨ぐ。

怖い事だと例の通り空想に耽りながらいつしか新橋へ來た。見ると停車場前の廣場は一杯の人で凱旋門を通して二間許りの路を開いた儘、左右には割り込む事も出來ない程行列して居る。何だらう？

行列の中には怪し氣な絹帽を阿彌陀に被つて、耳の御蔭で目隱しの難を喰ひ止めて居るのもある。仙臺平を窮屈さうに穿いて七子の紋付を人の着物の樣にじろ〳〵眺めて居るのもある。フロツク、コートは承知したがズツクの白い運動靴をはいて同じく白の手袋を一寸見給へと云はぬ許りに振り廻して居るのは奇觀だ。さうして二十人に一本宛位の割合で手頃な旗を押し立てゝ居る。大抵は紫に字を白く染め抜いたものだが、中には白地に黑々と達筆を振つたのも見える。此旗さへ見たら此群集の意味も大概分るだらうと思つて一番近いのを注意して讀むと木村六之助君の凱

旋を祝す連雀町有志者とあつた。はゝあ歡迎だと始めて氣が付いて見ると、先刻の異裝紳士も何となく立派に見える樣な氣がする。のみならず戰爭を狂神の所爲の樣に考へたり、軍人を犬に食はれに戰地へ行く樣に想像したのが急に氣の毒になつて來た。實は待ち合す人があつて停車場迄行くのであるが、停車場へ達するには是非共此群集を左右に見て誰も通らない眞中を只一人歩かなくつてはならん。よもやこの人々が余の詩想を洞見しはしまいが、只さへ人の注視をわれ一人に集めて往來を練つて行くのは極りが惡るいのに、犬に喰ひ殘された者の家族と聞いたら定め し怒る事であらうと思ふと、一層調子が狂ふ所を何でもない顏をして、急ぎ足に停車場の石段の上迄漕ぎ付けたのは少し苦しかつた。

場内へ這入つて見るとこゝも歡迎の諸君で容易に思ふ所へ行けぬ。漸くの事一等の待合へ來て見ると約束をした人は未だ來て居らぬらしい。暖爐の横に赤い帽子を被つた士官が何か頻りに話しながら折々佩劍をがちやつかせて居る。其傍に絹帽が二つ竝んで、其一つには葉卷の烟りが輪になつてたなびいて居る。向ふの隅に白襟の細君が品のよい五十恰好の婦人と、傍きの人には聞えぬ程な低い聲で何事か耳語いて居る。所へ唐棧の羽織を着て鳥打帽を斜めに戴いた男が來て、

入場券は貰へません改札場の中はもう一杯ですと注進する。大方出入の者であらう。室の中央に備へ付けたテーブルの周圍には待ち草臥れの連中が寄つてたかつて新聞や雜誌をひねくつて居る。眞面目に讀んでるものは極めて少ないのだから、ひねくつて居ると云ふのが適當だらう。

約束をした人は中々來ん。少々退屈になつたから、少し外へ出て見樣かと室の戸口をまたぐ途端に、脊廣を着た髭のある男が擦れ違ひながら「もう直です二時四十五分ですから」と云つた。時計を見ると二時三十分だ、もう十五分すれば凱旋の將士が見られる。こんな機會は容易にない、序だからと云つては失禮かも知れんが實際余の樣に圖書館以外の空氣をあまり吸つた事のない人間は態々歡迎の爲めに新橋迄くる折もあるまい、丁度幸だ見て行かうと了見を定めた。

室を出て見ると場内も亦往來の樣に行列を作つて、中には態々見物に來た西洋人も交つて居る。西洋人ですらくる位なら帝國臣民たる吾輩は無論歡迎しなくてはならん、萬歲の一つ位は義務にも申して行かうと漸くの事で行列の中へ割り込んだ。

「あなたも御親戚を御迎ひに御出になつたので……」

「えゝ。どうも氣が急くものですから、つい晝飯を食はずに來て、……もう二時間半許り待ち

ます」と腹は減つても中々元氣である。所へ三十前後の婦人が來て

「凱旋の兵士はみんな、こゝを通りませうか」と心配さうに聞く。大切の人を見はぐつては一大事ですと云はぬ許りの決心を示して居る。腹の減つた男はすぐ引き受けて

「えゝ、みんな通るんです、一人殘らず通るんだから、二時間でも三時間でもこゝにさへ立つて居れば間違ひつこありません」と答へたのは中々自信家と見える。然し晝飯も食はずに待つて居ろと迄は云はなかつた。

汽車の笛の音を形容して喘息病みの鯨の樣だと云つた佛蘭西の小說家があるが、成程旨い言葉だと思ふ間もなく、長蛇の如く蜿蜒くつて來た列車は、五百人餘の健兒を一度にプラットフオームの上に吐き出した。

「ついた樣ですぜ」と一人が領を延すと

「なあに、こゝに立つてさへ居れば大丈夫」と腹の減つた男は泰然として動ずる景色もない。此男から云ふと着いても着かなくても大丈夫なのだらう。夫にしても腹の減つた割には落ち付いたものである。

やがて一二丁向ふのプラットフォームの上で萬歳！と云ふ聲が聞える。其聲が波動の樣に順送りに近付いてくる。例の男が「なあに、まだ大丈……」と云ひ懸けた尻尾を埋めて余の左右に竝んだ同勢は一度に萬――歳！と叫んだ。其聲の切れるか切れぬうちに一人の將軍が擧手の禮を施しながら余の前を通り過ぎた。色の焦けた、胡麻鹽髭の小作りな人である。左右の人は將軍の後を見送りながら又萬歳を唱へる。余も――妙な話しだが實は萬歳を唱へた事は生れてから今日に至る迄一度もないのである。萬歳を唱へてはならんと誰からも申し付けられた覺は毛頭ない。又萬歳を唱へては惡るいと云ふ主義でも無論ない。然し其場に臨んでいざ大聲を發し樣とすると、いけない。小石で氣管を塞がれた樣でどうしても萬歳が咽喉笛へこびり付いたぎり動かない。どんなに奮發しても出て呉れない。――然し今日は出してやらうと先刻から決心をして居た。實は早く其機がくればよいがと待ち構へた位である。隣りの先生ぢやないが、なあに大丈夫と安心して居たのである。喘息病みの鯨が吼えた當時からそら來たなと迄覺悟をして居た位だから周圍のものがワーと云ふや否や尻馬についてすぐやらうと實は舌の根迄出しかけたのである。出しかけた途端に將軍が通つた。將軍の日に焦けた色が見えた。將軍の髭の胡麻鹽なのが見えた。其瞬間に

出しかけた萬歳がぴたりと中止して仕舞つた。何故？

何故か分るものか。何故とか此故とか云ふのは事件が過ぎてから冷靜な頭腦に復したとき當時を回想して始めて分解し得た智識に過ぎん。何故が分る位なら始めから用心をして萬歳の逆戻りを防いだ筈である。豫期出來ん咄嗟の働きに分別が出るものなら人間の歴史は無事なものである。余の萬歳は余の支配權以外に超然として止まつたと云はねばならぬ。萬歳がとまると共に胸の中に名狀しがたい波動が込み上げて來て、兩眼から二雫ばかり涙が落ちた。

將軍は生れ落ちてから色の黑い男かも知れぬ。然し遼東の風に吹かれ、奉天の雨に打たれ、沙河の日に射り付けられゝば大抵なものは黑くなる。地體黑いものは猶黑くなる。髭も其通りである。出征してから白銀の筋は幾本も殖えたであらう。今日始めて見る我等の眼には、昔の將軍と今の將軍を比較する材料がない。然し指を折つて日夜に待侘びた夫人令孃が見たならば定めし驚くだらう。戰は人を殺すか左なくば人を老いしむるものである。將軍は頗る瘠せて居た。是も苦勞の爲めかも知れん。して見ると將軍の身體中で出征前と變らぬのは身の丈位なものであらう。余の如きは黄卷青帙の間に起臥して書齋以外に如何なる出來事が起るか知らんでも濟む天下の

逸民である。平生戰爭の事は新聞で讀まんでもない、又其狀況は詩的に想像せんでもない。然し想像はどこ迄も想像で新聞は横から見ても縱から見ても紙片に過ぎぬ。だからいくら戰爭が續いても戰爭らしい感じがしない。其氣樂な人間が不圖停車場に紛れ込んで第一に眼に映じたのが日に焦けた顏と霜に染つた髯である。戰爭はまのあたりに見えぬけれど戰爭の結果――慥かに結果の一片、然も活動する結果の一片が眸底を掠めて去つた時は、此一片に誘はれて滿洲の大野を蔽ふ大戰爭の光景があり〳〵と腦裏に描出せられた。

然も此戰爭の影とも見るべき一片の周圍を繞る者は萬歲と云ふ歡呼の聲である。此聲が卽ち滿洲の野に起つた咄喊の反響である。萬歲の意義は字の如く讀んで萬歲に過ぎんが咄喊となると大分趣が違ふ。咄喊はワーと云ふ丈で萬歲の樣に意味も何もない。然し其意味のない所に大變な深い情が籠つて居る。人間の音聲には黃色いのも濁つたのも澄んだのも太いのも色々あつて、其言語調子も亦分類の出來ん位區々であるが一日二十四時間のうち二十三時間五十分迄は皆意味のある言葉を使つて居る。着衣の件、喫飯の件、談判の件、懸引の件、挨拶の件、雜話の件、凡て件と名のつくものは皆口から出る。仕舞には件がなければ口から出るものは無いと迄思ふ。そこ

へもつて來て、件のないのに意味の分らぬ音聲を出すのは尋常ではない。出しても用の足りぬ聲を使ふのは經濟主義から云ふても功利主義から云つても割に合はぬに極つて居る。其割に合はぬ聲を不作法に他人樣の御聞に入れて何等の理由もないのに罪もない鼓膜に迷惑を懸けるのはよくせきの事でなければならぬ。咄喊は此よくせきを煎じ詰めて、煮詰めて、罐詰めにした聲である。死ぬか生きるか娑婆か地獄かと云ふ際どい針線の上に立つて身震ひをするとき自然と横膈膜の底から湧き上がる至誠の聲である。助けて呉れと云ふうちに誠はあらう、殺すぞと叫ぶうちにも誠はない事もあるまい。然し意味の通ずる丈其丈誠の度は少ない。意味の通ずる言葉を使ふ丈の餘裕分別のあるうちは一心不亂の至境に達したとは申されぬ。咄喊にはこんな人間的な分子は交つて居らん。ワーと云ふのである。此ワーには厭味もなければ思慮もない。理もなければ非もない。詐りもなければ懸引もない。徹頭徹尾ワーである。結晶した精神が一度に破裂して上下四圍の空氣を震盪さしてワーと鳴る。萬歲の助けて呉れの殺すぞのとそんなけちな意味を有しては居らぬ。ワー其物が直ちに精神である。靈である。人間である。誠である。而して人界崇高の感は耳を傾けて此誠を聽き得たる時に始めて享受し得ると思ふ。耳を傾けて數十人、數百人、數千數萬人の

誠を一、度に聽き得たる時に此の崇高の感は始めて無上絶大の玄境に入る。――余が將軍を見て流した涼しい涙は此玄境の反應だらう。

將軍のあとに續いてオリーヴ色の新式の軍服を着けた士官が二三人通る。此は出迎へと見えて其表情が將軍とは大分違ふ。居は氣を移すと云ふ孟子の語は小供の時分から聞いて居たが戰爭から歸つた者と內地に暮らした人とは斯程に顏付が變つて見えるかと思ふと一層感慨が深い。どうかもう一遍將軍の顏が見たいものだと延び上つたが駄目だ。只場外に群がる數萬の市民が有らん限りの鬨を作つて停車場の硝子窓が破れる程に響くのみである。余の左右前後の人々は漸くに列を亂して入口の方へなだれかゝる。見たいのは余と同感と見える。余も黑い波に押されて一二間石段の方へ流れたが、それぎり先へは進めぬ。こんな時には余の性分としていつでも損をする。寄席がはねて木戶を出る時、待ち合せて電車に乘る時、人込みに切符を買ふ時、何でも多人數競爭の折には大抵最後に取り殘される、此場合にも先例に洩れず首尾よく人後に落ちた。而も普通の落ち方ではない。遙かこなたの人後だから心細い。葬式の赤飯に手を出し損つた時なら何とも思はないが、帝國の運命を決する活動力の斷片を見損ふのは殘念である。どうにかして見てやり

たい。廣場を包む萬歲の聲は此時四方から大濤の岸に崩れる樣な勢で余の鼓膜に響き渡つた。もうたまらない。どうしても見なければならん。

不圖思ひついた事がある。去年の春麻布のさる町を通行したら高い練塀のある廣い屋敷の內で何か多人數打ち寄つて遊んでゞも居るのか面白さうに笑ふ聲が聞えた。余は此時どう云ふ腹工合か一寸此邸內を覗いて見たくなつた。全く腹工合の所爲に相違ない。腹工合でなければ、そんな馬鹿氣た了見の起る譯がない。源因はとにかく、見たいものは見たいので源因の如何に因つて變化出沒する譯には行かぬ。然し今云ふ通り高い土塀の向ふ側で笑つて居るのだから壁に穴のあいて居らぬ限りは到底思ひ通り志望を滿足する事は何人の手際でも出來かねる。到底見る事が叶はないと四圍の狀況から宣告を下されると猶見てやり度なる。愚な話だが余は一目でも邸內を見なければ誓つて此町を去らずと決心した。然し案內も乞はずに人の屋敷內に這入り込むのは盜賊の仕業だ。と云つて案內を乞ふて這入るのは猶いやだ。此邸內の者共の御世話にならず、しかもわが人格を傷けず正々堂々と見なくては心持ちがわるい。さうするには高い山から見下すか、風船の上から眺めるより外に名案もない。然し雙方共當座の間に合ふ樣な手輕なものとは云へぬ。よ

し、その儀なら此方にも覺悟がある。高等學校時代で練習した高飛の術を應用して、飛び上がつた時に一寸見てやらう。是は妙策だ、幸い人通りもなし、あつた所が自分で自分が飛び上るに文句をつけられる因緣はない。やるべしと云ふので、突然雙脚に精一杯の力を込めて飛び上がつた。すると熟練の結果は恐ろしい者で、かの土塀の上へ首が――首所ではない肩迄が思ふ樣に出た。此機をはづすと到底目的は達せられぬと、ちらつく兩眼を無理に据ゑて、こゝぞと思ふあたりを瞥見すると女が四人でテニスをして居た。余が飛び上がるのを相圖に四人が申し合せた樣にホヽホと癇の高い聲で笑つた。おやと思ふうちにどたりと元の如く地面の上に立つた。

これは誰が聞いても滑稽である。冒險の主人公たる當人ですらあまり馬鹿氣て居るので今日迄何人にも話さなかつた位自ら滑稽と心得て居る。然し滑稽とか眞面目とか云ふのは相手と場合によつて變化する事で、高飛び其物が滑稽とは理由のない言草である。女がテニスをして居る所へ此方が飛び上がつたから滑稽にもなるが、ロメオがジュリエットを見る爲に飛び上つたつて滑稽にはならない。ロメオ位な所では未だ滑稽を脫せぬと云ふなら余は猶一歩を進める。此凱旋の將軍、英名赫々たる偉人を拜見する爲めに飛び上がるのは滑稽ではあるまい。それでも滑稽か知ら

ん？滑稽だつて構ふものか。見たいものは、誰が何と云つても見たいのだ。飛び上がらう、夫がいゝ、飛び上がるに若くなしだと、とう〳〵又先例によつて一蹴を試むる事に決着した。先づ帽子をとつて小脇に抱い込む。此前は經驗が足りなかつたので足が引力作用で地面へ引き着けられた勢に、買ひたての中折帽が挨拶もなく宙返りをして、一間許り向へ轉がつた。夫をから車を引いて通り掛つた車夫が拾つて笑ひながらえへゝと差し出した事を記憶して居る。此度は其手は喰はぬ。是なら大丈夫と帽子を確と抑へながら爪先で敷石を彈く心持で暗に姿勢を整へる。人後に落ちた仕合せには邪魔になる程近くに人も居らぬ。しばし衰へた、歡聲は盛り返す潮の岩に碎けた樣にあたり一面に湧き上がる。こゝだと思ひ切つて、兩足が胴のなかに飛び込みはしまいかと疑ふ程脚力をふるつて跳ね上つた。

幌を開いたランドウが横向に凱旋門を通り抜け樣とする中に――居た――居た。例の黑い顏が湧き返る聲に圍まれて過去の紀念の如く華やかなる群衆の中に點じ出されて居た。將軍を迎へた儀仗兵の馬が萬歲の聲に驚ろいて前足を高くあげて人込の中に外れ樣とするのが見えた。將軍の馬車の上に紫の旗が一流れ颯となびくのが見えた。新橋へ曲る角の三階の宿屋の窓から藤鼠の着

物をきた女が白いハンケチを振るのが見えた。

見えたと思ふより早く余が足は又停車場の床の上に着いた。凡てが一瞬間の作用である。ぱつと射る稻妻の飽く迄明るく物を照らした後が常よりは暗く見える様に余は茫然として地に下りた。

將軍の去つたあとは群衆も自から亂れて今迄の様に靜肅ではない。列を作つた同勢の一角が崩れると、堅い黑山が一度に動き出して濃い所が漸々薄くなる。氣早な連中はもう引き揚げると見える。所へ將軍と共に汽車を下りた兵士が三々五々隊を組んで場内から出てくる。服地の色は褪めて、ゲートルの代りには黃な羅紗を疊んでぐる〳〵と脛へ卷き付けて居る。いづれもあらん限りの髯を生やして、出來る丈色を黑くして居る。是等も戰爭の片破れである。大和魂を鑄固めた製作品である。實業家も入らぬ、新聞屋も入らぬ、藝妓も入らぬ、余の如く書物と睨めくらをして居るものは無論入らぬ。只此髯茫々として、むさくるしき事乞食を去る遠からざる紀念物のみはなくて叶はぬ。彼等は日本の精神を代表するのみならず、廣く人類一般の精神を代表して居る。人類の精神は算盤で彈けず、三味線に乘らず、三頁にも書けず、百科全書中にも見當らぬ。只此兵士等の色の黑い、みすぼらしい所に髣髴として搖曳して居る。出山の釋迦はコスメチツクを塗

つては居らん。金の指輪も穿めて居らん。芥溜から拾ひ上げた雜巾をつぎ合せた様なもの一枚を羽織つて居る許りぢや。夫すら全身を掩ふには足らん。胸のあたりは北風の吹き拔けで、肋骨の枚數は自由に讀める位だ。此釋迦が尊ければ此兵士も尊といと云はねばならぬ。昔し元寇の役に時宗が佛光國師に謁した時、國師は何と云ふた。威を振つて驀地に進めと吼えたのみである。このむさくろしき兵士等は佛光國師の熱喝を喫した譯でもなからうが驀地に進むと云ふ禪機に於て時宗と古今其揆を一にして居る。彼等は驀地に進み了して曠如と吾家に歸り來りたる英靈漢である。天上を行き天下を行き、行き盡してやまざる底の氣魄が吾人の尊敬に價せざる以上は八荒の中に尊敬すべきものは微塵程もない。黑い顏！中には日本に籍があるのかと怪まれる位黑いのが居る。――刈り込まざる髯！棕櫚箒を砧で打つた様な髯――此氣魄は這裏に磅礴として蟠まり沈澱として漲つて居る。

兵士の一隊が出てくる度に公衆は萬歲を唱へてやる。彼等のあるものは例の黑い顏に笑を湛へて嬉し氣に通り過ぎる。あるものは傍目もふらずのそ〳〵と行く。歡迎とは如何なる者ぞと不審氣に見える顏もたまには見える。又ある者は自己の歡迎旗の下に立つて揚々と後れて出る同輩を

眺めて居る。あるひは石段を下るや否や迎のものに擁せられて、餘りの不意撃に挨拶さへも忘れて誰彼の容赦なく握手の禮を施こして居る。出征中に滿洲で覺えたのであらう。

其中に――是がはからずも此話をかく動機になつたのであるが――年の頃二十八九の軍曹が一人居た。顏は他の先生方と異なる所なく黑い、髯も延びる丈延ばして恐らくは去年から持ち越したものと思はれるが目鼻立ちは外の連中とは比較にならぬ程立派である。のみならず亡友浩さんと兄弟と見違へる迄よく似て居る。實は此男が只一人石段を下りて出た時ははつと思つて馳け寄らうとした位であつた。然し浩さんは下士官ではない。志願兵から出身した步兵中尉である。しかも故步兵中尉で今では白山の御寺に一年餘も厄介になつて居る。だからいくら浩さんだと思ひたくつても思へる筈がない。但人情は妙なもので此軍曹が浩さんの代りに旅順で戰死して、浩さんが此軍曹の代りに無事で還つて來たら嘸結構であらう。御母さんも定めし喜ばれるであらうと、露見する氣支がないものだから勝手な事を考へながら眺めて居た。軍曹も何か物足らぬと見えて頻りにあたりを見廻して居る。外のものゝ樣に足早に新橋の方へ立ち去る景色もない。何を探がして居るのだらう、もしや東京のものでなくて樣子が分らんのなら敎へて遣りたいと思つて猶目

を放さずに打ち守つて居ると、どこをどう潛り拔けたものやら、六十許りの婆さんが飛んで出て、いきなり軍曹の袖にぶら下がつた。軍曹は中肉ではあるが脊は普通より慥かに二寸は高い。之に反して婆さんは人並外れて丈が低い上に年のせいで腰が少々曲つて居るから、抱き着いたとも寄り添ふたとも形容は出來ぬ。もし余が腦中にある和漢の字句を傾けて、其中から此有樣を敍するに最も適當なる詞を探したなら必ずぶら下がるが當選するにきまつて居る。此時軍曹は紛失物が見當つたと云ふ風で上から婆さんを見下す。婆さんはやつと迷兒を見付けたと云ふ體で下から軍曹を見上げる。やがて軍曹はあるき出す。婆さんもあるき出す。矢張りぶらさがつた儘である。近邊に立つ見物人は萬歲々々と兩人を囃したてる。婆さんは萬歲抔には毫も耳を借す景色はない。ぶら下がつたぎり軍曹の顏を下から見上げた儘吾が子に引き摺られて行く。冷飯草履と鋲を打つた兵隊靴が入り亂れ、もつれ合つて、うねりくねつて新橋の方へ遠かつて行く。余は浩さんの事を思ひ出して悵然と草履と靴の影を見送つた。

二

浩さん！浩さんは去年の十一月旅順で戰死した。二十六日は風の強く吹く日であつたさうだ。遼東の大野を吹きめぐつて、黑い日を海に吹き落さうとする野分の中に、松樹山の突擊は豫定の如く行はれた。時は午後一時である。掩護の爲めに味方の打ち出した大砲が敵壘の左突角に中つて五丈程の砂烟りを捲き上げたのを相圖に、散兵壕から飛び出した兵士の數は幾百か知らぬ。蟻の穴を蹴返した如くに散り〳〵に亂れて前面の傾斜を攀ぢ登る。見渡す山腹は敵の敷いた鐵條網で足を容るゝ餘地もない。所を梯子を擔ひ土囊を脊負つて匝々に通り拔ける。工兵の切り開いた二間に足らぬ路は、先を爭ふ者の爲めに奪はれて、後より詰めかくる人の勢に波を打つ。こちらから眺めると只一筋の黑い河が山を裂いて流れる樣に見える。其黑い中に敵の彈丸は容赦なく落ちかゝつて、凡てが消え失せたと思ふ位濃い烟が立ち揚る。怒る野分は横さまに烟りを千切つて遙かの空に攫つて行く。あとには依然として黑い者が簇然と蠢めいて居る。此蠢めいて居るもののうちに浩さんが居る。

火桶を中に浩さんと話をするときには浩さんは大きな男である。色の淺黑い髭の濃い立派な男である。浩さんが口を開いて興に乘つた話をするときは、相手の頭の中には浩さんの外何もない。

今日の事も忘れ明日の事も忘れ聽き惚れて居る自分の事も忘れて浩さん丈になつて仕舞ふ。浩さんは斯樣に偉大な男である。どこへ出しても浩さんなら大丈夫、人の目に着くに極つて居ると思つて居た。だから蠢めいて居る抔と云ふ下等な動詞は浩さんに對して用ひたくない。ないが仕方がない。現に蠢めいて居る。鍬の先に掘り崩された蟻群の一匹の如く蠢めいて居る。杓の水を喰つた蜘蛛の子の如く蠢めいて居る。如何なる人間もかうなると駄目だ。大いなる山、大いなる空、千里を馳け拔ける野分、八方を包む烟り、鑄鐵の咽喉から吼えて飛ぶ丸——是等の前には如何なる偉人も偉人としては認められぬ。俵に詰めた大豆の一粒の如く無意味に見える。嗚呼浩さん！一體どこで何をして居るのだ？早く平生の浩さんになつて一番露助を驚かしたらよからう。

黑くむらがる者は丸を浴びる度にばつと消える。消えたかと思ふと吹き散る烟の中に動いて居る。消えたり動いたりして居るうちに、蛇の塀をわたる樣に頭から尾迄波を打つて然も全體が全體として漸々上へ上へと登つて行く、もう敵壘だ。浩さん眞先に乘り込まなければいけない。烟の絶間から見ると黑い頭の上に旗らしいものが靡いて居る。風の強い爲めか、押し返される所爲か、眞直ぐに立つたと思ふと寢る。落ちたのかと驚ろくと又高くあがる。すると又斜めに仆れか

かる。浩さんだ、浩さんだ。浩さんに相違ない。多人數集まつて揉みに揉んで騷いで居る中にも
し一人でも人の目につくものがあれば浩さんに違ない。自分の妻は天下の美人である。此天下の
美人が晴れの席へ出て隣りの奥樣と撰ぶ所なく一向目立たぬのは不平な者だ。己れの子が己れの
家庭にのさばつて居る間は天にも地にも懸替のない若旦那である。此若旦那が制服を着けて學校
へ出ると、向ふの小間物屋のせがれと席を列べて、しかも其間に少しも懸隔のない樣に見えるの
は一寸物足らぬ感じがするだらう。余の浩さんに於るも其通り。浩さんはどこへ出しても平生の
浩さんらしくなければ氣が濟まん。擂鉢の中に攪き廻される里芋の如く紛然雜然とゴロ〳〵して
居てはどうしても浩さんらしくない。だから、何でも構はん、旗を振らうが、劍を翳さうが、と
にかく此混亂のうちに少しなりとも人の注意を惹くに足る働をするものを浩さんにしたい。した
い段ではない。必ず浩さんに極つて居る。どう間違つたつて浩さんが碌々として頭角をあらはさ
ない抔と云ふ不見識な事は豫期出來んのである。――夫だからあの旗持は浩さんだ。
黑い塊りが敵壘の下迄來たから、もう壘壁を攀ぢ上るだらうと思ふうち、忽ち長い蛇の頭はぽ
つりと二三寸切れてなくなつた。是は不思議だ。丸を喰つて斃れたとも見えない。狙擊を避ける

爲め地に寢たとも見えない。どうしたのだらう。すると頭の切れた蛇が又二三寸ぷつりと消えて
なくなつた。是は妙だと眺めて居ると、順繰に下から押し上る同勢が同じ所へ來るや否や忽ちな
くなる。しかも砦の壁には誰一人としてとり付いたものがない。塹壕だ。敵壘と我兵の間には此
邪魔物があつて、此邪魔物を越さぬ間は一人も敵に近く事は出來んのである。彼等はえい〳〵と
鐵條網を切り開いた急坂を登りつめた揚句、此壕の端迄來て一も二もなく此深い溝の中に飛び込
んだのである。擔つて居る梯子は壁に懸ける爲め、脊負つて居る土嚢は壕を埋める爲めと見えた。
壕はどの位埋つたか分らないが、先の方から順々に飛び込んではなくなり、飛び込んではなくな
つてとう〳〵浩さんの番に來た。愈浩さんだ。確かりしなくてはいけない。
高く差し上げた旗が横に靡いて寸斷々々に散るかと思ふ程强く風を受けた後、旗竿が急に傾い
て折れたなと疑ふ途端に浩さんの影は忽ち見えなくなつた。愈飛び込んだ！折から二龍山の方
面より打ち出した大砲が五六發、大空に鳴る烈風を劈いて一度に山腹に中つて山の根を吹き切る
許り轟き渡る。迸しる砂烟は淋しき初冬の日蔭を籠めつくして、見渡す限りに有りとある物を封
じ了る。浩さんはどうなつたか分らない。氣が氣でない。あの烟の吹いて居る底だと見當をつけ

て一心に見守る。夕立を遠くから望む様に密に蔽ひ重なる濃き者は、烈しき風の捲返してすくひ去らうと焦る中に依然として凝り固つて動かぬ。約二分間は眼をいくら擦つても盲目同然どうする事も出來ない。然し此烟りが晴れたら――若し此烟りが散り盡したら、屹度見えるに違ない。浩さんの旗が壕の向側に日を射返して耀き渡つて見えるに違ない。否向側を登りつくしてあの高く見える堞の上に翻〻と翻つて居るに違ない。外の人なら兎に角浩さんだから、その位の事は必ずあるに極つて居る。早く烟が晴れゝばいゝ。何故晴れんだらう。

占めた。敵壘の右の端の突角の所が朧氣に見え出した。中央の厚く築き上げた石壁も見え出した。然し人影はない。はてな、もうあすこ等に旗が動いて居る筈だが、どうしたのだらう。それでは壁の下の土手の中頃に居るに相違ない。烟は拭ふが如く一掃に上から下迄漸次に晴れ渡る。浩さんはどこにも見えない。是はいけない。田螺の様に蠢めいて居たほかの連中もどこにも出現せぬ様子だ。愈いけない。もう出るか知らん、五秒過ぎた。まだか知らん、十秒立つた。五秒は十秒と變じ、十秒は二十、三十と重なつても誰一人の塹壕から向ふへ這ひ上る者はない。ない筈である。塹壕に飛び込んだ者は向へ渡す爲めに飛び込んだのではない。死ぬ爲めに飛び込んだの

である。彼等の足が壕底に着くや否や穹窖より覘を定めて打ち出す機關砲は、杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音がして瞬く間に彼等を射殺した。殺されたものが這ひ上がれる筈がない。石を置いた澤庵の如く積み重なつて、人の眼に觸れぬ坑内に横はる者に、向へ上がれと望むのは、望むものゝ無理である。横はる者だつて上がりたいだらう、上りたければこそ飛び込んだのである。いくら上がり度ても、手足が利かなくては上がれぬ。眼が暗んでは上がれぬ。胴に穴が開いては上がれぬ。血が通はなくなつても、腦味噌が潰れても、肩が飛でも身體が棒の様に鯱張つても上がる事は出來ん。二龍山から打出した砲烟が散じ盡した時に上がれぬ許りではない。寒い日が旅順の海に落ちて、寒い霜が旅順の山に降つても上がる事は出來ん。ステツセルが開城して二十の砲砦が悉く日本の手に歸しても上る事は出來ん。日露の講和が成就して乃木將軍が目出度凱旋しても上がる事は出來ん。百年三萬六千日乾坤を提げて迎に來ても上がる事は遂に出來ぬ。是が此塹壕に飛び込んだものゝ運命である。而して亦浩さんの運命である。蠢々として御玉杓子の如く動いて居たものは突然と此底のない坑のうちに落ちて、浮世の表面から闇の裡に消えて仕舞つた。旗を振らうが振るまいが、人の目につかうがつくまいが斯うなつて見ると變りはない。浩

さんがしきりに旗を振つた所はよかつたが、壕の底では、ほかの兵士と同じ様に冷たくなつて死んで居たさうだ。

ステツセルは降つた。講和は成立した。將軍は凱旋した。兵隊も歡迎された。然し浩さんはまだ坑から上つて來ない。圖らず新橋へ行つて色の黑い將軍を見、色の黑い軍曹を見、脊の低い軍曹の御母さんを見て涙迄流して愉快に感じた。同時に浩さんは何故壕から上がつて來んのだらうと思つた。浩さんにも御母さんがある。此軍曹のそれの様に脊は低くない、又冷飯草履を穿いた事はあるまいが、もし浩さんが無事に戰地から歸つてきて御母さんが新橋へ出迎へに來られたとすれば、矢張りあの婆さんの様にぶら下がるかも知れない。浩さんもプラツトフオームの上で物足らぬ顏をして御母さんの群集の中から出てくるのを待つだらう。それを思ふと可哀さうなのは坑を出て來ない浩さんよりも、浮世の風にあたつて居る御母さんだ。塹壕に飛び込む迄は兎に角、飛び込んで仕舞へば夫迄である。婆婆の天氣は晴であらうとも曇であらうとも頓着はなからう。然し取り殘された御母さんはさうは行かぬ。そら雨が降る、垂れ籠めて浩さんの事を思ひ出す。そら晴れた、表へ出て浩さんの友達に逢ふ。歡迎で國旗を出す、あれが生きて居たらと愚痴つぽ

くなる。洗湯で年頃の娘が湯を汲んで呉れる、あんな嫁が居たらと昔を偲ぶ。是では生きて居るのが苦痛である。それも子福者であるなら一人なくなつても、あとに慰めてくれるものもある。然し親一人子一人の家族が半分缺けたら、瓢箪の中から折れたと同じ様なものでしめ括りがつかぬ。軍曹の婆さんではないが年寄りのぶら下がるものがない。御母さんは今に浩一が歸つて來たらばと、皺だらけの指を日夜に折り盡してぶら下がる日を待ち焦がれたのである。其ぶら下がる當人は旗を持つて思ひ切りよく塹壕の中へ飛び込んで、今に至る迄上がつて來ない。白髪は增したかも知れぬが將軍は歡呼の裡に歸來した。色は黑くなつても軍曹は得意にプラツトフオームの上に飛び下りた。白髪にならうと日に燒け様と歸りさへすればぶら下がるに差し支へはない。右の腕を繃帶で釣るして左の足が義足と變化しても歸りさへすれば構はん、構はんと云ふのに浩さんは依然として坑から上がつて來ない。是でも上がつて來ないなら御母さんの方からあとを追ひかけて坑の中へ飛び込むより仕方がない。

幸ひ今日は閑だから浩さんのうちへ行つて、久し振りに御母さんを慰めてやらう？慰めに行くのはいゝがあすこへ行くと、行く度に泣かれるので困る。先達て抔は一時間半許り泣き續けに泣

かれて、仕舞には大抵な挨拶はし盡して、大に應對に窮した位だ。其時御母さんはせめて氣立ての優しい嫁でも居りましたら、こんな時には力になりますのにと頻りに嫁々と繰り返して大に余を困らせた。それも一段落告げたからもう善からうと御免蒙りかけると、あなたに是非見て頂くものがあると云ふから、何ですと聽いたら浩一の日記ですと云ふ。成程亡友の日記は面白からう。元來日記と云ふものは其日〳〵の出來事を書き記るすのみならず、又時々刻々の心ゆきを遠慮なく吐き出すものだから、如何に親友の手帳でも斷りなしに目を通す譯には行かぬが、御母さんが承諾する——否先方から依賴する以上は無論興味のある仕事に相違ない。だから御母さんに讀んでくれと云はれたときは大に乘氣になつて夫は是非見せて頂戴と迄云はうと思つたが、此上又日記で泣かれる樣な事があつては大變だ。到底余の手際では切り拔ける譯には行かぬ。ことに時刻を限つてある人と面會の約束をした刻限も逼つて居るから、是は追つて改めて上がつて緩々拜見を致す事に願ひませうと逃げ出した位である。以上の理由で訪問はちと辟易の體である。尤も日記は讀みたくない事もない。泣かれるのも少しなら厭とは云はない。元々木や石で出來上つたと云ふ譯ではないから人の不幸に對して一滴の同情位は優に表し得る男であるが如何せん性來餘り

口の製造に念が入つて居らんので應對に窮する。御母さんがまああなた聞いて下さいましと啜り上げてくると、何と受けていゝか分らない。夫を無理矢理に體裁を繕ろつて半間に調子を合せ樣とすると折角の慰藉的好意が水泡と變化するのみならず、時には思ひも寄らぬ結果を呈出して熱湯と迄沸騰する事がある。是では慰めに行つたのか怒らせに行つたのか先方でも了解に苦しむだらう。行きさへしなければ藥も盛らん代りに毒も進めぬ譯だから危險はない。訪問は何れ其内として、まづ今日は見合せ樣。

訪問は見合せる事にしたが、昨日の新橋事件を思ひ出すと、どうも浩さんの事が氣に掛つてならない。何等かの手段で親友を弔つてやらねばならん。悼亡の句抔は出來る柄でない。文才があれば平生の交際を其儘記述して雜誌にでも投書するが此筆では夫も駄目と。何かないかな？うむある〳〵寺參りだ。浩さんは松樹山の塹壕からまだ上つて來ないが其紀念の遺髪は遙かの海を渡つて駒込の寂光院に埋葬された。こゝへ行つて御參りをしてきやうと西片町の吾家を出る。

冬の取つ付きである。小春と云へば名前を聞いてさへ熟柿の樣ないゝ心持になる。ことに今年はいつになく暖かなので袷羽織に綿入一枚の出で立ちさへ輕々とした快い感じを添へる。先の斜

めに減つた杖を振り廻しながら寂光院と大師流に古い紺青で彫りつけた額を眺めて門を這入ると、精舍は格別なもので門内は蕭條として一塵の痕も留めぬ程掃除が行き屆いて居る。是はうれしい。肌の細かな赤土が泥濘りもせず干乾びもせず、ねつとりとして日の色を含んだ景色程難有いものはない。西片町は學者町か知らないが雅な家は無論の事、落ちついた土の色さへ見られない位近頃は住宅が多くなつた。學者がそれ丈殖えたのか、或は學者がそれ丈不風流なのか、まだ研究して見ないから分らないが、かうやつて廣々とした境内へ來ると、平生は學者町で滿足を表して居た眼にも何となく坊主の生活が羨しくなる。門の左右には周圍二尺程な赤松が泰然として控へて居る。大方百年位前から斯の如く控へて居るのだらう。鷹揚な所が頼母しい。神無月の松の落葉とか昔は稱へたものださうだが葉を振つた景色は少しも見えない。只蟠つた根が奇麗な土の中から瘤だらけの骨を一二寸露はして居る許りだ。老僧か、小坊主か納所かあるひは門番が凝性で大方日に三度位掃くのだらう。松を左右に見て半町程行くとつき當りが本堂で、其右が庫裏である。本堂の正面にも金泥の額が懸つて、鳥の糞か、紙を嚙んで叩きつけたのか點々と筆者の神聖を汚がして居る。八寸角の欅柱には、のたくつた草書の聯が讀めるなら讀んで見ろと澄してかゝ

つて居る。成程讀めない。讀めない所を以て見ると餘程名家の書いたものに違ひない。ことによると王羲之かも知れない。えらさうで讀めない字を見ると余は必ず王羲之にしたくなる。王羲之にしないと古い妙な感じが起らない。本堂を右手に左へ廻ると墓場である。墓場の入口には化銀杏がある。但し化の字は余のつけたのではない。聞く所によると此界隈で寂光院のばけ銀杏と云へば誰も知らぬ者はないさうだ。然し何が化けたつて、こんなに高くはなりさうもない。三抱もあらうと云ふ大木だ。例年なら今頃はとくに葉を振つて、から坊主になつて、野分のなかに唸つて居るのだが、今年は全く破格な時候なので、高い枝が悉く美しい葉をつけて居る。下から仰ぐと目に餘る黄金の雲が、穏かな日光を浴びて、所々鼈甲の様に輝くからまぼしい位見事である。其雲の塊りが風もないのにはら〳〵と落ちてくる。無論薄い葉の事だから落ちても音はしない、落ちる間も亦頗る長い。枝を離れて地に着く迄の間に或は日に向ひ或は日に背いて色々な光を放つ。色々に變りはするものゝ急ぐ景色もなく、至つて豐かに、至つてしとやかに降つて來る。だから見て居ると落つるのではない、空中を搖曳して遊んで居る様に思はれる。閑靜である。——凡てのものゝ動かぬのが一番閑靜だと思ふのは間違つて居る。動かない大面積の中に一點が動く

から一點以外の靜さが理解出來る。しかも其一點が動くと云ふ感じを過重ならしめぬ位、否其一點の動く事其れ自らが定寂の姿を帶びて、しかも他の部分の靜肅な有樣を反思せしむるに足る程に靡いたなら――其時が一番閑寂の感を與へる者だ。銀杏の葉の一陣の風なきに散る風情は正に是である。限りもない葉が朝、夕を厭はず降つてくるのだから、木の下は、黑い地の見えぬ程扇形の小さい葉で敷きつめられて居る。さすがの寺僧もこゝ迄は手が屆かぬと見えて、當座は掃除の煩を避けたものか、又は堆かき落葉を興ある者と眺めて、打ち棄てゝ置くのか。兎に角美しい。

しばらく化銀杏の下に立つて、上を見たり下を見たり佇んで居たが、漸くの事幹のもとを離れて愈墓地の中へ這入り込んだ。此寺は由緒のある寺ださうで所々に大きな蓮臺の上に据ゑつけられた石塔が見える。右手の方に柵を控へたのには梅花院殿瘠鶴大居士とあるから大方大名か旗本の墓だらう。中には至極簡略で尺たらずのもある。慈雲童子と楷書で彫つてある。小供だから小さい譯だ。此外石塔も澤山ある、戒名も飽きる程彫り付けてあるが、申し合はせた樣に古いの許りである。近頃になつて人間が死なゝくなつた譯でもあるまい、矢張り從前の如く相應の亡者は、年々御客樣となつて、あの剝げかゝつた額の下を潛るに違ない。然し彼等が一度び化銀杏の

下を通り越すや否や急に古る佛となつて仕舞ふ。何も銀杏の所爲と云ふ譯でもなからうが、大方の檀家は寺僧の懇請で、餘り廣くない墓地の空所を狹めずに、先祖代々の墓の中に新佛を祭り込むからであらう。浩さんも祭り込まれた一人である。

浩さんの墓は古いと云ふ點に於て此の古い卵塔婆内で大分幅の利く方である。墓はいつ頃出來たものか確とは知らぬが、何でも浩さんの御父さんが這入り、御爺さんも這入り、其又御爺さんも這入つたとあるから決して新らしい墓とは申されない。古い代りには形勝の地を占めて居る。隣り寺を境に一段高くなつた土手の上に三坪程な平地があつて石段を二つ踏んで行き當りの眞中にあるのが、御爺さんも御父さんも浩さんも同居して眠つて居る河上家代々之墓である。極めて分り易い。化銀杏を通り越して一筋道を北へ二十間歩けばよい。余は馴れた所だから例の如く例の路をたどつて半分程來て、ふと何の氣なしに眼をあげて自分の詣るべき墓の方を見た。

見ると！もう來て居る。誰だか分らないが後ろ向になつて頻りに合掌して居る樣子だ。はてな。誰だらう。誰だか分り樣はないが、遠くから見ても男でない丈は分る。恰好から云つても慥かに女だ。女なら御母さんか知らん。余は無頓着の性質で女の服裝抔は一向不案内だが、御母さんは

大抵黒繻子の帶をしめて居る。所が此女の帶は――後から見ると最も人の注意を惹く、女の背中一杯に廣がつて居る帶は決して黒つぽいものでもない。光彩陸離たる矢鱈に奇麗なものだ。若い女だ！と余は覺えず口の中で叫んだ。かうなると余は少々ばつがわるい。進むべきものか退くべきものか一寸留つて考へて見た。女は夫とも知らないから、しやがんだ儘熱心に河上家代々の墓を禮拜して居る。どうも近寄りにくい。去ればと云つて逃げる程惡事を働いた覺はない。どうしやうと迷つて居ると女はすつくら立ち上がつた。後ろは隣りの寺の孟宗藪で寒い程綠りの色が茂つて居る。其の滴たる許り深い竹の前にすつくりと立つた。背景が北側の日影で、黒い中に女の顏が浮き出した樣に白く映る。眼の大きな頰の緊つた領の長い女である。右の手をぶらりと垂れて、指の先でハンケチの端をつかんで居る。其ハンケチの雪の樣に白いのが、暗い竹の中に鮮かに見える。顏とハンケチの淸く染め拔かれた外は、あつと思つた瞬間に余の眼には何物も映らなかつた。

余が此年になる迄に見た女の數は夥しいものである。往來の中、電車の上、公園の內、音樂會、劇場、緣日、隨分見たと云つて宜しい。然し此時程驚ろいた事はない。此時程美しいと思つた事

はない。余は浩さんの事も忘れ、墓詣りに來た事も忘れ、極りが惡るいと云ふ事さへ忘れて白い顏と白いハンケチ許り眺めて居た。今迄は人が後ろに居やうとは夢にも知らなかつた女も、歸らうとして歩き出す途端に、茫然として佇ずんで居る余の姿が眼に入つたものと見えて、石段の上に一寸立ち留まつた。下から眺めた余の眼と上から見下す女の視線が五間を隔てゝ互に行き當つた時、女はすぐ下を向いた。すると飽く迄白い頰に裏から朱を溶いて流した樣な濃い色がむらむらと煮染み出した。見るうちに夫が顏一面に廣がつて耳の付根迄眞赤に見えた。是は氣の毒な事をした。化銀杏の方へ逆戻りを仕樣。いやさうすれば却つて忍び足に後でもつけて來た樣に思はれる。と云つて茫然と見とれて居ては猶失禮だ。死地に活を求むと云ふ兵法もあると云ふ話しだから是は勢よく前進するに若くはない。墓場へ墓詣りをしに來たのだから別に不思議はあるまい。只躊躇するから怪しまれるのだ。と決心して例のステツキを取り直して、つか〳〵と女の方にあるき出した。すると女も俯向いた儘歩を移して石段の下で逃げる樣に余の袖の傍を擦りぬける。ヘリオトロープらしい香りがぷんとする。香が高いので、小春日に照りつけられた袷羽織の脊中からしみ込んだ樣な氣がした。女が通り過ぎたあとは、やつと安心して何だか我に歸つた風に落

ち付いたので、元來何者だらうと又振り向いて見る。すると運悪く又眼と眼が行き合つた。此度は余は石段の上に立つてステツキを突いて居る。女は化銀杏の下で、行きかけた體を斜めに捩つて此方を見上げて居る。銀杏は風なきに猶ひら〳〵と女の髪の上、袖の上、帶の上へ舞ひさがる。時刻は一時か一時半頃である。丁度去年の冬浩さんが大風の中を旗を持つて散兵壕から飛び出した時である。空は研ぎ上げた劍を懸けつらねた如く澄んで居る。秋の空の冬に變る間際程高く見える事はない。羅に似た雲の、微かに飛ぶ影も眸の裡には落ちぬ。羽根があつて飛び登ればどこまでも飛び登れるに相違ない。然しどこ迄昇つても昇り盡せはしまいと思はれるのが此空である。無限と云ふ感じはこんな空を望んだ時に最もよく起る。此の無限に遠く、無限に遐かに、無限に靜かな空を會釋もなく裂いて、化銀杏が黄金の雲を凝らして居る。其隣には寂光院の屋根瓦が同じく此蒼穹の一部を横に劃して、何十萬枚重なつたものか黑々と鱗の如く、暖かき日影を射返して居る。——古き空、古き銀杏、古き伽藍と古き墳墓が寂寞として存在する間に、美くしい若い女が立つて居る。非常な對照である。竹藪を後ろに脊負つて立つた時は只顏の白いのとハンケチの白いの許り目に着いたが、今度はすらりと着こなした衣の色と、其衣を眞中から輪に截つた帶

の色がいちゞるしく目立つ。縞柄だの品物抔は余の樣な無風流漢には殘念ながら記述出來んが、色合丈は慥かに華やかな者だ。こんな物寂びた境内に一分たりとも居るべき性質のものでない。居るとすればどこからか戸迷をして紛れ込んで來たに相違ない。三越陳列場の斷片を切り拔いて落柿舍の物干竿へかけた樣なものだ。對照の極とは是であらう。——女は化銀杏の下から斜めに振り返つて余が詣る墓のありかを確かめて行きたいと云ふ風に見えたが、生憎余の方でも女に不審があるので石段の上から眺め返したから、思ひ切つて本堂の方へ曲つた。銀杏はひら〳〵と降つて、黑い地を隱す。

余は女の後姿を見送つて不思議な對照だと考へた。昔し住吉の祠で藝者を見た事がある。其時は時雨の中に立ち盡す島田姿が常よりは妍やかに余が瞳を照した。箱根の大地獄で二八餘りの西洋人に遇つた事がある。其折は十丈も煑え騰る湯煙りの凄じき光景が、しばらくは和らいで安慰の念を余が頭に與へた。凡ての對照は大抵此二つの結果より外には何も生ぜぬ者である。在來の鋭どき感じを削つて鈍くするか、又は新たに視界に現はるゝ物象を平時よりは明瞭に腦裏に印し去るか、是が普通吾人の豫期する對照である。所が今睹た對象は毫もそんな感じを引き起さなか

つた。相除の對照でもなければ相乘の對照でもない。古い、淋しい、消極的な心の狀態が減じた景色は更にない、と云つて此美くしい綺羅を飾つた女の容姿が、音樂會や、園遊會で逢ふよりは一と際目立つて見えたと云ふ譯でもない。余が寂光院の門を潛つて得た情緒は、浮世を歩む年齢が逆行して父母未生以前に溯つたと思ふ位、古い、物寂びた、憐れの多い、捕へる程確とした痕迹もなき迄、淡く消極的な情緒である。此情緒は藪を後ろにすつくりと立つた女の上に、余の眼が注がれた時に毫も矛盾の感を與へなかつたのみならず、落葉の中に振り返る姿を眺めた瞬間に於て、却つて一層の深きを加へた。古伽藍と剝げた額、化銀杏と動かぬ松、錯落と列ぶ石塔――死したる人の名を彫む死したる石塔と、花の樣な佳人とが融和して一團の氣と流れて圓熟無碍の一種の感動を余の神經に傳へたのである。

斯んな無理を聞かせられる讀者は定めて承知すまい。これは文士の嘘言だと笑ふ者さへあらう。然し事實はうそでも事實である。文士だらうが書いた事は書いた通り懸價のない所をかいたのである。もし文士がわるければ斷つて置く。余は文士ではない、西片町に住む學者だ。若し疑ふなら此問題をとつて學者的に說明してやらう。讀者は沙翁の悲劇マクベスを知つて

居るだらう。マクベス夫婦が共謀して主君のダンカンを寢室の中で殺す。殺して仕舞ふや否や門の戸を續け樣に敲くものがある。すると門番が敲くは〳〵と云ひながら出て來て醉漢の管を捲く樣なたわいもない事を呂律の廻らぬ調子で述べ立てる。是が對照だ。對照も對照も一通りの對照ではない。人殺しの傍で都々逸を歌ふ位の對照だ。所が妙な事は此滑稽を插んだ爲めに今迄の凄愴たる光景が多少和らげられて、此に至つて一段とくつろぎが付いた感じもなければ、又滑稽が事件の排列の具合から平生より一倍の可笑味を與へると云ふ譯でもない。それでは何等の功果もないかと云ふと大變ある。劇全體を通じての物凄さ、怖しさは此一段の諧謔の爲めに白熱度に引き上げらるゝのである。猶擴大して云へば此場合に於ては諧謔其物が畏怖である、恐懼である、悚然として粟を肌に吹く要素になる。其譯を云へば先づかうだ。

吾人が事物に對する觀察點が從來の經驗で支配せらるゝのは言を待たずして明瞭な事實である。經驗の勢力は度數と、單獨な場合に受けた感動の量に因つて高下增減するのも爭はれぬ事實であらう。絹布團に生れ落ちて御意だ仰せだと持ち上げられる經驗が度重なると人間は余に頭を下げる爲めに生れたのぢやなと御意遊ばす樣になる。金で酒を買ひ、金で妾を買ひ、金で邸宅、朋友、

從五位迄買つた連中は金さへあれば何でも出來るさと金庫を横目に睨んで高を括つた鼻先を虚空遙かに反り返へす。一度の經驗でも御多分には洩れん。箔屋町の大火事に身代を潰した旦那は板橋の一つ半でも蒼くなるかも知れない。濃尾の震災に瓦の中から掘り出された生き佛はドンが鳴つても念佛を唱へるだらう。正直な者が生涯に一返萬引を働いても疑を掛ける知人もないし、冗談を商賣にする男が十年に半日眞面目な事件を擔ぎ込んでも誰も相手にするものはない。つまる所吾々の觀察點と云ふものは從來の惰性で解決せられるのである。吾々の生活は千差萬別であるから、吾々の惰性も商賣により職業により、年齢により、氣質により、兩性によりて各異なるであらう。が其通り。劇を見るときにも小説を讀むときにも全篇を通じた調子があつて、此調子が讀者、觀客の心に反應すると矢張り一種の惰性になる。もし此惰性を構成する分子が猛烈であればある程、惰性其物も牢として動かすべからず拔くべからざる傾向を生ずるに極つて居る。マクベスは妖婆、毒婦、兇漢の行爲動作を刻意に描寫した悲劇である。讀んで冒頭より門番の滑稽に至つて冥々の際讀者の心に生ずる唯一の惰性は怖と云ふ一字に歸着して仕舞ふ。過去が既に怖である、未來も亦怖なるべしとの豫期は、自然と已れを放射して次に出現すべき如何なる出來事

をも此怖に關連して解釋しやうと試みるのは當然の事と云はねばならぬ。船に醉つたものが陸に上つた後迄も大地を動くものと思ひ、臆病に生れ付いた雀が案山子を例の爺さんかと疑ふ如く、マクベスを讀む者も亦怖の一字をどこ迄も引張つて、怖を冠すべからざる邊に迄持つて行かうと力むるは怪しむに足らぬ。何事をも怖化せんとあせる矢先に現はるゝ門番の狂言は、普通の狂言諧謔とは受け取れまい。

世間には諷語と云ふがある。諷語は皆表裏二面の意義を有して居る。先生を馬鹿の別號に用ゐ、大將を匹夫の渾名に使ふのは誰も心得て居やう。此筆法で行くと人に謙遜するのは益〻人を愚にした待遇法で、他を稱揚するのは熾に他を罵倒した事になる。表面の意味が强ければ强い程、裏側の含蓄も漸く深くなる。御辭儀一つで人を愚弄するよりは、履物を揃へて人を揶揄する方が深刻ではないか。此心理を一歩開拓して考へて見る。吾々が使用する大抵の命題は反對の意味に解釋が出來る事とならう。さあどつちの意味にしたものだらうと云ふときに例の惰性が出て苦もなく判斷して呉れる。滑稽の解釋に於ても其通りと思ふ。滑稽の裏には眞面目がくつ付いて居る。大笑の奥には熱涙が潜んで居る。雜談の底には啾々たる鬼哭が聞える。とすれば怖と云ふ惰性を

養成した眼を以て門番の諧謔を讀む者は、其諧謔を正面から解釋したものであらうか、裏側から觀察したものであらうか。裏面から觀察するとすれば醉漢の妄語のうちに身の毛もよだつ程の畏懼の念はある筈だ。元來諷語は正語よりも皮肉なる丈正語よりも深刻で猛烈なものである。虫さへ厭ふ美人の根性を透見して、毒蛇の化身卽ち此天女なりと判斷し得たる刹那に、其罪惡は同程度の他の罪惡よりも一層怖るべき感じを引き起す。全く人間の諷語であるからだ。白晝の化物の方が定石の幽靈よりも或る場合には恐ろしい。諷語であるからだ。廢寺に一夜をあかした時、庭前の一本杉の下でカツポレを躍るものがあつたら此カツポレは非常に物凄からう。是も一種の諷語であるからだ。マクベスの門番は山寺のカツポレと全然同格である。マクベスの門番が解けたら寂光院の美人も解ける筈だ。

百花の王を以て許す牡丹さへ崩れるときは、富貴の色も只好事家の憐れを買ふに足らぬ程脆いものだ。美人薄命と云ふ諺もある位だから此女の壽命も容易に保險はつけられない。然し妙齡の娘は概して活氣に充ちて居る。前途の希望に照されて、見るからに陽氣な心持のするものだ。のみならず友染とか、繻珍とか、ぱつとした色氣のものに包まつて居るから、横から見ても縱から

見ても派出である立派である、春景色である。其一人が——最も美くしき其一人が寂光院の墓場の中に立つた。浮かない、古臭い、沈靜な四顧の景物の中に立つた。すると其愛らしき眼、其はなやかな袖が忽然と本來の面目を變じて蕭條たる周圍に流れ込んで、境内寂寞の感を一層深からしめた。天下に墓程落付いたものはない。然し此女が墓の前に延び上がつた時は墓よりも落ちついて居た。銀杏の黃葉は淋しい。況して化けるとあるから猶淋しい。然し此女が化銀杏の下に横顏を向けて佇んだときは、銀杏の精が幹から拔け出したと思はれる位淋しかつた。上野の音樂會でなければ釣り合はぬ服裝をして、帝國ホテルの夜會にでも招待されさうな此女が、なぜかくの如く四邊の光景と映帶して索寞の觀を添へるのか。是も諷語だからだ。マクベスの門番が怖しければ寂光院の此女も淋しくなくてはならん。

御墓を見ると花筒に菊がさしてある。垣根に咲く豆菊の色は白いもの許りである。是も今の女の所爲に相違ない。家から折つて來たものか、途中で買つて來たものか分らん。若しや名刺でも括りつけてはないかと葉裏迄覗いて見たが何もない。全體何物だらう。余は高等學校時代から浩さんとは親しい付き合ひの一人であつた。うちへはよく泊りに行つて浩さんの親類は大抵知つて

居る。然し指を折つてあれこれと順々に勘定して見ても、こんな女は思ひ出せない。すると他人か知らん。浩さんは人好きのする性質で、交際も大分廣かつたが、女に朋友がある事はついに聞いた事がない。尤も交際をしたからと云つて、必らず余に告げるとは限つて居らん。が浩さんはそんな事を隠す様な性質ではないし、よし外の人に隠したからと云つて余に隠す事はない筈だ。かう云ふと可笑しいが余は河上家の内情は相續人たる浩さんに劣らん位精しく知つて居る。さうして夫は皆浩さんが余に話したのである。だから女との交際だつて、もし實際あつたとすればとくに余に告げるに相違ない。告げぬ所を以て見ると知らぬ女だ。然し知らぬ女が花迄提げて浩さんの墓參りにくる譯がない。是は怪しい。少し變だが追懸けて名前丈でも聞いて見様か、夫も妙だ。いつその事默つて後を付けて行く先を見屆け様か、それでは丸で探偵だ。そんな下等な事はしたくない。どうしたら善からうと墓の前で考へた。浩さんは去年の十一月塹壕に飛び込んだぎり、今日迄上がつて來ない。河上家代々の墓を杖で敲いても、手で搖り動かしても浩さんは矢張塹壕の底に寐て居るだらう。こんな美人が、こんな美しい花を提げて御詣りに來るのも知らずに寐て居るだらう。だから浩さんはあの女の素性も名前も聞く必要もあるまい。浩さんが聞く必要

もないものを余が探究する必要は猶更ない。いや是はいかぬ。かう云ふ論理ではあの女の身元を調べてはならんと云ふ事になる。然し其は間違つて居る。何故？何故は追つて考へてから説明するとして、只今の場合是非共聞き糺さなくてはならん。何でも蚊でも聞かないと氣が濟まん。いきなり石段を一股に飛び下りて化銀杏の落葉を蹴散らして寂光院の門を出て先づ左の方を見た。居ない。右を向いた。右にも見えない。足早に四つ角迄來て目の屆く限り東西南北を見渡した。矢張り見えない。とう〳〵取り逃がした。仕方がない、御母さんに逢つて話をして見様、ことによつたら容子が分るかも知れない。

三

六疊の座敷は南向で、拭き込んだ椽側の端に神代杉の手拭懸が置いてある。軒下から丸い手水桶を鐵の鎖で釣るしたのは洒落れて居るが、其下に一叢の木賊をあしらつた所が一段の趣を添へる。四つ目垣の向ふは二三十坪の茶畠で其間に梅の木が三四本見える。垣に結ふた竹の先に洗濯した白足袋が裏返しに乾してあつて其隣りには如露が逆さまに被せてある。其根元に豆菊が塊ま

つて咲いて累々と白玉を綴つてゐるのを見て「奇麗ですな」と御母さんに話しかけた。
「今年は暖たかだもんですからよく持ちます。あれもあなた、浩一の大好きな菊で……」
「へえ、白いのが好きでしたかな」
「白い、小さい豆の様なのが一番面白いと申して自分で根を貰つて來て、わざ〳〵植えたので御座います」
「成程そんな事がありましたな」と云つたが、内心は少々氣味が悪かつた。寂光院の花筒に插んであるのは正に此種の此色の菊である。
「御叔母さん近頃は御寺參りをなさいますか」
「いえ、先達て中から風邪の氣味で五六日伏せつて居りましたものですから、つい〳〵佛へ無沙汰を致しまして。――うちに居つても忘れる間はないのですけれども――年をとりますと、御湯に行くのも退儀になりましてね」
「時々は少し表をあるく方が藥ですよ。近頃はいゝ時候ですから……」
「御親切に難有う存じます。親戚のもの抔も心配して色々云つて呉れますが、どうもあなた何

分元氣がないものですから、それにこんな婆さんを態々連れてあるいて呉れるものもありませず」
かうなると余はいつでも言句に窮する。どう云つて切り拔けていゝか見當がつかない。仕方がないから「はあゝ」と長く引つ張つたが、御母さんは少々不平の氣味である。さあしまつたと思つたが別に片附け様もないから、梅の木をあちらこちら飛び歩るいて居る四十雀を眺めて居た。御母さんも話の腰を折られて無言である。
「御親類に若い御嬢さんでもあると、こんな時には御相手にいゝですがね」と云ひながら不調法なる余にしては天晴な出來だと自分で感心して見せた。
「生憎そんな娘も居りませず。それに人の子には矢張り遠慮勝ちで……せがれに嫁でも貰つて置いたら、こんな時には嘸心丈夫だらうと思ひます。ほんに殘念な事をしました」
そら婆が出た。くる度によめが出ない事はない。年頃の息子に嫁を持たせたいと云ふのは親の情として左もあるべき事だが、死んだ子に婆を迎へて置かなかつたのをも殘念がるのは少々平仄が合はない。人情はこんなものか知らん。まだ年寄になつて見ないから分らないがどうも一般の常識から云ふと少し間違つて居る様だ。それは一人で侘しく暮らすより氣に入つた嫁の世話にな

る方が誰だつて頼りが多からう。然し嫁の身になつても見るがいゝ。結婚して半年も立たないうちに夫は出征する。漸く戰爭が濟んだと思ふと、いつの間にか戰死して居る。二十を越すか越さないのに、姑と二人暮しで一生を終る。こんな殘酷な事があるものか。御母さんの云ふ所は老人の立場から云へば無理もない訴だが、然し隨分我儘な願だ。年寄は是だからいかぬと、内心は頗る不平であつたが、滅多な抗議を申し込むと又氣色を惡るくさせる危險がある。折角慰めに來ていつも失策をやるのは餘り器量のない話だ。まあ〳〵だまつて居るに若くはなしと覺悟を極めて、反つて反對の方角へと楫をとつた。余は正直に生れた男である。然し社會に存在して怨まれずに世の中を渡らうとすると、どうも嘘がつきたくなる。正直と社會生活が兩立するに至れば嘘は直ちにやめる積りで居る。

「實際殘念な事をしましたね。全體浩さんは何故嫁をもらはなかつたんですか」

「いえ、あなた色々探して居りますうちに、旅順へ參る樣になつたもので御座んすから」

「それぢや當人も貰ふ積りで居たんでせう」

「それは……」と云つたが、其ぎり默つて居る。少々樣子が變だ。或は寂光院事件の手懸りが

潜伏して居さうだ。白狀して云ふと、余は此時浩さんの事も、御母さんの事も考へて居なかつた。只あの不思議な女の素性と浩さんとの關係が知りたいので頭の中は一杯になつて居る。此日に於ける余は平生の樣な同情的動物ではない。全く冷靜な好奇獸とも稱すべき代物に化して居た。人間も其日〳〵で色々になる。惡人になつた翌日は善男に變じ、小人の晝の後に君子の夜がくる。あの男の性格は抔と手にとつた樣に吹聽する先生があるがあれは利口の馬鹿と云ふもので其日其日の自己を研究する能力さへないから、こんな傍若無人の囈語を吐いて獨りで恐悅がるのである。探偵程劣等な家業は又とあるまいと自分にも思ひ、人にも宣言して憚からなかつた自分が、純然たる探偵的態度を以て事物に對するに至つたのは、頗るあきれ返つた現象である。一寸言ひ淀んだ御母さんは、思ひ切つた口調で

「其事に就て浩一は何かあなたに御話をした事は御座いませんか」

「嫁の事ですか」

「えゝ、誰か自分の好いたものがある樣な事を」

「いゝえ」と答へたが、實は此問こそ、こつちから御母さんに向つて聞いて見なければならん

問題であつた。

「御叔母さんには何か話しましたらう」

「いゝえ」

望の綱は是限り切れた。仕方がないから又眼を庭の方へ轉ずると、四十雀は既にどこかへ飛び去つて、例の白菊の色が、水氣を含んだ黒土に映じて見事に見える。其時不圖思ひ出したのは先日の日記の事である。御母さんも知らず、余も知らぬ、あの女の事があるひは書いてあるかも知れぬ。よしあからさまに記してなくても一應目を通したら何か手懸りがあらう。御母さんは女の事だから理解出來んかも知れんが、余が見ればかうだらう位の見當はつくわけだ。是は催促して日記を見るに若くはない。

「あの先日御話しの日記ですね。あの中に何かかいてはありませんか」

「えゝ、あれを見ないうちは何とも思はなかつたのですが、つい見たものですから……」と御母さんは急に涙聲になる。又泣かした。是だから困る。困りはしたものゝ、何か書いてある事は慥かだ。かうなつては泣かうが泣くまいがそんな事は構つて居られん。

「日記に何か書いてありますか？それは是非拜見しませう」と勢よく云つたのは今から考へて赤面の次第である。御母さんは起つて奥へ這入る。

やがて襖をあけてポツケツト入れの手帳を持つて出てくる。表紙は茶の革で一寸見ると紙入の樣な體裁である。朝夕内がくしに入れたものと見えて茶色の所が黒ずんで、手垢でぴか〳〵光つて居る。無言の儘日記を受取つて中を見樣とすると表の戸がから〳〵と開いて、頼みますと云ふ聲がする。生憎來客だ。御母さんは手眞似で早く隱せと云ふから、余は手帳を内懷に入れて「宅へ歸つて見てもいゝですか」と聞いた。御母さんは玄關の方を見ながら「どうぞ」と答へる。やがて下女が何とか樣が入らつしやいましたと注進にくる。何とか樣に用はない。日記さへあれば大丈夫早く歸つて讀まなくつてはならない。其ではと挨拶をして久堅町の往來へ出る。

傳通院の裏を拔けて表町の坂を下りながら路々考へた。どうしても小説だ。たゞ小説に近い丈何だか不自然である。然し是から事件の眞相を究めて、全體の成行が明瞭になりさへすれば此不自然も自づと消滅する譯だ。兎に角面白い。是非探索――探索と云ふと何だか不愉快だ――探究として置かう。是非探究して見なければならん。其にしても昨日あの女のあとを付けなかつたの

は殘念だ。もし向後あの女に逢ふ事が出來ないとすると此事件は判然と分りさうにもない。入らぬ遠慮をして流星光底ぢやないが逃がしたのは惜い事だ。元來品位を重んじ過ぎたり、あまり高尚にすると、得てこんな事になるものだ。人間はどこかに泥棒的分子がないと成功はしない。紳士も結構には相違ないが、紳士の體面を傷けざる範圍内に於て泥棒根性を發揮せんと折角の紳士が紳士として通用しなくなる。泥棒氣のない純粹の紳士は大抵行き倒れになるさうだ。よし是からはもう少し下品になつてやらう。とくだらぬ事を考へながら柳町の橋の上迄來ると、水道橋の方から一輛の人力車が勇ましく白山の方へ馳け拔ける。車が自分の前を通り過ぎる時間は何秒と云ふ僅かの間であるから、余が冥想の眼をふとあげて車の上を見た時は、乘つて居る客は既に眼界から消えかゝつて居た。が其人の顏は？あゝ寂光院だと氣が着いた頃はもう五六間先へ行つて居る。こゝだ下品になるのはこゝだ。何でも構はんから追ひ懸けろと、下駄の齒をそちらに向けたが、徒歩で車のあとを追ひ懸けるのは餘り下品すぎる。氣狂でなくつてはそんな馬鹿な事をするものはない。車、車、車は居らんかなと四方を見廻したが生憎一輛も居らん。其うちに寂光院は姿も見えない位遙かあなたに馳け拔ける。もう駄目だ。氣狂と思はれる迄下品にならなければ

世の中は成功せんものかなと惘然として西片町へ歸つて來た。

取り敢ず、書齋に立て籠つて懷中から例の手帳を出したが、何分夕景ではつきりせん。實は途上でもあちこちと拾ひ讀みに讀んで來たのだが、鉛筆でなぐりがきに書いたものだから明るい所でも容易に分らない。ランプを點ける。下女が御飯はと云つて來たから、めしは後で食ふと追ひ返す。偖一頁から順々に見て行くと皆陣中の出來事のみである。しかも倥偬の際に分陰を偸んで記しつけたものと見えて大概の事は一句二句で辨じて居る。「風、坑道内にて食事。握り飯二個。泥まぶれ」と云ふのがある。「夜來風邪の氣味、發熱。診察を受けず、例の如く勤務」と云ふのがある。「テント外の歩哨散彈に中る。テントに仆れかゝる。血痕を印す」「五時大突擊。中隊全滅、不成功に終る。殘念!!!」殘念の下に！が三本引いてある。無論記憶を助ける爲めの手控であるから、毫も文章らしい所はない。字句を修飾したり、彫琢したりした痕跡は藥にしたくも見當らぬ。然しそれが非常に面白い。只有の儘を有の儘に寫して居る所が大に氣に入つた。ことに俗人の使用する壯士的口吻がないのが嬉しい。怒氣天を衝くだの、暴慢なる露人だの、醜虜の膽を寒からしむだの、凡てえらさうで安つぽい辭句はどこにも使つてない。文體は甚だ氣に入つた、

流石に浩さんだと感心したが、肝心の寂光院事件はまだ出て來ない。段々讀んで行くうちに四行ばかり書いて上から棒を引いて消した所が出て來た。こんな所が怪しいものだ。之を讀みこなさなければ氣が濟まん。手帳をランプのホヤに押し付けて透かして見る。二行目の棒の下からある字が三分の二ばかり食み出して居る。郵、の字らしい。それから骨を折つてやう〳〵郵便局の三字丈け片づけた。郵便局の上の字は大邦丈見えて居る。是は何だらうと三分程ランプと相談をしてやつと分つた。本郷郵便局である。こゝ迄は漸く漕ぎつけたが其外は裏から見ても逆さまに見てもどうしても讀めない。とう〳〵斷念する。夫から二三頁進むと突然一大發見に遭遇した。「二三日一睡もせんので勤務中坑内假寢。郵便局で逢つた女の夢を見る」

余は覺えずどきりとした。「只二三分の間、顏を見た許りの女を、程經て夢に見るのは不思議である」此句から急に言文一致になつて居る。「餘程衰弱して居る證據であらう、然し衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ來てから是で三度見た」

余は日記をぴしやりと敲いて是だ！と叫んだ。御母さんが嫁々と口癖の樣に云ふのは無理はない。是を讀んで居るからだ。夫を知らずに我儘だの殘酷だのと心中で評したのは、こつちが惡る

いのだ。成程こんな女が居るなら、親の身として一日でも添はしてやりたいだらう。御母さんが嫁が居たら〳〵と云ふのを今迄誤解して全く自分の淋しいのをまぎらす爲と許り解釋して居たのは余の眼識の足らなかつた所だ。あれは自分の我儘で云ふ言葉ではない。可愛い息子を戰死する前に、半月でも思ひ通りにさせてやりたかつたと云ふ謎なのだ。成程男は呑氣なものだ。然し知らん事なら仕方がない。それは先づよしとして元來寂光院が此女なのか、或はあれは全く別物で、浩さんの郵便局で逢つたと云ふのは外の女なのか、是が疑問である。此疑問はまだ斷定は出來ない。是丈の材料でさう早く結論に高飛びはやりかねる。やりかねるが少しは想像を容れる餘地もなくては、凡ての判斷はやれるものではない。浩さんが郵便局であの女に逢つたとする。郵便局へ遊びに行く譯はないから、切手を買ふか、爲替を出すか取るかしたに相違ない。浩さんが切手を手紙へ貼る時に傍に居たあの女が、どう云ふ拍子かで差出人の宿所姓名を見ないとは限らない。あの女が浩さんの宿所姓名を其時に覺え込んだとして、之に小說的分子を五分許り加味すれば寂光院事件は全く起らんとも云へぬ。女の方は夫で解せたとして浩さんの方が不思議だ。どうして一寸逢つたものをさう何度も夢に見るかしらん。どうも今少し慥かな土臺が欲しいがと猶

讀んで行くと、こんな事が書いてある。「近世の軍略に於て、攻城は至難なるものゝ一として數へらる。我が攻圍軍の死傷多きは怪しむに足らず。此二三ケ月間に余が知れる將校の城下に斃れたる者は枚擧に遑あらず。死は早晩余を襲ひ來らん。余は日夜に兩軍の砲聲を聞きて、今か〳〵と順番の至るを待つ」成程死を決して居たものと見える。十一月二十五日の條にはかうある。「余の運命も愈〻明日に逼つた」今度は言文一致である。「軍人が軍さで死ぬのは當然の事である。死ぬのは名譽である。ある點から云へば生きて本國に歸るのは死ぬべき所を死に損なつた樣なものだ」戰死の當日の所を見ると「今日限りの命だ。二龍山を崩す大砲の聲がしきりに響く。死んだらあの音も聞えぬだらう。耳は聞えなくなつても、誰か來て墓參りをして呉れるだらう。さうして白い小さい菊でもあげてくれるだらう。寂光院は閑靜な所だ」とある。其次に「强い風だ。愈〻是から死にゝ行く。丸に中つて仆れる迄旗を振つて進む積りだ。御母さんは、寒いだらう」日記はこゝで、ぷつりと切れて居る。切れて居る筈だ。

余はぞつとして日記を閉ぢたが、愈〻あの女の事が氣に懸つて堪らない。あの車は白山の方へ向いて馳けて行つたから、何でも白山方面のものに相違ない。白山方面とすれば本鄕の郵便局へ來

んとも限らん。然し白山だつて廣い。名前も分らんものを探ねて歩いたつて、さう急に知れる譯がない。兎に角今夜の間に合ふ樣な簡略な問題ではない。仕方がないから晩食を濟まして其晩はそれぎり寢る事にした。實は書物を讀んでも何が書いてあるか茫々として海に對する樣な感があるから、已を得ず床へ這入つたのだが、偖夜具の中でも思ふ通りにはならんもので、終夜安眠が出來なかつた。

翌日學校へ出て平常の通り講義はしたが、例の事件が氣になつていつもの樣に授業に身が入らない。控所へ來ても他の職員と話しをする氣にならん。學校の退けるのを待ちかねて、其足で寂光院へ來て見たが、女の姿は見えない。昨日の菊が鮮やかに竹藪の綠に映じて雪の團子の樣に見える許りだ。夫から白山から原町、林町の邊をぐる〳〵廻つて歩いたが矢張り何等の手懸りもない。其晩は疲勞の爲め寢る事丈はよく寢た。然し朝になつて授業が面白く出來ないのは昨日と變る事はなかつた。三日目に教員の一人を捕まへて君白山方面に美人が居るかなと尋ねて見たら、うむ澤山居る、あつちへ引越し玉へと云つた。歸りがけに學生の一人に追ひ付いて君は白山の方に居るかと聞いたら、いゝえ森川町ですと答へた。こんな馬鹿な騷ぎ方をして居たつて始まる譯

のものではない。矢張り平生の如く落ち付いて、綏るりと探究するに若くなしと決心を定めた。それで其晩は煩悶焦慮もせず、例の通り靜かに書齋に入つて、先達中からの取調物を引き續いてやる事にした。

近頃余の調べて居る事項は遺傳と云ふ大問題である。元來余は醫者でもない、生物學者でもない。だから遺傳と云ふ問題に關して專門上の智識は無論有して居らぬ。有して居らぬ所が余の好奇心を挑撥する譯で、近頃ふとした事から此問題に關して其起原發達の歷史やら最近の學說やらを一通り承知したいと云ふ希望を起して、それから此研究を始めたのである。遺傳と一口に云ふと頗る單純な樣であるが段々調べて見ると複雜な問題で、是丈研究して居ても充分生涯の仕事はある。メンデリズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘツケルの議論だの、其弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スペンサーの進化心理說だのと色々の人が色々の事を云ふて居る。そこで今夜は例の如く書齋の裡で近頃出版になつた英吉利のリードと云ふ人の著述を讀む積りで、二三枚丈は何氣なくはぐつて仕舞つた。するとどう云ふ拍子か、かの日記の中の事柄が、書物を讀ませまいと頭の中へ割り込んでくる。さうはさせぬと又一枚程開けると、今度は寂光院が襲つて來る。漸

くそれを追拂つて五六枚無難に通過したかと思ふと、御母さんの切り下げの被布姿がページの上にあらはれる。讀む積りで決心して懸つた仕事だから讀めん事はない。讀めん事はないがページとページの間に狂言が這入る。夫でも構はずどし〳〵進んで行くと、此狂言と本文の間が次第次第に接近して來る。仕舞にはどこからが狂言でどこ迄が本文か分らない樣にぼうつとして來た。此夢の樣な有樣で五六分續けたと思ふうち、忽ち頭の中に電流を通じた感じがしてはつと我に歸つた。「さうだ、此問題は遺傳で解ける問題だ。遺傳で解けば屹度解ける」とは同時に吾口を突いて飛び出した言語である。今迄は只不思議である小說的である。何となく落ちつかない、何か疑惑を晴らす工夫はあるまいか、夫には當人を捕へて聞き糺すより外に方法はあるまいとのみ速斷して、其結果は朋友に冷かされたり、屑屋流に駒込近傍を徘徊したのである。然しこんな問題は當人の支配權以外に立つ問題だから、よし當人を尋ねあてゝ事實を明らかにした所で不思議は解けるものでない。當人から聞き得る事實其物が不思議である以上は余の疑惑は落ち付き樣がない。昔はこんな現象を因果と稱へて居た。因果は諦らめる者、泣く子と地頭には勝たれぬ者と相場が極つて居た。成程因果と言ひ放てば因果で濟むかも知れない。然し二十世紀の文明は此因を

極めなければ承知しない。しかもこんな芝居的夢幻的現象の因を極めるのは遺傳によるより外に仕様はなからうと思ふ。本來ならあの女を捕まへて日記中の女と同人か別物かを明にした上で遺傳の研究を初めるのが順當であるが、本人の居所さへ慥かならぬ只今では、此順序を逆にして、彼等の血統から吟味して、下から上へ溯る代りに、昔から今に繰りさげて來るより外に道はあるまい。何れにしても同じ結果に歸着する譯だから構はない。

そんならどうして兩人の血統を調べたものだらう。女の方は何者だか分らないから、先づ男の方から調べてかゝる。浩さんは東京で生れたから東京つ子である。聞く所によれば浩さんの御父さんも江戸で生れて江戸で死んださうだ。すると是も江戸つ子である。御爺さんも御爺さんの御父さんも江戸つ子である。すると浩さんの一家は代々東京で暮らした樣であるが其實町人でもなければ幕臣でもない。聞く所によると浩さんの家は紀州の藩士であつたが江戸詰で代々こちらで暮らしたのださうだ。紀州の家來と云ふ事丈分れば夫で充分手懸りはある。紀州の藩士は何百人あるか知らないが現今東京に出て居る者はそんなに澤山ある筈がない。ことにあの女の樣に立派な服裝をして居る身分なら藩主の家へ出入りをするに極つて居る。藩主の家に出入するとすれば

其姓名はすぐに分る。是が余の假定である。もしあの女が浩さんと同藩でないとすると此事件は當分埒があかない。抛つて置いて自然天然寂光院に往來で邂逅するのを待つより外に仕方がない。然し余の假定が中るとすると、あとは大抵余の考へ通りに發展して來るに相違ない。余の考へによると何でも浩さんの先祖と、あの女の先祖の間に何事かあつて、其因果でこんな現象を生じたに違ひない。是が第二の假定である。かうこしらへてくると段々面白くなつてくる。單に自分の好奇心を滿足させる許ではない。目下研究の學問に對して尤も興味ある材料を給與する貢獻的事業になる。こう態度が變化すると、精神が急に爽快になる。今迄は犬だか、探偵だか餘程下等なものに零落した樣な感じで、夫が爲め腦中不愉快の度を大分高めて居たが、此假定から出立すれば正々堂々たる者だ。學問上の研究の領分に屬すべき事柄である。少しも疚ましい事はないと思ひ返した。どんな事でも思ひ返すと相當のジヤスチフィケーションはある者だ。惡るかつたと氣が付いたら默坐して思ひ返すに限る。

あくる日學校で和歌山縣出の同僚某に向つて、君の國に老人で藩の歴史に詳しい人は居ないかと尋ねたら、此同僚首をひねつてあるさと云ふ。因つて其人物を承はると、もとは家老だつたが

今では家令と改名して依然として生きて居ると何だか妙な事を答へる。家令なら猶都合がいゝ、平常藩邸に出入する人物の姓名職業は無論承知して居るに違ない。

「其老人は色々昔の事を記憶して居るだらうな」

「うん何でも知つて居る。維新の時なぞは大分働いたさうだ。槍の名人でね」

槍抔は下手でも構はん。昔し藩中に起つた異聞奇譚を、老耄せずに覺えて居てくれゝばいゝのである。だまつて聞いて居ると話が横道へそれさうだ。

「まだ家令を務めて居る位なら記憶は慥かだらうな」

「たしか過ぎて困るね。屋敷のものがみんな弱つて居る。もう八十近いのだが、人間も隨分丈夫に製造する事が出來るもんだね。當人に聞くと全く槍術の御蔭だと云つてる。夫で毎朝起きるが早いか槍をしごくんだ……」

「槍はいゝが、其老人に紹介して貰へまいか」

「いつでもして上げる」と云ふと傍に聞いて居た同僚が、君は白山の美人を探がしたり、記憶のいゝ爺さんを探したり、隨分多忙だねと笑つた。こつちはそれ所ではない。此老人に逢ひさへ

すれば、自分の鑑定が中るか外れるか大抵の見當がつく。一刻も早く面會しなければならん。同僚から手紙で先方の都合を聞き合せてもらふ事にする。

二三日は何の音沙汰もなく過ぎたが、御面會をするから明日三時頃來て貰ひたいと云ふ返事が漸くの事來たよと同僚が告げてくれた時は大に嬉しかつた。其晩は勝手次第に色々と事件の發展を豫想して見て、先づ七分迄は思ひ通りの事實が暗中から白日の下に引き出されるだらうと考へた。さう考へるにつけて、余の此事件に對する行動が――行動と云はんより寧ろ思ひ付きが、中中巧みである、無學なものなら到底こんな點に考への及ぶ氣遣はない、學問のあるものでも才氣のない人には此樣な働きのある應用が出來る譯がないと、寢ながら大得意であつた。ダーキンが進化論を公けにした時も、ハミルトンがクオーターニオンを發明した時も大方こんなものだらうと獨りでいゝ加減に極めて見る。自宅の澁柿は八百屋から買つた林檎より旨いものだ。

翌日は學校が午ぎりだから例刻を待ちかねて麻布迄車代二十五錢を奮發して老人に逢つて見る。老人の名前はわざと云はない。見るからに頑丈な爺さんだ。白い髯を細長く垂れて、黒紋付に八王子平で控へて居る。「やあ、あなたが、何の御友達で」と同僚の名を云ふ。丸で小供扱だ。是

から大發明をして學界に貢獻しやうと云ふ余に對してはやゝ横柄である。今から考へて見ると先方が横柄なのではない、こつちの氣位が高過ぎたから普通の應接ぶりが横柄に見えたのかも知れない。

夫から二三件世間なみの應答を濟まして、愈本題に入つた。

「妙な事を伺ひますが、もと御藩に河上と云ふのが御座いましたらう」余は學問はするが應對の辭にはなれて居らん。藩といふのが普通だが先方の事だから尊敬して御藩と云つて見た。こんな場合に何と云ふものか未だに分らない。老人は一寸笑つたやうだ。

「河上――河上と云ふのはあります。河上才三と云ふて留守居を務めて居つた。其子が貢五郎と云ふて矢張り江戸詰で――先達て旅順で戰死した浩一の親ぢやて。――あなた浩一の御つき合ひか。夫は〳〵。いや氣の毒な事で――母はまだある筈ぢやが……」と一人で辯ずる。

河上一家の事を聞く積りなら、態々麻布下り迄出張する必要はない。河上を持ち出したのは河上對某との關係が知りたいからである。然し此某なるものゝ姓名が分らんから話しの切り出し様がない。

「其河上に就いて何か面白い御話はないでせうか」

老人は妙な顏をして余を見詰めて居たが、やがて重苦しく口を切つた。

「河上？河上にも今御話しする通り何人もある。どの河上の事を御尋ねか」

「どの河上でも構はんです」

「面白い事と云ふて、どんな事を？」

「どんな事でも構ひません。ちと材料が欲しいので」

「材料？何になさる」厄介な爺さんだ。

「ちと取調べたい事がありまして」

「なある。貢五郎と云ふのは大分慷慨家で、維新の時抔は大分暴ばれたものだ――或る時あなた長い刀を提げてわしの所へ議論に來て、……」

「いえ、さう云ふ方面でなく。もう少し家庭内に起つた事柄で、面白いと今でも人が記憶して居る様な事件はないでせうか」老人は默然と考へて居る。

「貢五郎といふ人の親はどんな性質でしたらう」

「才三かな。是は又至つて優しい、――あなたの知つて居らるゝ浩一に生き寫しぢや、よく似て居る」

「似て居ますか？」と余は思はず大きな聲を出した。

「あゝ、實によく似て居る。それで其頃は維新には間もある事で、世の中も穏かであつたのみならず、役が御留守居だから、大分金を使つて風流をやつたさうだ」

「其人の事に就いて何か艶聞が――艶聞と云ふと妙ですが――ないでせうか」

「いや才三に就ては憐れな話がある。其頃家中に小野田帶刀と云ふて、二百石取りの侍が居て、丁度河上と向ひ合つて屋敷を持つて居つた。此帶刀に一人の娘があつて、それが又藩中第一の美人であつたがな、あなた」

「成程」うまい段々手懸りが出來る。

「夫で兩家は向ふ同志だから、朝夕往來をする。往來をするうちに其娘が才三に懸想をする。何でも才三方へ嫁に行かねば死んでしまふと騒いだのだて――いや女と云ふものは始末に行かぬもので――是非行かして下されと泣くぢや」

「ふん、それで思ふ通り行きましたか」成蹟は良好だ。

「で帶刀から人を以て才三の親に懸合ふと、才三も實は大變貰ひたかつたのだから其旨を返事する。結婚の日取り迄極める位に事が捗どつたて」

「結構な事で」と申したが是で結婚をしてくれては少々困ると内心ではひや〳〵して聞いて居る。

「そこ迄は結構だつたが、――飛んだ故障が出來たぢや」

「へえゝ」さう來なくつてはと思ふ。

「其頃國家老に矢張才三位な年恰好なせがれが有つて、此せがれが又帶刀の娘に戀慕して、是非貰ひたいと聞き合せて見るともう才三方へ約束が出來たあとだ。いかに家老の勢でも是許りはどうもならん。所が此せがれが幼少の頃から殿樣の御相手をして成長したもので、非常に御上の御氣に入りでの、あなた。――どこをどう運動したものか殿樣の御意で其方の娘をあれに遣はせと云ふ御意が帶刀に下りたのだて」

「氣の毒ですな」と云つたが自分の見込が着々中るので實に愉快で堪らん。是で見ると朋友の

死ぬ様な凶事でも、自分の豫言が的中するのは嬉しいかも知れない。着物を重ねないと風邪を引くぞと忠告をした時に、忠告をされた當人が吾が言を用ゐないでしかもぴん／＼して居ると心持ちが惡るい。どうか風邪が引かしてやりたくなる。人間は斯様に我儘なものだから、余一人を責めてはいかん。

「實に氣の毒な事だて、御上の仰せだから内約があるの何のと申し上げても仕方がない。それで帶刀が娘に因果を含めて、とう／＼河上方を破談にしたな。兩家が從來の通り向ふ合せでは、何かにつけて妙でないと云ふので、帶刀は國詰になる、河上は江戸に殘ると云ふ取り計をわしのおやぢがやつたのぢや。河上が江戸で金を使つたのも全くそんなこんなで殘念を晴らす爲だらう。それで此事がな、今だから御話しする様なものゝ、當時はぱつとすると兩家の面目に關はると云ふので、内々にして置いたから、割合に人が知らずに居る」

「その美人の顏は覺えて御出でゞすか」と余に取つては頗る重大な質問をかけて見た。

「覺えて居るとも、わしも其頃は若かつたからな。若い者には美人が一番よく眼につく様だて」と皺だらけの顏を皺許りにしてから／＼と笑つた。

「どんな顏ですか」

「どんなと云ふて別に形容しやうもない。然し血統と云ふは爭はれんもので、今の小野田の妹がよく似て居る。――御存知はないかな、矢張り大學出だが――工學博士の小野田を」

「白山の方に居るでせう」ともう大丈夫と思つたから言ひ放つて、老人の氣色を伺ふと

「矢張り御承知か、原町に居る。あの娘もまだ嫁に行かん様だが。――御屋敷の御姫様の御相手に時々來ます」

占めた／＼これ丈聞けば充分だ。一から十迄余が鑑定の通りだ。こんな愉快な事はない。寂光院は此小野田の令嬢に違ない。自分ながらかく迄機敏な才子とは今迄思はなかつた。余が平生主張する趣味の遺傳と云ふ理論を證據立てるに完全な例が出て來た。ロメオがジュリエットを一目見る、さうして此女に相違ないと先祖の經驗を數十年の後に認識する。エレーンがランスロットに始めて逢ふ、此男だぞと思ひ詰める、矢張り父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てゝ腦中に再現する。二十世紀の人間は散文的である。一寸見てすぐ惚れる様な男女を捕へて輕薄と云ふ、小說だと云ふ、そんな馬鹿があるものかと云ふ。馬鹿でも何でも事實は曲げる譯に

は行かぬ、逆かさにする譯にもならん。不思議な現象に逢はぬ前なら兎に角、逢ふた後にも、そんな事があるものかと冷淡に看過するのは、看過するものゝ方が馬鹿だ。斯樣に學問的に研究的に調べて見れば、ある程度迄は二十世紀を滿足せしむるに足る位の説明はつくのである。とこゝ迄は調子づいて考へて來たが、不圖思ひ付いて見ると少し困る事がある。此老人の話しによると、此男は小野田の令嬢も知つて居る、浩さんの戰死した事も覺えて居る。すると此兩人は同藩の緣故で此屋敷へ平生出入して互に顏位は見合つて居るかも知れん。ことによると話をした事があるかも分らん。さうすると余の標榜する趣味の遺傳と云ふ新説も其論據が少々薄弱になる。これは兩人が只一度本鄕の郵便局で出合つた事にして置かんと不都合だ。浩さんは德川家へ出入する話をついにした事がないから大丈夫だらう、ことに日記にあゝ書いてあるから間違はない筈だ。然し念の爲め不用心だから尋ねて置かうと心を定めた。

「さつき浩一の名前を仰やつた樣ですが、浩一は存生中御屋敷へよく上がりましたか」

「いゝえ、只名前丈聞いて居る許りで、――おやぢは先刻御話をした通り、わしと終夜激論をした位な間柄ぢやが、せがれは五六歲のときに見たぎりで――實は貢五郎が早く死んだものだか

ら、屋敷へ出入する機會もそれぎり絕えて仕舞ふて、――其後は頓と逢ふた事がありません」

さうだらう、さう來なくつては辻褄が合はん。第一余の理論の證明に關係してくる。先づ是なら安心。御蔭樣でと挨拶をして歸りかけると、老人はこんな妙な客は生れて始めてだとでも思つたものか、余を送り出して玄關に立つたまゝ、余が門を出て振り返る迄見送つて居た。

是からの話は端折つて簡略に述べる。余は前にも斷はつた通り文士ではない。文士なら是からが大に腕前を見せる所だが、余は學問讀書を專一にする身分だから、こんな小説めいた事を長々しくかいて居るひまがない。新橋で軍隊の歡迎を見て、其感慨から浩さんの事を追想して、夫から寂光院の不可思議な現象に逢つて其現象が學問上から考へて相當の説明がつくと云ふ道行きが讀者の心に合點出來れば此一篇の主意は濟んだのである。實は書き出す時は、あまりの嬉しさに勢ひ込んで出來る丈精密に敍述して來たが、慣れぬ事とて餘計な敍述をしたり、不用な感想を插入したり、讀み返して見ると自分でも可笑しいと思ふ位精しい。其代りこゝ迄書いて來たらもういやになつた。今迄の筆法でこれから先を描寫すると又五六十枚もかゝねばならん。追々學期試驗も近づくし、夫に例の遺傳説を研究しなくてはならんから、そんな筆を舞はす時日は無論ない。

のみならず、元來が寂光院事件の說明が此篇の骨子だから、漸くの事こゝ迄筆が運んで來て、もういゝと安心したら、急にがつかりして書き續ける元氣がなくなつた。

老人と面會をした後には事件の順序として小野田と云ふ工學博士に逢はなければならん。是は困難な事でもない。例の同僚からの紹介を持つて行つたら快よく談話をしてくれた。二三度訪問するうちに、何かの機會で博士の妹に逢はせてもらつた。妹は余の推量に違はず例の寂光院であつた。妹に逢つた時顏でも赤らめるかと思つたら存外淡泊で毫も平生と異なる樣子のなかつたのは聊か妙な感じがした。こゝ迄はすら〳〵事が運んで來たが、只一つ困難なのは、どうして浩さんの事を言ひ出したものか、其方法である。無論デリケートな問題であるから滅多に聞けるものではない。と云つて聞かなければ何だか物足らない。余一人から云へば既に學問上の好奇心を滿足せしめたる今日、これ以上立ち入つてくだらぬ詮議をする必要を認めて居らん。けれども御母さんは女丈に底の底迄知りたいのである。日本は西洋と違つて男女の交際が發達して居らんから、獨身の余と未婚の此妹と對座して話す機會はとてもない。よし有つたとした所で、無暗に切り出せば徒らに處女を赤面させるか、或は知りませぬと跳ね付けられる迄の事である。と云つて兄

の居る前では猶更言ひにくい。言ひにくいと申すより言ふを敢てすべからざる事かも知れない。墓參り事件を博士が知つて居るならばだけれど、若し知らんとすれば、余は好んで人の祕事を暴露する不作法を働いた事になる。かうなるといくら遺傳學を振り廻しても埒はあかん。自ら才子だと飛び廻つて得意がつた余も茲に至つて大に進退に窮した。とゞのつまり事情を逐一打ち明けて御母さんに相談した。所が女は中々智慧がある。

御母さんの仰せには「近頃一人の息子を旅順で亡くして朝、夕淋しがつて暮らして居る女が居る　慰めてやらうと思つても男ではうまく行かんから、おひまな時に御孃さんを時々遊びにやつて上げて下さいとあなたから博士に賴んで見て頂きたい」とある。早速博士方へまかり出て鸚鵡的口吻を弄して旨を傳へると博士は一も二もなく承諾してくれた。これが元で御母さんと御孃さんとは時々會見をする。會見をする度に仲がよくなる。一所に散歩をする、御饌をたべる、丸で御嫁さんの樣になつた。とう〳〵御母さんが浩さんの日記を出して見せた。其時に御孃さんが何と云つたかと思つたら、それだから私は御寺參をして居りましたと答へたそうだ。なぜ白菊を御墓へ手向けたのかと問ひ返したら、白菊が一番好きだからと云ふ挨拶であつた。

余は色の黒い将軍を見た。婆さんがぶら下がる軍曹を見た。ワーと云ふ歡迎の聲を聞いた。さうして涙を流した。浩さんは塹壕へ飛び込んだきり上つて來ない。誰も浩さんを迎に出たものはない。天下に浩さんの事を思つて居るものは此御母さんと此御孃さん許りであらう。余は此兩人の睦まじき様を目擊する度に、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい。

坊つちやん

——三九、四、一——

一

親譲りの無鐵砲で小供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を拔かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出來まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を拔かす奴があるかと云つたから、此次は拔かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。

そんなら君の指を切つて見ろと注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと、南上がりに聊か許りの菜園があつて、眞中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き拔けに脊戸を出て落ちた奴を拾つてきて、學校で食ふ。菜園の西側が山城屋と云ふ質屋の庭續きで、此質屋に勘太郎といふ十三四の悴が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乘りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隱れて、とう〳〵勘太郎を捕まへてやつた。其時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかゝつて來た。向ふは二つ許り年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛てゝぐい〳〵押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中に這入つた。邪魔になつて手が使へぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。仕舞に苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食ひ付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向へ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。

勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ眞逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。其晩母が山城屋に詫びに行つた序でに袷の片袖も取り返して來た。

此外いたづらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人參の芽が出揃はぬ處へ藁が一面に敷いてあつたから、其上で三人が半日相撲をとりつゞけに取つたら、人參がみんな踏みつぶされて仕舞つた。古川の持つて居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を拔いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稻に水がかゝる仕掛であつた。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎう〳〵井戸の中へ插し込んで、水が出なくなつたのを見屆けて、うちへ歸つて飯を食つて居たら、古川が眞赤になつて怒鳴り込んで來た。慥か罰金を出して濟んだ樣である。

おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつた。母は兄許り贔負にして居た。此兄はやに色が白くつて、芝居の眞似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやぢが云つた。亂暴で亂暴で行く先が案じられると母が云つた。成程碌な

ものにはならない。御覽の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。

母が病氣で死ぬ二三日前臺所で宙返りをしてへつついの角で肋骨を撲つて大に痛かつた。母が大層怒つて、御前の樣なものゝ顏は見たくないと云ふから、親類へ泊りに行つて居た。するとうとう死んだと云ふ報知が來た。さう早く死ぬとは思はなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横つ面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮して居た。おやぢは何にもせぬ男で、人の顏さへ見れば貴樣は駄目だ〳〵と口癖の樣に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやぢが有つたもんだ。兄は實業家になるとか云つて頻りに英語を勉强して居た。元來女の樣な性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割で喧嘩をして居た。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。おやぢがおれ

を勘當すると言ひ出した。

其時はもう仕方がないと觀念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。それにも關らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。却つて此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する樣になつたのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云ふ因緣か、おれを非常に可愛がつて呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやぢも年中持て餘してゐる——町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする——此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端の樣に取り扱はれるのは何とも思はない、却つて此清の樣にちやほやしてくれるのを不審に考へた。清は時々臺所で人の居ない時に「あなたは眞つ直でよい御氣性だ」と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分からなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌だと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性です

と云つては、嬉しさうにおれの顏を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つてる樣に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清は愈おれを可愛がつた。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廢せばいゝのにと思つた。氣の毒だと思つた。夫でも清は可愛がる。折々は自分の小遣で金鍔や紅梅燒を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間にか寢て居る枕元へ蕎麥湯を持つて來てくれる。時には鍋燒饂飩さへ買つてくれた。只食ひ物許りではない。靴足袋もらつた、鉛筆も貰つた。帳面も貰つた。是はずつと後の事であるが金を三圓許り貸してくれた事さへある。何も貸せと云つた譯ではない。向で部屋へ持つて來て御小遣がなくて御困りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。實は大變嬉しかつた。其三圓を蝦蟇口へ入れて、懷へ入れたなり便所へ行つたら、すぽりと後架の中へ落して仕舞つた。仕方がないから、のそ〳〵出て來て實は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して來て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあ〳〵音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたの

を水で洗つて居た。夫から口をあけて壹圓札を改めたら茶色になつて模樣が消えかゝつて居た。清は火鉢で乾かして、是でいゝでせうと出した。一寸かいで見て臭いやと云つたら、それぢや御出しなさい、取り換へて來て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三圓持つて來た。此三圓は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌だと云つて人に隱れて自分丈得をする程嫌な事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隱して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくはない。なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したもので御兄樣は御父樣が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。是は不公平である。おやぢは頑固だけれども、そんな依怙贔負はせぬ男だ。然し清の眼から見るとさう見えるのだらう。全く愛に溺れて居たに違ない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。單に是許ではない。贔負目は恐ろしいものだ。清はおれを以て將來立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。其癖勉強をする兄は色許り白くつて、迚も役には立たないと

一人できめて仕舞つた。こんな婆さんに逢つては叶はない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌なひとは屹度落ち振れるものと信じて居る。おれは其時から別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなる〳〵と云ふものだから、矢つ張り何かに成れるんだらうと思つて居た。今から考へると馬鹿々々しい。ある時抔は清にどんなものになるだらうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考もなかつた様だ。只手車へ乘つて、立派な玄關のある家をこしらへるに相違ないと云つた。

夫から清はおれがうちでも持つて獨立したら、一所になる氣で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して賴んだ。おれも何だかうちが持てる様な氣がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、あなたはどこが御好き、麹町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらへ遊ばせ、西洋間は一つで澤山です抔と勝手な計畫を獨りで竝べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答へた。すると、あなたは慾がすくなくつて、心が奇麗だと云つて又賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間は此狀態で暮して居た。おやぢには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰ふ、時々賞められる。別に望もない、是で澤山だと思つて居た。ほかの小供も一概にこんなものだらうと思つて居た。只清が何かにつけて、あなたは御可哀想だ、不仕合だと無暗に云ふものだから、それぢや可哀想で不仕合せなんだらうと思つた。其外に苦になる事は少しもなかつた。只おやぢが小遣を呉れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。其年の四月におれはある私立の中學校を卒業する。六月に兄は商業學校を卒業した。兄は何とか會社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ學問をしなければならない。兄は家を賣つて財産を片付けて任地へ出立すると云ひ出した。おれはどうでもするが宜からうと返事をした。どうせ兄の厄介になる氣はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云ひ出すに極つて居る。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで來て、先祖代々の瓦落多を二束三文に賣つた。家屋敷はある人の周旋である金滿家に讓つた。此方は大分金になつた様だが、詳しい事

は一向知らぬ。おれは一ケ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大に殘念がつたが、自分のものでないから、仕樣がなかつた。あなたがもう少し年をとつて入らつしやれば、こゝが御相續が出來ますものをとしきりに口說いて居た。もう少し年を取つて相續が出來るものなら、今でも相續が出來る筈だ。婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

兄とおれは斯樣に分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下り迄出掛ける氣は毛頭なし、と云つて此時のおれは四疊半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引き拂はねばならぬ始末だ。どうする事も出來ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたらあなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから、甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮して居たから、今迄も清に來るなら來いと二三度勸めたのだが、清は假令下女奉公はしても年來住み馴れた家の方がいゝと云つて應じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易をして入らぬ氣兼を仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだ

らう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰への、來て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ來て金を六百圓出して是を資本にして商賣をするなり、學資にして勉强をするなり、どうでも隨意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ。何の六百圓位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な處置が氣に入つたから、禮を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十圓出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄には其後一遍も逢はない。

おれは六百圓の使用法に就て寢ながら考へた。商賣をしたつて面倒くさくつて旨く出來るものぢやなし、ことに六百圓の金で商賣らしい商賣がやれる譯でもなからう。よしやれるとしても、今の樣ぢや人の前へ出て教育を受けたと威張れないから詰り損になる許りだ。資本抔はどうでもいゝから、これを學資にして勉强してやらう。六百圓を三に割つて一年に二百圓宛使へば三年間は勉强が出來る。三年間一生懸命にやれば何か出來る。夫からどこの學校へ這入らうと考へたが、學問は生來どれもこれも好きでない。ことに語學とか文學とか云ふものは眞平御免だ。新體詩な

どゝ來ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌なものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸ひ物理學校の前を通り掛つたら生徒募集の廣告が出て居たから、何も緣だと思つて規則書をもらつてすぐ入學の手續をして仕舞つた。今考へると是も親讓りの無鐵砲から起つた失策だ。

三年間まあ人並に勉强はしたが別段たちのいゝ方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。然し不思議なもので、三年立つたらとう〳〵卒業して仕舞つた。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ譯もないから大人しく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに來たから、何か用だらうと思つて、出掛けて行つたら、四國邊のある中學校で數學の教師が入る。月給は四十圓だが、行つてはどうだと云ふ相談である。おれは三年間學問はしたが實を云ふと教師になる氣も、田舍へ行く考へも何もなかつた。尤も教師以外に何をしやうと云ふあてもなかつたから、此相談を受けた時、行きませうと卽席に返事をした。是も親讓りの無鐵砲が祟つたのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。此三年間は四疊半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに濟んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑氣な時節であつた。然しかうなると四疊半も引き拂はなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。今度は鎌倉所ではない。大變な遠くへ行かねばならぬ。地圖で見ると海濱で針の先程小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く許である。尤も少々面倒臭い。

家を疊んでからも清の所へは折々行つた。清の甥と云ふのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさへすれば、何くれと款待なして呉れた。清はおれを前へ置いて、色々おれの自慢を甥に聞かせた。今に學校を卒業すると麴町邊へ屋敷を買つて役所へ通ふのだ抔と吹聽した事もある。獨りで極めて一人で喋舌るから、こつちは困まつて顏を赤くした。夫も一度や二度ではない。折々おれが小さい時寐小便をした事迄持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いて居たか分らぬ。只清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主從の樣に考へて居た。自分の主人なら甥の爲にも主人に相違ないと合點したものらしい。甥こそいゝ面の皮だ。

愈約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、北向の三疊に風邪を引いて寢て居た。おれの來たのを見て起き直るが早いか、坊つちやん何時家を御持ちなさいますと聞いた。

卒業さへすれば金が自然とポツケツトの中に湧いて來ると思つて居る。そんなにえらい人をつらまへて、まだ坊つちやんと呼ぶのは、愈馬鹿氣て居る。おれは單簡に當分うちは持たない。田舍へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻鹽の鬢の亂れを頻りに撫でた。餘り氣の毒だから「行く事は行くがぢき歸る。來年の夏休には屹度歸る」と慰めてやつた。夫でも妙な顏をして居るから「何を見やげに買つて來てやらう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違ふ。「おれの行く田舍には笹飴はなさゝうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見當です」と聞き返した。「西の方だよ」と云ふと「箱根のさきですか手前ですか」と問ふ。隨分持てあました。

出立の日には朝から來て、色々世話をやいた。來る途中小間物屋で買つて來た齒磨と楊子と手拭をズツクの革鞄に入れて呉れた。そんな物は入らないと云つても中々承知しない。車を竝べて停車場へ着いて、プラツトフォームの上へ出た時、車へ乘り込んだおれの顏を眤と見て「もう御別れになるかも知れません。隨分御機嫌やう」と小さな聲で云つた。目に涙が一杯たまつて居る。おれは泣かなかつた。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が餘つ程動き出してから、もう大丈

夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居た。何だか大變小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、艀が岸を離れて、漕ぎ寄せて來た。船頭は眞つ裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蠻な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼がくらむ。事務員に聞いて見るとおれは此所へ降りるのださうだ。見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしてゐらあ、こんな所に我慢が出來るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。續づいて五六人は乘つたらう。外に大きな箱を四つ許積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して來た。陸へ着いた時も、いの一番に飛び上がつて、いきなり、磯に立つて居た鼻たれ小僧をつらまへて中學校はどこだと聞いた。小僧は茫やりして、知らんがの、と云つた。氣の利かぬ田舍ものだ。猫の額程な町内の癖に、中學校のありかも知らぬ奴があるものか。所へ妙な筒つぽうを着た男がきて、こつちへ來いと云ふから、尾いて行つたら、港屋とか云ふ宿

屋へ連れて來た。やな女が聲を揃へて御上がりなさいと云ふので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中學校を教へろと云つたら、中學校は是から汽車で二里許り行かなくつちやいけないと聞いて、猶上がるのがいやになつた。おれは、筒つぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくつて、のそ〳〵あるき出した。宿屋のものは變な顏をして居た。

停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買つた。乘り込んで見るとマツチ箱の樣な汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。夫から車を傭つて、中學校へ來たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教へた。隨分氣樂な宿直がゐるものだ。校長でも尋ね樣かと思つたが、草臥れたから、車に乘つて宿屋へ連れて行けと車夫に云ひ付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ふうちへ横付にした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋號と同じだから一寸面白く思つた。

何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたら生憎みんな塞がつて居りますからと云ひながら革鞄を拋り出した儘出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかいて我慢して居た。やがて湯に入れと云ふから、ざぶり

と飛び込んで、すぐ上がつた。歸りがけに覗いて見ると涼しさうな部屋が澤山空いてゐる。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持つて來た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くから、東京から來たと答へた。すると東京はよい所で御座いませうと云つたから當り前だと答へてやつた。膳を下げた下女が臺所へ行つた時分、大きな笑ひ聲が聞えた。くだらないから、すぐ寢たが、中々寢られない。熱い許りではない。騒々しい。下宿の五倍位八釜しい。うと〳〵したら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしや〳〵食つて居る。笹は毒だから、よしたらよからうと云ふと、いえ此笹が御藥で御座いますと云つて旨さうに食つて居る。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハ、、、と笑つたら眼が覺めた。下女が雨戸を明けてゐる。相變らず空の底が突き抜けた樣な天氣だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狹くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所爲だらう。見すぼらしい服裝をして、ズツクの革鞄と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舍者の癖に人を見括つたな。

一番茶代をやつて驚かしてやらう。おれは是でも學資の餘りを三十圓程懐に入れて東京を出て來たのだ。汽車と汽船の切符代と雜費を差し引いて、まだ十四圓程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰ふんだから構はない。田舍者はしみつたれだから五圓もやれば驚ろいて眼を廻すに極つて居る。どうするか見ろと澄して顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて來た。盆を持つて給仕をしながら、やにやにや〳〵笑つてる。失敬な奴だ。顔のなかを御祭りでも通りやしまいし。是でも此下女の面より餘つ程上等だ。飯を濟ましてからにしやうと思つて居たが、癪に障つたから、中途で五圓札を一枚出して、あとで是を帳場へ持つて行けと云つたら、下女は變な顔をして居た。夫から飯を濟ましてすぐ學校へ出懸た。靴は磨いてなかつた。

學校は昨日車で乘りつけたから、大概の見當は分つて居る。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄關迄は御影石で敷きつめてある。きのふ此敷石の上を車でがら〳〵と通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒に澤山逢つたが、みんな此門を這入つて行く。中にはおれより脊が高くつて強さうなのが居る。あんな奴を敎へるのかと思つたら何だか氣味が惡るくなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、

色の黑い、眼の大きな狸の樣な男である。やに勿體ぶつて居た。まあ精出して勉强してくれと云つて、恭しく大きな印の捺つた、辭令を渡した。此辭令は東京へ歸るとき丸めて海の中へ拋り込んで仕舞つた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々其人に此辭令を見せるんだと言つて聞かした。餘計な手數だ。そんな面倒な事をするより此辭令を三日間敎員室へ張り付ける方がましだ。

敎員が控所へ揃ふには一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積だが、先づ大體の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から敎育の精神について長い御談義を聞かした。おれは無論いゝ加減に聞いて居たが、途中から是は飛んだ所へ來たと思つた。校長の云ふ樣にはとても出來ない。おれ見た樣な無鐵砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、學問以外に個人の德化を及ぼさなくては敎育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舍へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩の一つ位は誰でもするだらうと思つてたが、此樣子ぢや滅多に口も聞けない、散歩も出來ない。そんな六づかしい役

なら雇ふ前にこれ〳〵だと話すがいゝ。おれは嘘をつくのが嫌だから、仕方がない、だまされて來たのだとあきらめて、思ひ切りよく、こゝで斷はつて歸つちまはうと思つた。宿屋へ五圓やつたから財布の中には九圓なにがししかない。九圓ぢや東京迄は歸れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。然し九圓だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたの仰やる通りにや、出來ません、此辭令は返します と云つたら、校長は狸の樣な眼をぱちつかせておれの顏を見て居た。やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出來ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいゝと云ひながら笑つた。その位よく知つてるなら、始めから威嚇さなければいゝのに。

さう、かうする內に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがや〳〵する。もう教員も控所へ揃ひましたらうと云ふから、校長に尾いて教員控所へ這入つた。廣い細長い部屋の周圍に机を竝べてみんな腰をかけて居る。おれが這入つたのを見て、みんな申し合せた樣におれの顏を見た。見世物ぢやあるまいし。夫から申し付けられた通り一人々々の前へ行つて辭令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかゞめる許りであつたが、念の入つたのは差し出した辭令を受け取つて一應

拜見をして夫を恭しく〳〵返却した。丸で宮芝居の眞似だ。十五人目に體操の教師へと廻つて來た時には、同じ事を何返もやるので少々ぎれつたくなつた。向は一度で濟む、こつちは同じ所作を十五返繰り返して居る。少しはひとの了見も察して見るがいゝ。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云ふのが居た。是は文學士ださうだ。文學士と云へば大學の卒業生だからえらい人なんだらう。妙に女の樣な優しい聲を出す人だつた。尤も驚いたのは此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極つてる。文學士丈に御苦勞千萬な服裝をしたもんだ。しかも夫が赤シヤツだから人を馬鹿にしてゐる。あとから聞いたら此男は年が年中赤シヤツを着るんださうだ。妙な病氣があつた者だ。當人の說明では赤は身體に藥になるから、衞生の爲めにわざ〳〵誂らへるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいゝ。夫から英語の教師に古賀とか云ふ大變顏色の惡るい男が居た。大概顏の蒼い人は瘠せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔し小學校へ行く時分、淺井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此淺井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。淺井は百姓だから、百姓になるとあんな顏になるかと淸に聞いて見たら、さうぢやありません、あ

の人はうらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふくれるんですと教へて呉れた。それ以來蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬だと思ふ。此の英語の教師もうらなり許り食つてるに違ない。尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。清に聞いて見た事はあるが、清は笑つて答へなかつた。大方清も知らないんだらう。夫からおれと同じ數學の教師に堀田と云ふのが居た。是は逞しい毬栗坊主で、叡山の惡僧と云ふべき面構である。人が叮嚀に辭令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、些と遊びに來給へアハヽと云つた。何がアハヽだ。そんな禮儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれは此時から此坊主に山嵐と云ふ渾名をつけてやつた。漢學の先生は流石に堅いものだ。昨日御着で、嘸御疲れで、夫でもう授業を御始めで、大分御勵精で、――とのべつに辯じたのは愛嬌のある御爺さんだ。畫學の教師は全く藝人風だ。べら〳〵した透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、御國はどちらでげす、え？東京？夫りや嬉しい、御仲間が出來て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。こんなのが江戸つ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考へた。其ほか一人々々に就てこんな事を書けばいくらでもある。然し際限がないからやめる。

挨拶が一通り濟んだら、校長が今日はもう引き取つてもいゝ、尤も授業上の事は數學の主任と打ち合せをして置いて、明後日から課業を始めてくれと云つた。數學の主任は誰かと聞いて見たら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおや〳〵と失望した。山嵐は「おい君どこに宿つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云ひ殘して白墨を持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向から來て相談するなんて不見識な男だ。然し呼び付けるよりは感心だ。

夫から學校の門を出て、すぐ宿へ歸らうと思つたが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやらうと思つて、無暗に足の向く方をあるき散らした。縣廳も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神樂坂を半分に狹くした位な道幅で町並はあれより落ちる。廿五萬石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下だ抔と威張つてる人間は可哀想なものだと考へながらくると、いつしか山城屋の前に出た。廣い樣でも狹いものだ。是で大抵は見盡したのだらう。歸つて飯でも食はうと門口を這入つた。帳場に坐つて居たかみさんが、おれの顏を見ると急に飛び出して來て御歸り……と板の間へ頭をつけた。靴を脫いで上がると、御座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五疊の表二階

で大きな床の間がついて居る。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へ這入つた事はない。此後いつ這入れるか分らないから、洋服を脱いで浴衣一枚になつて座敷の眞中へ大の字に寢て見た。いゝ心持ちである。

晝飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまづい上に字を知らないから手紙をかくのが大嫌だ。又やる所もない。然し清は心配して居るだらう。難船して死にやしないか抔と思つちや困るから、奮發して長いのを書いてやつた。其文句はかうである。

「きのふ着いた。つまらん所だ。十五疊の座敷に寢て居る。宿屋へ茶代を五圓やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寐られなかつた。清が笹飴を笹ごと食ふ夢を見た。來年の夏は歸る。今日學校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シヤツ。英語の教師はうらなり、數學は山嵐、畫學はのだいと。今に色々な事をかいてやる。左樣なら」

手紙をかいて仕舞つたら、いゝ心持になつて眠氣がさしたから、最前の樣に座敷の眞中へのびのびと大の字に寢た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寐た。この部屋かいと大きな聲がするので眼が覺めたら、山嵐が這入つて來た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や

談判を開かれたので大に狼狽した。受持ちを聞いて見ると別段六づかしい事もなさゝうだから承知した。此位の事なら、明後日は愚、明日から始めろと云つたつて驚ろかない。授業上の打ち合せが濟んだら、君はいつ迄こんな宿屋に居る積りでもあるまい、僕がいゝ下宿を周旋してやるから移り玉へ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出來る。早い方がいゝから、今日見て、あす移つて、あさつてから學校へ行けば極りがいゝと一人で呑み込んで居る。成程十五疊敷にいつ迄居る譯にも行くまい。月給をみんな宿料に拂つても追つつかないかもしれぬ。五圓の茶代を奮發してすぐ移るのはちと殘念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だから、そこの所はよろしく山嵐に賴む事にした。すると山嵐は兎も角も一所に來て見ろと云ふから、行つた。町はづれの岡の中腹にある家で至極閑靜だ。主人は骨董を賣買するいか銀と云ふ男で、女房は亭主よりも四つ許り年嵩の女だ。中學校に居た時キツチと云ふ言葉を習つた事があるが此女房は正にキツチに似て居る。キツチだつて人の女房だから構はない。とう〳〵明日から引き移る事にした。歸りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。學校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思つたが、こんなに色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなさゝうだ。只おれと同じ

様にせつかちで肝癪持らしい。あとで聞いたら此男が一番生徒に人望があるのださうだ。

三

愈學校へ出た。初めて教場へ這入つて高い所へ乘つた時は、何だか變だつた。講釋をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒は八釜しい。時々圖拔けた大きな聲で先生と云ふ。先生には應へた。今迄物理學校で毎日先生々々と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむづ〳〵する。おれは卑怯な人間ではない、臆病な男でもないが、惜しい事に膽力が缺けて居る。先生と大きな聲をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いた樣な氣がする。最初の一時間は何だかい〻加減にやつて仕舞つた。然し別段困つた質問も掛けられずに濟んだ。控所へ歸つて來たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと單簡に返事をしたら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乘り込む樣な氣がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸つ子で華奢に小作りに出來て居るから、ど

うも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるが、こんな大僧を四十人も前へ竝べて、只一枚の舌をたゝいて恐縮させる手際はない。然しこんな田舍者に弱身を見せると癖になると思つたから、成るべく大きな聲をして、少々卷き舌で講釋してやつた。最初のうちは、生徒も烟に捲かれてぽんやりして居たから、それ見ろと益得意になつて、べらんめい調を用ゐてたら、一番前の列の眞中に居た、一番强さうな奴が、いきなり起立して先生と云ふ。そら來たと思ひながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆる〳〵遣つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生溫るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸つ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるがい〻と答へてやつた。此調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。只歸りがけに生徒の一人が一寸此問題を解釋をしておくれんかな、もし、と出來さうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。仕方がないから何だか分らない、此の次教へてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囃した。其中に出來ん〳〵と云ふ聲が聞える。籠棒め、先生だつて、出來ないのは當り前だ。出來ないのを出來ないと云ふのに不思議があるもんか。そんなものが出來る位な

ら四十圓でこんな田舍へくるもんかと控所へ歸つて來た。今度はどうだと又山嵐が聞いた。うんと云つたが、うん丈では氣が濟まなかつたから、此學校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顏をして居た。

三時間目も、四時間目も畫過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、孰れも少少づゝ失敗した。教師ははたで見る程樂ぢやないと思つた。授業は一と通り濟んだが、まだ歸れない、三時迄ぽつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから檢分をするんださうだ。夫から、出席簿を一應調べて漸く御暇が出る。いくら月給で買はれた身體だつて、あいた時間迄學校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。然しほかの連中はみんな大人しく御規則通りやつてるから新參のおればかり、だゞを捏ねるのも宜しくないと思つて我慢して居た。歸りがけに、君何でも蚊んでも三時過迄學校にゐさせるのは愚だぜと山嵐に訴へたら、山嵐はさうさアハヽヽと笑つたが、あとから眞面目になつて、君あまり學校の不平を云ふと、いかんぜ。云ふなら僕丈に話せ、隨分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかつた。

夫からうちへ歸つてくると、宿の亭主が御茶を入れませうと云つてやつて來る。御茶を入れると云ふから御馳走をするのかと思ふと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。此樣子では留守中も勝手に御茶を入れませうを一人で履行して居るかも知れない。亭主が云ふには手前は書畫骨董がすきで、とう〳〵こんな商賣を內々で始める樣になりました。あなたも御見受申す所大分御風流で居らつしやるらしい。ちと道樂に御始めなすつては如何ですと、飛んでもない勸誘をやる。二年前ある人の使に帝國ホテルへ行つた時は錠前直しと間違へられた事がある。ケツトを被つて、鎌倉の大佛を見物した時は車屋から親方と云はれた。其外今日迄見損はれた事は隨分あるが、まだおれをつらまへて大分御風流で居らつしやると云つたものはない。大抵はなりや樣子でも分る。風流人なんて云ふものは、畫を見ても、頭巾を被るか短冊を持つてるものだ。このおれを風流人だ抔と眞面目に云ふのは只の曲者ぢやない。おれはそんな呑氣な隱居のやる樣な事は嫌だと云つたら、亭主はへヽヽと笑ひながら、いえ始めから好きなものは、どなたも御座いませんが、一旦此道に這入ると中々出られませんと一人で茶を注いで妙な手付をして飲んで居る。實はゆふべ茶を買つてくれと賴んで置いたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に

答へる様な氣がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたと又一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がつてから、あしたの下讀をしてすぐ寢て仕舞つた。

それから毎日々々學校へ出ては規則通り働く、毎日々々歸つて來ると主人が御茶を入れませうと出てくる。一週間許りしたら學校の樣子も一と通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。ほかの教師に聞いて見ると辭令を受けて一週間から一ケ月位の間は自分の評判がいゝだらうか、惡るいだらうか非常に氣に掛かるさうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくぢると其時丈はやな心持だが三十分許り立つと奇麗に消えて仕舞ふ。おれは何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出來ない男だ。教場のしくぢりが生徒にどんな影響を與へて、其影響が校長や教頭にどんな反應を呈するか丸で無頓着であつた。おれは前に云ふ通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思ひ切りは頗るいゝ人間である。此學校がいけなければすぐどつかへ行く覺悟で居たから、狸も赤シヤツも、些とも恐しくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌も御世辭も使ふ氣になれなかつた。學校はそれでいゝのだが下宿の方はさうは

いかなかつた。亭主が茶を飲みに來る丈なら我慢もするが、色々な者を持つてくる。始めに持つて來たのは何でも印材で、十ばかり竝べて置いて、みんなで三圓なら安い物だ御買なさいと云ふ。田舍巡りのヘボ繪師ぢやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云ふ男の花鳥の掛物をもつて來た。自分で床の間へかけて、いゝ出來ぢやありませんかと云ふから、さうかなと好加減に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、此幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釋をしたあとで、どうです、あなたなら十五圓にして置きます。御買なさいと催促をする。金がないと斷はると、金なんか、いつでも宜う御座いますと中々頑固だ。金があつても買はないんだと、其時は追つ拂つちまつた。其次には鬼瓦位な大硯を擔ぎ込んだ。是は端溪です、端溪ですと二遍も三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたら、すぐ講釋を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、是は慥かに中層です、此眼を御覽なさい。眼が三つあるのは珍らしい。潑墨の具合も至極宜しい、試して御覽なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から持つて歸つて來て是非賣りたいと云ひますから、御安くして三十圓

にして置きませうと云ふ。此男は馬鹿に相違ない。學校の方はどうかかうか無事に勤まりさうだが、かう骨董責に逢つてはとても長く續きさうにない。

其うち學校もいやになつた。　ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居たら郵便局の隣りに蕎麥とかいて、下に東京と注を加へた看板があつた。おれは蕎麥が大好きである。東京に居つた時でも蕎麥屋の前を通つて藥味の香ひをかぐと、どうしても暖簾がくゞりたくなつた。今日迄は數學と骨董で蕎麥を忘れて居たが、かうして看板を見ると素通りが出來なくなる。序でだから一杯食つて行かうと思つて上がり込んだ。見ると看板程でもない。東京と斷はる以上はもう少し奇麗にしさうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法きたない。疊は色が變つて御負けに砂でざら〳〵して居る。壁は煤で眞黑だ。天井はランプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思はず首を縮める位だ。只麗々と蕎麥の名前をかいて張り付けたねだん付け丈は全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日前から開業したに違なからう。ねだん付の第一號に天麩羅とある。おい天麩羅を持つてこいと大きな聲を出した。すると此時迄隅の方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゆ〳〵食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、一寸氣がつかなか

つたが顏を合せると、みんな學校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。其晩は久し振に蕎麥を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の氣もなく教場へ這入ると、黑板一杯位な大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顏を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿々々しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、然し四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食はうがおれの錢でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと講義を濟まして控所へ歸つて來た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯也。但し笑ふ可らず。と黑板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪に障つた。冗談も度を過ごせばいたづらだ。燒餅の黑焦の樣なもので誰も賞め手はない。田舍者は此呼吸が分からないからどこ迄押して行つても構はないと云ふ了見だらう。一時間あるくと見物する町もない樣な狹い都に住んで、外に何にも藝がないから、天麩羅事件を日露戰爭の樣に觸れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た樣な小人が出來るんだ。無邪氣なら一所に笑つてもいゝが、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒氣を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消

して、こんないたづらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云ふ意味を知つてるか、と云つたら、自分がした事を笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もしと答へた奴がある。やな奴だ。わざ〳〵東京から、こんな奴を教へに來たのかと思つたら情なくなつた。餘計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めて仕舞つた。夫から次の教場へ出たら天麩羅を食ふと減らず口が利き度なるものなりと書いてある。どうも始末に終へない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教へないと云つてすた〳〵歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜こんださうだ。かうなると學校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麥もうちへ歸つて、一晩寐たらそんなに肝癪に障らなくなつた。學校へ出て見ると、生徒も出てゐる。何だか譯が分らない。夫から三日許りは無事であつたが、四日目の晩に住田と云ふ所へ行つて團子を食つた。此住田と云ふ所は溫泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いて三十分で行かれる、料理屋も溫泉宿も、公園もある上に遊廓がある。おれの這入つた團子屋は遊廓の入口にあつて、大變うまいと云ふ評判だから、溫泉に行つた歸りがけに一寸食つて見た。今度は生徒にも逢はなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日學校へ行つて、一時間目の

教場へ這入ると團子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢拂つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にも屹度何かあると思ふと遊廓の團子旨い〳〵と書いてある。あきれ返つた奴等だ。團子が夫で濟んだと思つたら今度は赤手拭と云ふのが評判になつた。何の事だと思つたら、詰らない來歷だ。おれはこゝへ來てから、毎日住田の溫泉へ行く事に極めて居る。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが溫泉丈は立派なものだ。折角來た者だから毎日這入つてやらうと云ふ氣で、晩飯前に運動旁出掛ける。所が行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。此手拭が湯に染つた上へ、赤い縞が流れ出したので一寸見ると紅色に見える。おれは此手拭を行きも歸りも、汽車に乘つてもあるいても、常にぶら下げて居る。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云ふんださうだ。どうも狹い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。溫泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八錢で濟む。其上に女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へ這入つた。すると四十圓の月給で毎日上等へ這入るのは贅澤だと云ひ出した。餘計な御世話だ。まだある。湯壺は花崗石を疊み上げて、十五疊敷位の廣さに仕切つてある。大抵は十三四人漬つてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の邊まであるか

ら、運動の爲めに、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは人の居ないのを見濟しては十五疊の湯壺を泳ぎ巡つて喜こんで居た。所がある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗いて見ると、大きな札へ黑々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまり有るまいから、此貼札はおれの爲めに特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは斷念した。泳ぐのは斷念したが、學校へ出て見ると、例の通り黑板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚ろいた。何だか生徒全體がおれ一人を探偵して居る樣に思はれた。くさ〳〵した。生徒が何を云つたつて、やらうと思つた事をやめる樣なおれではないが、何でこんな狹苦しい鼻の先がつかへる樣な所へ來たのかと思ふと情なくなつた。それでうちへ歸ると相變らず骨董責である。

四

學校には宿直があつて、職員が代る〳〵これをつとめる。但し狸と赤シヤツは例外である。何で此兩人が當然の義務を免かれるのかと聞いて見たら、奏任待遇だからと云ふ。面白くもない。

月給は澤山とる、時間は少ない、夫で宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらへて、それが當り前だと云ふ樣な顏をしてゐる。よくまあ〳〵なに圖迂〳〵しく出來るものだ。これに就ては大分不平であるが、山嵐の說によると、いくら一人で不平を竝べたつて通るものぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさうなものだ。山嵐は might is right といふ英語を引いて說諭を加へたが、何だか要領を得ないから、聞き返して見たら强者の權利と云ふ意味ださうだ。强者の權利位なら昔から知つて居る。今更山嵐から講釋をきかなくつてもいゝ。强者の權利と宿直とは別問題だ。狸や赤シヤツが强者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論として此宿直が愈おれの番に廻つて來た。一體癖性だから夜具蒲團抔は自分のものへ樂に寢ないと寢た樣な心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊つた事は殆んどない位だ。友達のうちでさへ厭なら學校の宿直は猶更厭だ。厭だけれども、是が四十圓のうちへ籠つてゐるなら仕方がない。我慢して勤めてやらう。

教師も生徒も歸つて仕舞つたあとで、一人ぽかんとして居るのは隨分間が拔けたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舍の西はづれの一室だ。一寸這入つて見たが、西日をまともに受

けて、苦しくつて居たゝまれない。田舍丈あつて秋がきても、氣長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を濟ましたが、まづいには恐れ入つた。よくあんなものを食つて、あれ丈に暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けて仕舞ふんだから豪傑に違ない。飯は食つたが、まだ日が暮れないから寢る譯に行かない。一寸溫泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいゝ事だか、惡るい事だかしらないが、かうつくねんとして重禁錮同樣な憂目に逢ふのは我慢の出來るもんぢやない。始めて學校へ來た時當直の人はと聞いたら、一寸用達に出たと小使が答へたのを妙だと思つたが、自分に番が廻つて見ると思ひ當る。出る方が正しいのだ。おれは小使に一寸出てくると云つたら、何か御用ですかと聞くから、用ぢやない、溫泉へ這入るんだと答へて、さつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて來たのが殘念だが今日は先方で借りるとしやう。

夫から可成ゆるりと、出たり這入つたりして、漸く日暮方になつたから、汽車へ乘つて古町の停車場迄來て下りた。學校迄は是から四丁だ。譯はないとあるき出すと、向ふから狸が來た。狸は是から此汽車で溫泉へ行かうと云ふ計畫なんだらう。すた〳〵急ぎ足にやつてきたが、擦れ違つた時おれの顏を見たから、一寸挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたです

かねえと眞面目くさつて聞いた。無かつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。御苦勞さま。と禮を云つたぢやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使ふもんだ。おれは腹が立つたから、えゝ宿直です。宿直ですから、是から歸つて泊る事は慥かに泊りますと云ひ捨てゝ澄ましてあるき出した。堅町の四つ角迄くると今度は山嵐に出つ喰はした。どうも狹い所だ。出てあるきさへすれば必ず誰かに逢ふ。「おい君は宿直ぢやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答へたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合ぢやないか」と云つた。「些とも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張つて見せた。「君のづぼらにも困るな、校長か教頭に出逢ふと面倒だぜ」と山嵐に似合はない事を云ふから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でせうと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと學校へ歸つて來た。

夫から日はすぐくれる。くれてから二時間許りは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、夫も飽きたから、寐られない迄も床へ這入らうと思つて、寢卷に着換へて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、頓と尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寢るときに頓と尻持をつくのは小供

の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律學校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寢る時にどん〳〵音がするのはおれの尻がわるいのぢやない。下宿の建築が粗末なんだ。掛ケ合ふなら下宿へ掛ケ合へと凹ましてやつた。此宿直部屋は二階ぢやないから、いくら、どしんと倒れても構はない。成る可く勢よく倒れないと寢た樣な心持ちがしない。あゝ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか兩足へ飛び付いた。ざら〳〵して蚤の樣でもないからこいつあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で振つて見た。するとざら〳〵と當つたものが、急に殖え出して脛が五六ケ所、股が二三ケ所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所迄飛び上がつたのが一つ――愈驚ろいた。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ拋ると、蒲團の中から、バツタが五六十飛び出した。正體の知れない時は多少氣味が惡るかつたが、バツタと相場が極まつて見たら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ろと、いきなり括り枕を取つて、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく拋げつける割に利目がない。仕方がないから、又布團の上へ坐つて、煤掃の時に蓙を丸めて疊を叩く樣に、そこら

近邊を無暗にたゝいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。顏へ付いた奴は枕で叩く譯に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動く丈で少しも手答がない。バツタは擲きつけられた儘蚊帳へつらまつて居る。死にもどうもしない。漸くの事に三十分許でバツタは退治た。箒を持つて來てバツタの死骸を掃き出した。小使が來て何ですかと云ふから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼つとく奴がどこの國にある。間抜め。と叱つたら、私は存じませんと辯解をした。存じませんで濟むかと箒を椽側へ拋り出したら、小使は恐る〳〵箒を擔いで歸つて行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり總代に呼び出した。すると六人出て來た。六人だらうが十人だらうが構ふものか。寢卷の儘腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と眞先の一人がいつた。やに落ち付いて居やがる。此學校ぢや校長ばかりぢやない、生徒迄曲りくねつた言葉を使ふんだらう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやらう」と云つたが、生憎掃き出して仕舞つて一匹も居ない。又小使を呼んで、「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜へ棄てしまひましたが、拾つて參りませうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて來い」と云ふと小使は急いで馳け出したが、やがて半紙の上へ十匹許り載せて來て「どうも御氣の毒ですが、生憎夜で是丈しか見當りません。あしたになりましたらもつと拾つて參ります」と云ふ。小使迄馬鹿だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタた是れだ、大きなずう體をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た顏の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意氣におれを遣り込めた。「篦棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まへてなもしは何だ。菜飯は田樂の時より外に食ふもんぢやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」と云つた。いつ迄行つてもなもしを使ふ奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れて呉れと頼んだ」

「誰れも入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは溫い所が好きぢやけれ、大方一人で御這入りになるなんて——バツタに御這入りになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたづらをしたか、云へ」

「馬鹿あ云へ。バツタが一人で御這入りになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたづらをしたか、云へ」

「云へてゝ、入れんものを說明しやうがないがな」

けちな奴等だ、自分で自分のした事が云へない位なら、てんで仕ないがいゝ。證據さへ擧がらなければ、しらを切る積りで圖太く構へて居やがる。おれだつて中學に居た時分は少しはいたづらもしたもんだ。然しだれがしたと聞かれた時に、尻込みをする樣な卑怯な事は只の一度もなかつた。仕たものは仕たので、仕ないものは仕ないに極つてる。おれなんぞは、いくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるものか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出來る。いたづら丈で罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの國に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事は御免だと云ふ連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全體中學校へ何しに這入つてるん

だ。學校へ這入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせ〳〵生意氣な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと痛達をして居やがる。話せない雑兵だ。

おれはこんな腐つた了見の奴等と談判するのは胸糞が悪るいから、「そんなに云はれなきや、聞かなくつていゝ。中學校へ這入つて、上品も下品も區別が出來ないのは氣の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放してやつた。おれは言葉や様子こそ餘り上品ぢやないが、心はこいつらよりも遥かに上品な積りだ。六人は悠々と引き揚げた。上部丈は教師のおれより餘つ程えらく見える。實は落ち付いて居る丈猶悪るい。おれには到底是程の度胸はない。

夫から又床へ這入つて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶん〳〵唸つて居る。手燭をつけて一匹宛燒くなんて面倒な事は出來ないから、釣手をはづして、長く疊んで置いて部屋の中で横竪十文字に振つたら、環が飛んで手の甲をいやと云ふ程撲つた。三度目に床へ這入つた時は少々落ち付いたが中々寐られない。時計を見ると十時半だ。考へて見ると厄介な所へ來たもんだ。一體中學の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。餘つ程辛抱强い朴念仁がなるんだらう。おれには到底やり切れない。そ

れを思ふと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい。今迄はあんなに世話になつて別段難有いとも思はなかつたが、かうして、一人で遠國へ來て見ると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食ひたければ、わざ〳〵越後迄買ひに行つて食はしてやつても、食はせる丈の價値は充分ある。清はおれの事を慾がなくつて、眞直な氣性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢ひたくなつた。

清の事を考へながら、のつそつして居ると、突然おれの頭の上で、數で云つたら三四十人もあらうか、二階が落つこちる程どん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の聲が起つた。おれは何事が持ち上がつたのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端に、はゝあさつきの意趣返しに生徒があばれるのだなと氣がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つて仕舞はないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覺があるだらう。本來なら寢てから後悔してあしたの朝でもあやまりに來るのが本筋だ。たとひ、あやまらない迄も恐れ入つて、靜粛に寢て居るべきだ。それを何だ此騒ぎは。寄宿舎を建てゝ豚でも

飼つて置きあしまいし。氣狂ひじみた眞似も大抵にするがいゝ。どうするか見ろと、寢卷の儘宿直部屋を飛び出して、階子段を三股半に二階迄躍り上がつた。すると不思議な事に、今迄頭の上で、慥にどたばた暴れて居たのが、急に靜まり返つて、人聲所か足音もしなくなつた。是は妙だ。ランプは既に消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人氣のあるとないとは樣子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隱れて居ない。廊下のはづれから月がさして、遙か向ふが際どく明るい。どうも變だ、已れは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寐言を云つて、人に笑はれた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねた位だ。其時は三日ばかりうち中の笑ひ草になつて大に弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。然し慥かにあばれたに違ないがと、廊下の眞中で考へ込んで居ると、月のさして居る向ふのはづれで、一二三わあと、三四十人の聲がかたまつて響いたかと思ふ間もなく、前の樣に拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。夫れ見ろ夢ぢやない矢つ張り事實だ。靜かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けん位な聲を出して、廊下を向へ馳けだし

た。おれの通る路は暗い、只はづれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も來たかと思ふと、廊下の眞中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひゞく間に、身體はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつて見たが、馳けられない。氣はせくが、足丈は云ふ事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで來たら、もう足音も人聲も靜まり返つて、森として居る。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出來るものぢやない。まるで豚だ。かうなれば隱れて居る奴を引きずり出して、あやまらせてやる迄はひかないぞと、心を極めて寢室の一つを開けて中を檢査し樣と思つたが開かない。錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるのか、押しても、押しても決して開かない。今度は向ふ合せの北側の室を試みた。開かない事は矢つ張り同然である。おれが戸をあけて中に居る奴を引つ捕らまへてやらうと、焦慮てると、又東のはづれで鬨の聲と足拍子が始まつた。此野郎申し合せて、東西相應じておれを馬鹿にする氣だな、とは思つたが偖どうしていゝか分らない。正直に白狀してしまふが、おれは勇氣のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていゝか薩張りわからない。わからないけれども、決して負ける積りはない。此儘に濟ましてはおれの顏にかゝはる。江戸つ子は意氣地がな

いと云はれるのは殘念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ樣がなくつて、仕方がないから泣き寐入りにしたと思はれちや一生の名折れだ。是でも元は旗本だ。旗本の元は淸和源氏で、多田の滿仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。只智慧のない所が惜しい丈だ。どうしていゝか分らないのが困る丈だ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていゝか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考へて見ろ。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から辨當を取り寄せて勝つ迄こゝに居る。おれはかう決心をしたから、廊下の眞中へあぐらをかいて夜のあけるのを待つて居た。蚊がぶん〳〵來たけれども何ともなかつた。さつき、ぶつけた向脛を撫でゝ見ると、何だかぬら〳〵する。血が出るんだらう。血なんか出たければ勝手に出るがいゝ。其うち最前からの疲れが出て、ついうと〳〵寐て仕舞つた。何だか騷がしいので、眼が覺めた時はえつ糞しまつたと飛び上がつた。おれの坐つてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立つて居る。おれは正氣に返つて、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを

見ろ。殘る一人が一寸狼狽した所を、飛びかゝつて、肩を抑へて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱち〳〵させた。さあおれの部屋迄來いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて來た。夜はとうにあけて居る。

おれが宿直部屋へ連れて來た奴を詰問し始めると、豚は、打つても擲いても豚だから、只知らんがなで、どこ迄も通す了見と見えて、決して白狀しない。其うち一人來る、二人來る、段々二階から宿直部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠さうに瞼をはらして居る。けちな奴等だ。一晩位寐ないで、そんな面をして男と云はれるか。面でも洗つて議論に來いと云つてやつたが、誰も面を洗ひに行かない。

おれは五十人餘りを相手に約一時間許り押問答をして居ると、ひよつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が學校に騷動がありますつて、わざ〳〵知らせに行つたのださうだ。是しきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。夫だから中學校の小使なんぞをしてるんだ。

校長は一と通りおれの說明を聞いた、生徒の言草も一寸聞いた。追つて處分する迄は、今迄通り學校へ出ろ。早く顏を洗つて、朝飯を食はないと時間に間に合はないから、早くしろと云つて

寄宿生をみんな放免した。手温るい事だ。おれなら即席に寄宿生をことゞく退校して仕舞ふ。こんな悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。其上おれに向つて、あなたも嘸御心配で御疲れでせう、今日は御授業に及ばんと云ふから、おれはかう答へた。「いへ、ちつとも心配ぢやありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩位寐なくつて、授業が出來ない位なら、頂戴した月給を學校の方へ割戻します」校長は何と思つたものか、暫らくおれの顏を見詰めて居たが、然し顏が大分はれて居ますよと注意した。成程何だか少々重たい氣がする。其上べた一面痒い。蚊が餘つ程刺したに相違ない。おれは顏中ぼり〳〵搔きながら、顏はいくら膨れたつて、口は慥かにきけますから、授業には差し支ません と答へた。校長は笑ひながら、大分元氣ですねと賞めた。實を云ふと賞めたんぢやあるまい、ひやかしたんだらう。

五

君釣りに行きませんかと赤シヤツがおれに聞いた。赤シヤツは氣味の惡るい樣に優しい聲を出

す男である。丸で男だか女だか分りやしない。男なら男らしい聲を出すもんだ。ことに大學卒業生ぢやないか。物理學校でさへおれ位な聲が出るのに、文學士がこれぢや見つともない。

おれはさうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣つた事がある。夫から神樂坂の毘沙門の緣日で八寸許りの鯉を針で引つかけて、しめたと思つたら、ぽちやりと落として仕舞つたが是は今考へても惜しいと云つたら、赤シヤツは顯を前の方へ突き出してホ、、、と笑つた。何もさう氣取つて笑はなくつても、よささうな者だ。「夫れぢや、まだ釣の味は分らんですな。御望みならちと傳授しませう」と頗る得意である。だれが御傳授をうけるものか。一體釣や獵をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ譯がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が樂に極まつてる。釣や獵をしなくつちや活計がたゝないなら格別だが、何不足なく暮して居る上に、生き物を殺さなくつちや寐られないなんて贅澤な話だ。かう思つたが向ふは文學士丈に口が達者だから、議論ぢや叶はないと思つて、だまつてた。すると先生此おれを降參させたと癇違して、早速傳授しませう。御ひまなら、今日どうです、一所に行

つちや。吉川君と二人ぎりぢや、淋しいから、來給へとしきりに勸める。吉川君と云ふのは畫學の教師で例の野だいとの事だ。此野だは、どういふ了見だか、赤シヤツのうちへ朝夕出入して、どこへでも隨行して行く。丸で同輩ぢやない。主從見た樣だ。赤シヤツの行く所なら、野だは必ず行くに極つて居るんだから、今更驚ろきもしないが、二人で行けば濟む所を、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだらう。大方高慢ちきな釣道樂で、自分の釣る所をおれに見せびらかす積かなんかで誘つたに違ない。そんな事で見せびらかされるおれぢやない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて糸さへ卸しや、何かかゝるだらう、こゝでおれが行かないと、赤シヤツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌だから行かないんぢやないと邪推するに相違ない。おれはかう考へたから、行きませうと答へた。それから、學校を仕舞つて、一應うちへ歸つて、支度を整へて、停車場で赤シヤツと野だを待ち合せて濱へ行つた。船頭は一人で、舟は細長い東京邊では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出來るものか、どうする了見だらうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用ゐません。糸丈でげすと顋を撫でゝ黑人じみた事を云つた。かう遣り込められる

位ならだまつて居れば宜かつた。

船頭はゆつくり〳〵漕いでゐるが熟練は恐しいもので、見返へると、濱が小さく見える位もう出てゐる。高柏寺の五重の塔が森の上へ拔け出して針の樣に尖がつてる。向側を見ると靑嶋が浮いてゐる。是は人の住まない島ださうだ。よく見ると石と松ばかりだ。成程石と松ばかりぢや住めつこない。赤シヤツは、しきりに眺望していゝ景色だと云つてる。野だは絕景でげすと云つてる。絕景だか何だか知らないが、いゝ心持には相違ない。ひろ〳〵とした海の上で、潮風に吹かれるのは藥だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見給へ、幹が眞直で、上が傘の樣に開いてターナーの畫にありさうだね」と赤シヤツが野だに云ふと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそつくりですよ」と心得顏である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから默つて居た。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。是で海だとは受け取りにくい程平だ。赤シヤツの御蔭で甚だ愉快だ。出來る事なら、あの島の上へ上がつて見たいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いて見た。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸ぢやいけないです

と赤シャツが異議を申し立てた。おれは默つてた。すると野だがどうです教頭、是からあの島をターナー島と名づけ様ぢやありませんかと餘計な發議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々は是からさう云はうと贊成した。此吾々のうちにおれも這入つてるなら迷惑だ。おれには靑嶋で澤山だ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちや。いゝ畫が出來ますぜと野だが云ふと、マドンナの話はよさうぢやないかホ、ゝ、ゝと赤シャツが氣味の惡るい笑ひ方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、一寸おれの方を見たが、わざと顏をそむけてにや〳〵と笑つた。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだらうが、小旦那だらうが、おれの關係した事でないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえ樣な風をする。下品な仕草だ。是で當人は私も江戸つ子でげす抔と云つてる。マドンナと云ふのは何でも赤シャツの馴染の藝者の渾名か何かに違ないと思つた。なじみの藝者を無人島の松の木の下に立たして眺めて居れば世話はない。夫れを野だが油繪にでもかいて展覽會へ出したらよからう。

此所らがいゝだらうと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六

尋位だと云ふ。六尋位ぢや鯛は六づかしいなと、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る氣と見える、豪膽なものだ。野だは、なに教頭の御手際ぢやかゝりますよ。それになぎですからと御世辭を云ひながら、是も糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘の樣な鉛がぶら下がつてる丈だ。浮がない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかる樣なものだ。おれには到底出來ないと見てゐると、さあ君もやり玉へ糸はありますかと聞く。糸はあまる程あるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出來ないのは素人ですよ。かうしてね、糸が水底へついた時分に、船緣の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食ふとすぐ手に答へる。――そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかゝつたと思つたら何にもかゝらない、餌がなくなつてた許りだ。いゝ氣味だ。教頭、殘念な事をしましたね、今のは慥かに大ものに違なかつたんですが、どうも教頭の御手際でさへ逃げられちや、今日は油斷が出來ませんよ。然し逃げられても何ですね。浮と睨めくらをしてゐる連中よりはましですね。丁度齒どめがなくつちや自轉車へ乘れないのと同程度ですからねと野だは妙な事ばかり喋舌る。よつぽど撲りつけてやらうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海ぢやあるまいし。廣い所だ。鰹の一匹

位義理にだつて、かゝつて呉れるだらうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいゝ加減に指の先であやつつてゐた。

しばらくすると、何だかぴく〳〵と糸にあたるものがある。おれは考へた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、かうぴくつく譯がない。しめた、釣れたとぐい〳〵手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んで只五尺ばかり程しか、水に浸いて居らん。船縁から覗いて見たら、金魚の様な縞のある魚が糸にくつついて、右左へ漾いながら、手に應じて浮き上がつてくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。漸くつらまへて、針をとらうとするが中々取れない。捕まへた手はぬる〳〵する。大に氣味がわるい。面倒だから糸を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んで仕舞つた。赤シヤツと野だは驚ろいて見てゐる。おれは海の中で手をざぶ〳〵と洗つて、鼻の先へあてがつて見た。まだ腥臭い。もう懲り〳〵だ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られたくなからう。さう〳〵糸を捲いて仕舞つた。

一番槍は御手柄だがゴルキぢや、と野だが又生意氣を云ふと、ゴルキと云ふと露西亞の文學者

見た様な名だねと赤シヤツが洒落た。さうですね、丸で露西亞の文學者ですねと野だはすぐ贊成しやがる。ゴルキが露西亞の文學者で、丸木が芝の寫眞師で、米のなる木が命の親だらう。一體此赤シヤツはわるい癖だ。誰を捕まへても片假名の唐人の名を竝べたがる。人には夫々專門があつたものだ。おれの様な數學の教師にゴルキだか車力だか見當がつくものか、少しは遠慮するがいゝ。云ふならフランクリンの自傳だとかプツシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知つてる名を使ふがいゝ。赤シヤツは時々帝國文學とか云ふ眞赤な雜誌を學校へ持つて來て難有さうに讀んでゐる。山嵐に聞いて見たら、赤シヤツの片假名はみんなあの雜誌から出るんださうだ。帝國文學も罪な雜誌だ。

それから赤シヤツと野だは一生懸命に釣つて居たが、約一時間許りのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキ許りだ。鯛なんて藥にしたくつてもありやしない。今日は露西亞文學の大當りだと赤シヤツが野だに話してゐる。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方がありません。當り前ですなと野だが答へてゐる。船頭に聞くと此小魚は骨が多くつて、まづくつて、とても食へないんださうだ。只肥料には出來

るさうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣つて居るんだ。氣の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めて居た。釣をするより此方が餘つ程洒落て居る。

すると二人は小聲で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があつて、清をつれて、こんな奇麗な所へ遊びに來たら嘸愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ抔と一所ぢや詰らない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持ちはしない。野だの樣なのは、馬車に乘らうが、船に乘らうが、凌雲閣へのらうが、到底寄り付けたものぢやない。おれが教頭で、赤シャツがおれだつたら、矢つ張りおれにへけつけ御世辭を使つて赤シャツを冷かすに違ない。江戸つ子は輕薄だと云ふが成程こんなものが田舍巡りをして、私は江戸つ子でげすと繰り返して居たら、輕薄は江戸つ子で、江戸つ子は輕薄の事だと田舍者が思ふに極まつてる。こんな事を考へて居ると、何だか二人がくす〳〵笑ひ出した。笑ひ聲の間に何か云ふが途切れ〳〵で頓と要領を得ない。「え？どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バツタを……本當ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バツタと云ふ野だの語を聽いた時は、思はず屹となつた。野だは何の爲かバツタと云ふ言葉丈ことさら力を入れて、明瞭におれの耳に這入る樣にして、其あとをわざとぼかして仕舞つた。おれは動かないで矢張り聞いて居た。

「又例の堀田が……」「さうかも知れない……」「天麩羅……ハ、、、、」「……煽動して……」「團子も？」

言葉は斯樣に途切れ〳〵であるけれども、バツタだの天麩羅だの、團子だのと云ふ所を以て推し測つて見ると、何でもおれのことに就て內所話しをして居るに相違ない。話すならもつと大きな聲で話すがいゝ、又內所話をする位なら、おれなんか誘はなければいゝ。いけ好かない連中だ。バツタだらうが雪踏だらうが、非はおれにある事ぢやない。校長が一と先づあづけろと云つたから、狸の顏にめんじて只今の所は控へて居るんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしやぶつて引つ込んでるがいゝ。おれの事は、遲かれ早かれ、おれ一人で片付けて見せるから、差支へはないが、又例の堀田がとか煽動してとか云ふ文句が氣にかゝる。堀田がおれを煽動して

騒動を大きくしたと云ふ意味なのか、或は堀田が生徒を煽動しておれをいぢめたと云ふのか方角がわからない。青空を見て居ると、日の光が段々弱つて來て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香の烟の様な雲が、透き徹る底の上を靜かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、うすくもやを掛けた様になつた。

もう歸らうかと赤シヤツが思ひ出した様に云ふと、えゝ丁度時分ですね。今夜はマドンナの君に御逢ひですかと野だが云ふ。赤シヤツは馬鹿あ云つちやいけない、間違になると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エヘヽヽヽ、大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿の様な眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやつた。野だはまぼしさうに引つ繰り返つて、や、こいつは降參だと首を縮めて、頭を掻いた。何といふ猪口才だらう。

船は靜かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シヤツが聞くから、えゝ寢て居て空を見る方がいゝですと答へて、吸ひかけた卷烟草を海の中へたゝき込んだら、ジユと音がして艪の足で掻き分けられた浪の上を搖られながら漂つていつた。「君が來たんで生徒も大に喜んで居るから、奮發してやつて呉れ給へ」と今度は釣には丸で緣故もない事を云ひ出し

た。「あんまり喜んでも居ないでせう」「いえ、御世辭ぢやない。全く喜んで居るんです、ね、吉川君」「喜んでる所ぢやない。大騒ぎです」と野だはにや〳〵と笑つた。こいつの云ふ事は一一癪に障るから妙だ。「然し君注意しないと、險呑ですよ」と赤シヤツが云ふから「どうせ險呑です。かうなりや險呑は覺悟です」と云つてやつた。實際おれは免職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どつちか一つにする了見で居た。「さう云つちや、取りつき所もないが――實は僕も教頭として君の爲を思ふから云ふんだから、わるく取つちや困る」「教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸つ子だから、可成長く御在校を願つて、御互に力にならうと思つて、是でも蔭ながら盡力して居るんですよ」と野だが人間並の事を云つた。野だの御世話になる位なら首を縊つて死んぢまはあ。

「夫でね、生徒は君の來たのを大變歡迎して居るんだが、そこには色々な事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだらうが、こゝが我慢だと思つて、辛抱してくれ玉へ。決して君の爲にならない様な事はしないから」

「色々の事情た、どんな事情です」

「夫が少し込み入つてるんだが、まあ段々分りますよ。僕が話さないでも自然と分つて來るです、ね吉川君」

「えゝ中々込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。然し段々分ります、僕が話さないでも自然と分つて來るです」と野だは赤シャツと同じ様な事を云ふ。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいゝんですが、あなたの方から話し出したから伺ふんです」

「そりや御尤だ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。夫れぢや是丈の事を云つて置きませう。あなたは失禮ながら、まだ學校を卒業したてで、教師は始めての、經驗である。所が學校と云ふものは中々情實のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はさう率直だから、まだ經驗に乏しいと云ふんですがね……」

「どうせ經驗には乏しい筈です。履歴書にもかいときましたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思はぬ邊から乘ぜられる事があるんです」

「正直にして居れば誰が乘じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乘ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、氣を付けないといけないと云ふんです」

野だが大人しくなつたなと氣が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫の方で船頭と釣の話をして居る。野だが居ないんで餘つ程話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰れに乘ぜられたんです」

「だれと指すと、其人の名譽に關係するから云へない。又判然と證據のない事だから云ふと此方の落度になる。とにかく、折角君が來たもんだから、こゝで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない、どうか氣を付けてくれ玉へ」

「氣をつけろつたつて、是より氣の付け様はありません。わるい事をしなけりや好いんでせう」

赤シャツはホ、、、と笑つた。別段おれは笑はれる様な事を云つた覺はない。今日只今に至る迄是でいゝと堅く信じて居る。考へて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奬勵して居る様に思ふ。わるくならなければ社會に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粹な

人を見ると、坊つちやんだの小僧だのと難癖をつけて輕蔑する。夫ぢや小學校や中學校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教へない方がいゝ。いつそ思ひ切つて學校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乘せる策を教授する方が、世の爲にも當人の爲にもなるだらう。赤シヤツがホ、、、と笑つたのは、おれの單純なのを笑つたのだ。單純や眞率が笑はれる世の中ぢや仕樣がない。清はこんな時に決して笑つた事はない。大に感心して聞いたもんだ。清の方が赤シヤツより餘つ程上等だ。

「無論惡るい事をしなければ好いんですが、自分丈惡るい事をしなくつても、人の惡るいのが分らなくつちや、矢つ張りひどい目に逢ふでせう。世の中には磊落な樣に見えても、淡泊な樣に見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、滅多に油斷の出來ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、濱の方は靄でセピヤ色になつた。いゝ景色だ。おい、吉川君どうだい、あの濱の景色は……」と大きな聲を出して野だを呼んだ。なある程こりや奇絶ですね。時間があると寫生するんだが、惜しいですね、此儘にして置くのはと野だは大にたゝく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がヒユーと鳴るとき、おれの乘つて居た舟は磯の砂へ

ざぐりと、舳をつき込んで動かなくなつた。御早う御歸りと、かみさんが、濱に立つて赤シヤツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛聲をして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌だ。こんな奴は澤庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の爲だ。赤シヤツは聲が氣に食はない。あれは持前の聲をわざと氣取つてあんな優しい樣に見せてるんだらう。いくら氣取つたつて、あの面ぢや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナ位なものだ。然し教頭丈に野だより六づかしい事を云ふ。うちへ歸つて、あいつの申し條を考へて見ると一應尤もの樣でもある。判然とした事は云はないから、見當がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云ふのらしい。それならさうと確乎斷言するがいゝ。男らしくもない。さうして、そんな惡るい教師なら、早く免職さしたらよからう。教頭なんて文學士の癖に意氣地のないもんだ。蔭口をきくのでさへ、公然と名前が云へない位な男だから、弱虫に極まつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シヤツも女の樣な親切ものなんだらう。親切は親切、聲は聲だから、聲が氣に入

らないつて、親切を無にしちや筋が違ふ。夫にしても世の中は不思議なものだ。虫の好かない好が親切で、氣の合つた友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にして居る。大方田舍だから萬事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。然し、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたづらをしさうもないがな。一番人望のある教師だと云ふから、やらうと思つたら大抵の事は出來るかも知れないが、――第一そんな廻りくどい事をしないでも、ぢかにおれを捕まへて喧嘩を吹き懸けりや手數が省ける譯だ。おれが邪魔になるなら、實は是々だ、邪魔だから辭職してくれと云や、よさゝうなもんだ。物は相談づくでどうでもなる。向ふの云ひ條が尤もなら、明日にでも辭職してやる。こゝ許り米が出來る譯でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしない積だ。山嵐も餘つ程話せない奴だな。

こゝへ來た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顏に關はる。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか拂はしちやない。然し一錢だらうが五厘だらうが、詐欺師の恩になつては、死ぬ迄心持ちがよくない。あした學校へ行つたら、一錢五厘返して置かう。おれは清から三圓借りて居る。其三圓は五年經つた

今日迄まだ返さない。返せないんぢやない、返さないんだ。清は今に返すだらう抔と、苟めにもおれの懷中をあてにはして居ない。おれも今に返さう抔と他人がましい義理立てはしない積だ。こつちがこんな心配をすればする程清の心を疑ぐる樣なもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのぢやない。清をおれの片破れと思ふからだ。清と山嵐とは固より比べ物にならないが、たとひ氷水だらうが、甘茶だらうが、他人から惠を受けて、だまつて居るのは向ふを一と角の人間と見立てゝ、其人間に對する厚意の所作だ。割前を出せば夫丈の事で濟む所を、心のうちで難有いと恩に着るのは錢金で買へる返禮ぢやない。無位無官でも一人前の獨立した人間だ。獨立した人間が頭を下げるのは百萬兩より尊とい御禮と思はなければならない。

おれは是でも山嵐に一錢五厘奮發させて、百萬兩より尊とい返禮をした氣で居る。山嵐は難有いと思つて然るべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一錢五厘返して仕舞へば借も貸もない。さうして置いて喧嘩をしてやらう。

おれはこゝ迄考へたら、眠くなつたからぐう〳〵寐て仕舞つた。あくる日は思ふ仔細があるか

ら、例刻より早ヤ目に出校して山嵐を待ち受けた。所が中々出て來ない。うらなりが出て來る。漢學の先生が出て來る。野だが出て來る。仕舞には赤シャツ迄出て來たが山嵐の机の上は白墨が一本竪に寢て居る丈で閑靜なものだ。おれは、控所へ這入るや否や返さうと思つて、うちを出る時から、湯錢の樣に手の平へ入れて一錢五厘、學校迄握つて來た。おれは肴つ手だから、開けて見ると一錢五厘が汗をかいて居る。汗をかいてる錢を返しちや、山嵐が何とか云ふだらうと思つたから、机の上へ置いてふう〳〵吹いて又握つた。所へ赤シャツが來て昨日は失敬、迷惑でしたらうと云つたから、迷惑ぢやありません、御蔭で腹が減りましたと答へた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤臺面をおれの鼻の側面へ持つて來たから、何をするかと思つたら、君昨日歸りがけに船の中で話した事は、祕密にしてくれ玉へ。まだ誰にも話しやしますまいねと云つた。女の樣な聲を出す丈に心配性な男と見える。話さない事は慥かである。然し是から話さうと云ふ心持ちで、既に一錢五厘手の平に用意して居る位だから、こゝで赤シャツから口留めをされちや、些と困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれ程推察の出來る謎をかけて置きながら、今更其謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思へぬ無責任だ。元來なら

おれが山嵐と戰爭をはじめて鎬を削つてる眞中へ出て堂々とおれの肩を持つべきだ。夫でこそ一校の教頭で、赤シャツを着て居る主意も立つと云ふもんだ。

おれは教頭に向つて、まだ誰にも話さないが、是から山嵐と談判する積だと云つたら、赤シャツは大に狼狽して、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事に就いて、別段君に何も明言した覺えはないんだから——君がもし茲で亂暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は學校に騷動を起す積りで來たんぢやなからうと妙に常識をはづれた質問をするから、當り前です、月給をもらつたり、騷動を起したりしちや、學校の方でも困るでせうと云つた。すると赤シャツはそれぢや昨日の事は君の參考丈にとめて、口外してくれるなと汗をかいて依賴に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしませうと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこ迄女らしいんだか奥行がわからない。文學士なんて、みんなあんな連中なら詰らんものだ。辻褄の合はない、論理に缺けた注文をして恬然として居る。然も此おれを疑ぐつてる。憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古にする樣なさもしい了見は持つてるもんか。

所へ兩隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩るき方から氣取つてる。部屋の中を往來するのでも、音を立てない様に靴の底をそつと落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、此時から始めて知つた。泥棒の稽古ぢやあるまいし、當り前にするがいゝ。やがて始業の喇叭がなつた。山嵐はとう〳〵出て來ない。仕方がないから、一錢五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ歸つたら、ほかの教師はみんな机を控へて話をして居る。山嵐もいつの間にか來て居る。缺勤だと思つたら遲刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君の御蔭で遲刻したんだ。罰金を出し玉へと云つた。おれは机の上にあつた一錢五厘を出して、是をやるから取つて置け。先達て通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑ひかけたが、おれが存外眞面目で居るので、詰らない冗談をするなと錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこ迄も奢る氣だな。

「冗談ぢやない本當だ。おれは君に氷水を奢られる因緣がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が氣になるなら取つてもいゝが、なぜ思ひ出した様に、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依賴がなければ、こゝで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに眞赤になつてるのにふんと云ふ理窟があるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出て呉れ」

「一錢五厘受け取れば夫でいゝ。下宿を出やうが出まいがおれの勝手だ」

「所が勝手でない、昨日、あすこの亭主が來て君に出て貰ひたいと云ふから、其譯を聞いたら亭主の云ふのは尤もだ。夫でももう一應慥かめる積りで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云ふ事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもんか。さう自分丈で極めたつて仕様がある か。譯があるなら、譯を話すが順だ。てんから亭主の云ふ方が尤もだなんて失敬千萬な事を云ふ

な」

「うん、そんなら云つてやらう。君は亂暴であの下宿で持て餘まされて居るんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ふぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうだか知らないが、兎に角向ふぢや、君に困つてるんだ。下宿料の十圓や十五圓は懸物を一幅賣りや、すぐ浮いてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置く事は置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云ふんだらう。君出てやれ」

「當り前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一體そんな云ひ懸りを云ふ樣な所へ周旋する君からしてが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どつちかだらう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌な大きな聲を出す。控所に居た連中は何事が始ま

つたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、頸を長くしてぼんやりして居る。おれは、別に恥づかしい事をした覺えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡はしてやつた。みんなが驚ろいてるなかに野だ丈は面白さうに笑つて居た。おれの大きな眼が、貴樣も喧嘩をする積りかと云ふ權幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然眞面目な顏をして、大につつしんだ。少し怖はかつたと見える。其うち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに對して無禮を働いた寄宿生の處分法に就ての會議だ。會議と云ふものは生れて始めてだから頓と容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な說をたてゝ、夫を校長が好い加減に纏めるのだらう。纏めると云ふのは黑白の決しかねる事柄に就て云ふべき言葉だ。この場合の樣な、誰が見たつて、不都合としか思はれない事件に會議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釋したつて異說の出樣筈がない。こんな明白なのは卽座に校長が處分して仕舞へばいいに。隨分決斷のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、責え切らない愚圖の

異名だ。

會議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黑い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周圍に竝んで一寸神田の西洋料理屋位な格だ。其テーブルの端に校長が坐つて、校長の隣りに赤シヤツが構へる。あとは勝手次第に席に着くんださうだが、體操の教師丈はいつも席末に謙遜すると云ふ話だ。おれは樣子が分らないから、博物の教師と漢學の教師の間へ這入り込んだ。向ふを見ると山嵐と野だが竝んでる。野だの顏はどう考へても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやぢの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかゝつてた懸物は此顏によく似て居る。坊主に聞いて見たら韋駄天と云ふ怪物ださうだ。今日は怒つてるから、眼をぐる〳〵廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされて堪まるもんかと、おれも負けない氣で、矢つ張り眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやつた。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事に於ては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になると屹度似合ひますと清がよく云つた位だ。

もう大抵御揃でせうかと校長が云ふと、書記の川村と云ふのが一つ二つと頭數を勘定して見る。

一人足りない。一人不足ですがと考へてゐたが、是は足りない筈だ。唐茄子のうらなり君が來て居ない。おれとうらなり君とはどう云ふ宿世の因緣かしらないが、此人の顏を見て以來どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼につく、途中をあるいて居ても、うらなり先生の樣子が心に浮ぶ。溫泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顏をして湯壺のなかに膨れて居る。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから氣の毒になる。學校へ出てうらなり君程大人しい人は居ない。滅多に笑つた事もないが、餘計な口をきいた事もない。おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知つてるが、是は字引にある許りで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢つ張り正體のある文字だと感心した位だ。

此位關係の深い人の事だから、會議室へ這入るや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ氣がついた。實を云ふと、此男の次へでも坐はらうかと、ひそかに目標にして來た位だ。校長はもうやがて見えるでせうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版の樣な者を讀んで居る。赤シヤツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。此男は是が道樂である。赤シヤツ相當の所だらう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語き合つて居る。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いて

居る、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いて居る。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向應じない。只うんとかあゝと云ふ許りで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

所へ待ちかねた、うらなり君が氣の毒さうに這入つて來て少々用事がありまして、遲刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では會議を開きますと狸は先づ書記の川村君に蒟蒻版を配付させる。見ると最初が處分の件、次が生徒取締の件、其他二三ケ條である。狸は例の通り勿體ぶつて、教育の生靈と云ふ見えでこんな意味の事を述べた。「學校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡德の致す所で、何か事件がある度に、自分はよく是で校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪へんが、不幸にして今回も亦かゝる騷動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。然し一たび起つた以上は仕方がない、どうにか處分をせんければならん、事實は既に諸君の御承知の通であるからして、善後策について腹藏のない事を參考の爲めに御述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、成程校長だの狸だのと云ふものは、えらい事を云ふもんだと感心した。かう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不德だとか云ふ位なら、生徒を處分

するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたら、よさゝうなもんだ。さうすればこんな面倒な會議なんぞを開く必要もなくなる譯だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が亂暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒丈に極つてる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治れば夫で澤山だ。人の尻を自分で脊負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの國にあるもんか、狸でなくつちや出來る藝當ぢやない。彼はこんな條理に適はない議論を吐いて、得意氣に一同を見廻した。所が誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に烏がとまつてるのを眺めて居る。漢學の先生は蒟蒻版を疊んだり、延ばしたりしてる。山嵐はまだおれの顏をにらめて居る。會議と云ふものが、こんな馬鹿氣たものなら、缺席して畫寐でもして居る方がましだ。

おれは、ぢれつたく成つたから、一番大に辯じてやらうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シヤツが何か云ひ出したから、やめにした。見るとパイプを仕舞つて、縞のある絹ハンケチで顏をふきながら、何か云つて居る。あの手巾は屹度マドンナから卷き上げたに相違ない。男は白い麻を使ふもんだ。「私も寄宿生の亂暴を聞いて甚だ敎頭として不行屆であり、且つ平常の德化が

少年に及ばなかつたのを深く慚づるのであります。でかう云ふ事は、何か陷缺があると起るもので、事件其物を見ると何だか生徒丈がわるい様であるが、其眞相を極めると責任は却つて學校にあるかも知れない。だから表面上にあらはれた所丈で嚴重な制裁を加へるのは、却て未來の爲によくないかとも思はれます。且つ少年血氣のものであるから活氣があふれて、善惡の考はなく、半ば無意識にこんな惡戯をやる事はないとも限らん。で固より處分法は校長の御考にある事だから、私の容喙する限ではないが、どうか其邊を御斟酌になつて、なるべく寛大な御取計を願ひたいと思ひます」

成程狸が狸なら、赤シヤツも赤シヤツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんぢやない教師が惡るいんだと公言して居る。氣狂が人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂がなぐるんださうだ。難有い仕合せだ。活氣にみちて困るなら運動場へ出て相撲でも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられて堪るもんか。此様子ぢや寐顎をかゝれても、半ば無意識だつて放免する積だらう。

おれはかう考へて何か云はうかなと考へて見たが、云ふなら人を驚ろかす様に滔々と述べたて

なくつちや詰らない、おれの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つて仕舞ふ。狸でも赤シヤツでも人物から云ふと、おれよりも下等だが、辯舌は中々達者だから、まづい事を喋舌つて揚足を取られちや面白くない。一寸腹案を作つて見様と、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへら〳〵調で「實に今回のバツタ事件及び咄喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校將來の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものは此際奮つて自ら省みて、全校の風紀を振肅しなければなりません。それで只今校長及び教頭の御述べになつた御說は、實に肯綮に中つた剴切な御考へで私は徹頭徹尾贊成致します。どうか成るべく寛大の御處分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云ふ事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで譯が分らない。分つたのは徹頭徹尾贊成致しますと云ふ言葉だけだ。

おれは野だの云ふ意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出來ないうちに起ち上がつて仕舞つた。「私は徹頭徹尾反對です……」と云つたがあとが急に出て來ない。

「……そんな頓珍漢な、處分は大嫌です」とつけたら、職員が一同笑ひ出した。「一體生徒が全然悪るいです。どうしても詫まらせなくつちあ、癖になります。退校さしても構ひません。……何だ失敬な、新しく來た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰抔をすると却つて反動を起していけないでせう。矢つ張り教頭の仰しやる通り、寛な方に贊成します」と弱い事を云つた。左隣の漢學は穩便説に贊成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シヤツ黨だ。こんな連中が寄り合つて學校を立てゝ居りや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辭職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シヤツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覺悟で居た。どうせ、こんな手合を辯口で屈伏させる手際はなし、させた所でいつ迄御交際を願ふのは、此方で御免だ。學校に居ないとすればどうなつたつて構ふもんか。また何か云ふと笑ふに違ない。だれが云ふもんかと澄して居た。

すると今迄だまつて聞いて居た山嵐が奮然として、起ち上がつた。野郎又赤シヤツ贊成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見てゐると山嵐は硝子窓を振はせる樣な聲で

「私は教頭及び其他諸君の御説には全然不同意であります。と云ふものは此事件はどの點から見ても、五十名の寄宿生が新來の教師某氏を輕侮して之を翻弄し樣とした所爲とより外には認められんのであります。教頭は其源因を教師の人物如何に御求めになる樣でありますが失禮ながら夫は失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、未だ生徒に接せられてから二十日に滿たぬ頃であります。此短かい二十日間に於て生徒は君の學問人物を評價し得る餘地がないのであります。輕侮されべき至當な理由があつて、輕侮を受けたのなら生徒の行爲に斟酌を加へる理由もありませうが、何等の源因もないのに新來の先生を愚弄する樣な輕薄な生徒を寛假しては學校の威信に關はる事と思ひます。教育の精神は單に學問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元氣を鼓吹すると同時に、野卑な、輕躁な、暴慢な惡風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと姑息な事を云つた日には此弊風はいつ矯正出來るか知れません。かゝる弊風を杜絶する爲めにこそ吾々は此學校に職を奉じて居るので、之を見逃がす位なら始めから教師にならん方がいゝと思ひます。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰に處する上に、當該教師の面前に於て公けに謝罪の意を表せしむるのを至當の所置と心得ます」

と云ひながら、どんと腰を卸した。一同はだまつて何にも言はない。赤シャツは又パイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかつた。おれの云はうと思ふ所をおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれた樣なものだ。おれはかう云ふ單純な人間だから、今迄の喧嘩は丸で忘れて、大に難有いと云ふ顏を以て、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしてゐる。

しばらくして山嵐は又起立した。「只今一寸失念して言ひ落しましたから、申します。當夜の宿直員は宿直中外出して溫泉に行かれた樣であるが、あれは以ての外の事と考へます。苟しくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを幸に、場所もあらうに溫泉抔へ入湯に行く抔と云ふのは大な失體である。生徒は生徒として、此點に就ては校長からとくに責任者に御注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいて居る。おれは何の氣もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい溫泉迄行つて仕舞つたんだが、成程さう云はれて見ると、これはおれが惡るかつた。攻擊されても仕方がない。そこでおれは又起つて「私は正に宿直中に溫泉に行きました。是は全くわるい。あやまります」と云つて着席

したら、一同が又笑ひ出した。おれが何か云ひさへすれば笑ふ。つまらん奴等だ。貴樣等是程自分のわるい事を公けにわるかつたと斷言出來るか、出來ないから笑ふんだらう。

夫から校長は、もう大抵御意見もない樣でありますから、よく考へた上で處分しませうと云つた。序だから其結果を云ふと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければ其時辭職して歸る所だつたがなまじい、おれの云ふ通になつたのでとう〳〵大變な事になつて仕舞つた。夫はあとから話すが、校長は此時會議の引き續きだと號してこんな事を云つた。生徒の風儀は、教師の感化で正していかなくてはならん、其一着手として、教師は可成飲食店抔に出入しない事にしたい。尤も送別會抔の節は特別であるが、單獨にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとへば蕎麥屋だの、團子屋だの——と云ひかけたら又一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合はなかつた。いゝ氣味だ。

おれは腦がわるいから、狸の云ふことなんか、よく分らないが、蕎麥屋や團子屋へ行つて、中學の教師が勤まらなくつちや、おれ見た樣な食ひ心棒にや到底出來つ子ないと思つた。それなら、夫でいゝから、初手から蕎麥と團子の嫌なものと注文して雇ふがいゝ。だんまりで辭令を下げて

置いて、蕎麥を食ふな、團子を食ふなと罪な御布令を出すのは、おれの樣な外に道樂のないものに取つては大變な打擊だ。すると赤シヤツが又口を出した。「元來中學の敎師なぞは社會の上流に位するものだからして、單に物質的の快樂ばかり求める可きものでない。其方に耽るとつい品性にわるい影響を及ぼす樣になる。然し人間だから、何か娯樂がないと、田舍へ來て狹い土地では到底暮せるものではない。其で釣に行くとか、文學書を讀むとか、又は新體詩や俳句を作るとか、何でも高尙な精神的娯樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルキが露西亞の文學者だつたり、馴染の藝者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯樂なら、天麩羅を食つて團子を呑み込むのも精神的娯樂だ。そんな下さらない娯樂を授けるより赤シヤツの洗濯でもするがいゝ。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢ふのも精神的娯樂ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑はない。妙な顏をして互に眼と眼を見合せてゐる。赤シヤツ自身は苦しさうに下を向いた。夫れ見ろ。利いたらう。只氣の毒だつたのはうらなり君で、おれが、かう云つたら蒼い顏を益蒼くした。

七

おれは卽夜下宿を引き拂つた。宿へ歸つて荷物をまとめて居ると、女房が何か不都合でも御座いましたか、御腹の立つ事があるなら、云つて御呉れたら改めますと云ふ。どうも驚ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてるんだらう。出て貰ひたいんだか、居て貰ひたいんだか分りやしない。丸で氣狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたつて江戸つ子の名折れだから、車屋をつれて來てさつさと出て來た。

出た事は出たが、どこへ行くと云ふあてもない。車屋が、どちらへ參りますと云ふから、だまつて尾いて來い、今にわかる、と云つて、すた〳〵やつて來た。面倒だから山城屋へ行かうかとも考へたが、又出なければならないから、つまり手數だ。かうして歩行いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだらう。さうしたら、そこが天意に叶つたわが宿と云ふ事にしやう。とぐる〳〵、閑靜で住みよさゝうな所をあるいてるうち、とう〳〵鍛冶屋町へ出て仕舞つた。こゝは士族屋敷で下宿屋抔のある町ではないから、もつと賑やかな方へ引き返さうかとも

思つたが、不圖いゝ事を考へ付いた。おれが敬愛するうらなり君は此町内に住んで居る。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控へてゐる位だから、此邊の事情には通じて居るに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よさゝうな下宿を教へてくれるかも知れない。幸一度挨拶に來て勝手は知つてるから、捜がしてあるく面倒はない。こゝだらうと、いゝ加減に見當をつけて、御免御免と二返許り云ふと、奥から五十位な年寄が古風な紙燭をつけて、出て來た。おれは若い女も嫌ではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすきだから、其魂が方方の御婆さんに乘り移るんだらう。是は大方うらなり君の御母さんだらう、切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似て居る。まあ御上がりと云ふ所を、一寸御目にかゝりたいからと、主人を玄關迄呼び出して實は是々だが君どこか心當りはありませんかと尋ねて見た。うらなり先生夫は嘸御困りで御座いませう、としばらく考へて居たが、此裏町に萩野と云つて老人夫婦ぎりで暮らして居るものがある、いつぞや座敷を明けて置いても無駄だから、慥かな人があるなら貸してもいゝから周旋してくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあ一所に行つて聞いて見ませうと、親切に連れて行つてくれた。

其夜から萩野の家の下宿人となつた。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き拂ふと、翌日から入れ違に野だが平氣な顏をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれも是にはあきれた。世の中はいかさま師許りで、御互に乘せつこをして居るのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並にしなくちや、遣り切れない譯になる。巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事が極まればかうして、生きてるのも考へ物だ。と云つてぴん〳〵した達者なからだで、首を縊つちや先祖へ濟まない上に、外聞が惡い。考へると物理學校抔へ這入つて、數學なんて役にも立たない藝を覺えるよりも、六百圓を資本にして牛乳屋でも始めればよかつた。さうすれば清もおれの傍を離れずに濟むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮される。一所に居るうちは、さうでもなかつたが、かうして田舍へ來て見ると清は矢つ張り善人だ。あんな氣立のいゝ女は日本中さがして歩行いたつて滅多にはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いて居たが今頃はどうしてるか知らん。先達ての手紙を見たら嘸喜んだらう。それにしても、もう返事がきさうなものだが――おれはこんな事許り考へて二三日暮して居た。

氣になるから、宿の御婆さんに、東京から手紙は來ませんかと時々尋ねて見るが、聞くたんびに何にも參りませんと氣の毒さうな顏をする。こゝの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに雙方共上品だ。爺さんが夜るになると、變な聲を出して謠をうたふには閉口するが、いか銀の樣に御茶を入れませうと無暗に出て來ないから大きに樂だ。御婆さんは時々部屋へ來て色々な話をする。どうして奧さんをお連れなさつて、一所に御出でなんだのぞなもしなどゝ質問をする。奧さんがある樣に見えますかね。可哀想に是でもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奧さんが御有りなさるのは當り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十で御嫁を御貰ひたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人御持ちたのと、何でも例を半ダース許り擧げて反駁を試みたには恐れ入つた。それぢや僕も二十四で御嫁を御貰ひるけれ、世話をして御呉れんかなと田舍言葉を眞似て賴んで見たら、御婆さん正直に本當かなもしと聞いた。

「本當の本當のつて僕あ、嫁が貰ひ度つて仕方がないんだ」

「左樣ぢやらうがな、もし。若いうちは誰もそんなものぢやけれ」此挨拶には痛み入つて返事が出來なかつた。

「然し先生はもう、御嫁が御有りなさるに極つとらい。私はちやんと、もう、睨らんどるぞなもし」

「へえ、活眼だね。どうして、睨らんどるんですか」

「何故してゝ。東京から便りはないか、便りはないかてゝ、毎日便りを待ち焦がれて御いでるぢやないかなもし」

「こいつあ驚いた。大變な活眼だ」

「中りましたらうがな、もし」

「さうですね。中つたかも知れませんよ」

「然し今時の女子は、昔と違ふて油斷が出來んけれ、御氣を御付けたがえゝぞなもし」

「何ですかい、僕の奧さんが東京で間男でもこしらへて居ますかい」

「いゝえ、あなたの奧さんは慥かぢやけれど……」

「それで、漸と安心した。夫ぢや何を氣を付けるんですい」

「あなたのは慥か——あなたのは慥かぢやが——」

「何處に不慥かなのが居ますかね」
「こゝ等にも大分居ります。先生、あの遠山の御嬢さんを御存知かなもし」
「いゝえ、知りませんね」
「まだ御存知ないかなもし。こゝらであなた一番の別嬪さんぢやがなもし。あまり別嬪さんぢやけれ、學校の先生方はみんなマドンナ〳〵と言ふといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」
「うん、マドンナですか。僕あ藝者の名かと思つた」
「いゝえ、あなた。マドンナと云ふと唐人の言葉で、別嬪さんの事ぢやらうがなもし」
「さうかも知れないね。驚いた」
「大方畫學の先生が御付けた名ぞなもし」
「野だがつけたんですかい」
「いゝえ、あの吉川先生が御付けたのぢやがなもし」
「其マドンナが不慥なんですかい」
「其マドンナさんが不慥なマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。さうかも知れませんよ」
「ほん當にさうぢやなもし。鬼神のお松ぢやの、姐妃のお百ぢやのてゝ怖い女が居りましたなもし」
「マドンナも其同類なんですかね」
「其マドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたを此所へ世話をして御呉れた古賀先生なもし——あの方の所へ御嫁に行く約束が出來て居たのぢやがなもし——」
「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思はなかつた。人は見懸けによらない者だな。ちつと氣を付けやう」
「所が、去年あすこの御父さんが、御亡くなりて、——夫迄は御金もあるし、銀行の株も持つて御出るし、萬事都合がよかつたのぢやが——夫からと云ふものは、どう云ふものか急に暮し向きが思はしくなくなつて——詰り古賀さんがあまり御人が好過ぎるけれ、御欺されたんぞなもし。それや、これやで御輿入も延びて居る所へ、あの教頭さんが御出でゝ、是非御嫁にほしいと御云ひるのぢやがなもし」

坊つちやん

「あの赤シヤツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシヤツは只のシヤツぢやないと思つてた。それから？」

「人を頼んで懸合ふてお見ると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出來かねて――まあよう考へて見やう位の挨拶を御したのぢやがなもし。すると赤シヤツさんが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしる様になつて、とう〳〵あなた、御嬢さんを手馴付けてお仕舞ひたのぢやがなもし。赤シヤツさんも赤シヤツさんぢやが、御嬢さんも御嬢さんぢやてゝ、みんなが悪るく云ひますのよ。一旦古賀さんへ嫁に行くてゝ承知をしときながら、今更學士さんが御出たけれ、其方に替へよてゝ、それぢや今日様へ濟むまいがなもし、あなた」

「全く濟まないね。今日様所か明日様にも明後日様にも、いつ迄行つたつて濟みつこありませんね」

「夫で古賀さんに御氣の毒ぢやてゝ、御友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしに御行きたら、赤シヤツさんが、あしは約束のあるものを横取りする積はない。破約になれば貰ふかも知れんが、今の所は遠山家と只交際をして居る許りぢや、遠山家と交際をするには別段古賀さんに濟まん事

もなからうと御云ひるけれ、堀田さんも仕方がなしに御戻りたさうな。赤シヤツさんと堀田さんは、それ以來折合がわるいと云ふ評判ぞなもし」

「よく色々な事を知つてますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狹いけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困る位だ。此容子ぢやおれの天麩羅や團子の事も知つてるかも知れない。厄介な所だ。然し御蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シヤツの關係もわかるし大に後學になつた。只困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれの様な單純なものには白とか黑とか片づけて貰はないと、どつちへ味方をしていゝか分らない。

「赤シヤツと山嵐たあ、どつちがいゝ人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐と云ふのは堀田の事ですよ」

「そりや强い事は堀田さんの方が强さうぢやけれど、然し赤シヤツさんは學士さんぢやけれ、働らきはある方ぞな、もし。夫から優しい事も赤シヤツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田

さんの方がえゝといふぞなもし」

「つまり何方がいゝんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」

是ぢや聞いたつて仕方がないから、やめにした。夫から二三日して學校から歸ると御婆さんがにこ〳〵して、へえ御待遠さま。やつと參りました。と一本の手紙を持つて來てゆつくり御覽と云つて出て行つた。取り上げて見ると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて來たのである。其上山城屋では一週間許り逗留して居る。宿屋丈に手紙迄泊る積なんだらう。開いて見ると、非常に長いもんだ。坊つちやんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかゝうと思つたが、生憎風邪を引いて一週間許り寢て居たものだから、つい遲くなつて濟まない。其上今時の御嬢さんの樣に讀み書きが達者でないものだから、こんなまづい字でも、かくのに餘つ程骨が折れる。甥に代筆を賴まうと思つたが、折角あげるのに自分でかゝなくつちや、坊つちやんに濟まないと思つて、わざ〳〵下たがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で濟んだが、下た書きをするには四日か

かつた。讀みにくいかも知れないが、是でも一生懸命にかいたのだから、どうぞ仕舞迄讀んでくれ。と云ふ冒頭で四尺ばかり何やら蚊やら認めてある。成程讀みにくい。字がまづい許ではない、大抵平假名だから、どこで切れて、どこで始まるのだか句讀をつけるのに餘つ程骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は五圓やるから讀んでくれと賴まれても斷はるのだが、此時ばかりは眞面目になつて、始から終迄讀み通した。讀み通した事は事實だが、讀む方に骨が折れて、意味がつながらないから、又頭から讀み直して見た。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくゝ、なつたから、とう〳〵椽鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拜見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた歸りに、讀みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、仕舞ぎはには四尺あまりの半切れがさらり〳〵と鳴つて、手を放すと、向ふの生垣迄飛んで行さうだ。おれはそんな事には構つて居られない。坊つちやんは竹を割つた樣な氣性だが、只肝癪が强過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるもとになるから、矢鱈に使つちやいけない、もしつけたら、清丈に手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいさうだから、氣をつけて苛い目に遭はない樣にしろ。——氣候だ

つて東京より不順に極つてるから、寢冷をして風邪を引いてはいけない。坊つちやんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、此次には責めて此手紙の半分位の長さのを書いてくれ。――宿屋へ茶代を五圓やるのはいゝが、あとで困りやしないか、田舍へ行つて賴りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、萬一の時に差支へない樣にしなくつちやいけない。――御小遣がなくて困るかも知れないから、爲替で十圓あげる。――先達て坊つちやんからもらつた五十圓を、坊つちやんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けて置いたが、此十圓を引いてもまだ四十圓あるから大丈夫だ。――成程女と云ふものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考へ込んで居ると、しきりの襖をあけて、萩野の御婆さんが晩めしを持つてきた。まだ見て御出でるのかなもし。えつぽど長い御手紙ぢやなもし、と云つたから、えゝ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煮つけだ。こゝのうちは、いか銀よりも鄭寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食ひ物がまづい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、かう立てつづけに芋を食はされては命がつゞかない。うらなり君を笑ふ所か、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまふ。清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ燒を食はせるんだが、貧乏士族のけちん坊と來ちや仕方がない。どう考へても清と一所でなくつちあ駄目だ。もしあの學校に長くでも居る模樣なら、東京から召び呼せてやらう。天麩羅蕎麥を食つちやならない、團子を食つちやならない、夫で下宿に居て芋許り食つて黃色くなつて居ろなんて、教育者はつらいものだ。禪宗坊主だつて、是よりは口に榮耀をさせて居るだらう。――おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗から生卵を二つ出して、茶碗の緣でたゝき割つて、漸く凌いだ。生卵でさへ營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業が出來るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遲くなつた。然し毎日行きつけたのを一日でも缺かすのは心持がわるい。汽車にでも乘つて出懸樣と、例の赤手拭をぶら下げて停車場迄來ると二三分前に發車した許りで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島を吹かして居ると、偶然にもうらなり君がやつて來た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君が猶更氣の毒になつた。平常から天地の間に居候をして居る樣に、小さく構へてゐるのが如何にも憐れに見えたが、今夜

は憐れ所の騒ぎではない。出來るならば月給を倍にして、遠山の御嬢さんと明日から結婚さして、一ケ月許り東京へでも遊びにやつて遣りたい氣がした矢先だから、や御湯ですか、さあ、こつちへ御懸けなさいと威勢よく席を讓ると、うらなり君は恐れ入つた體裁で、いえ構ふておくれなさるな、と遠慮だか何だか矢つ張立つてる。少し待たなくつちや出ません、草臥れますから御懸けなさいと又勸めて見た。實はどうかして、そばへ懸けて貰ひたかつた位に氣の毒で堪らない。それでは御邪魔を致しませうと漸くおれの云ふ事を聞いて呉れた。世の中には野だ見た樣に生意氣な、出ないで濟む所へ必ず顏を出す奴も居る。山嵐の樣におれが居なくつちや日本が困るだらうと云ふ樣な面を肩の上へ載せてる奴もゐる。さうかと思ふと、赤シヤツの樣にコスメチツクと色男の問屋を以て自ら任じてゐるのもある。教育が生きてフロツクコートを着ればおれになるんだと云はぬ許りの狸もゐる。皆々夫れ相應に威張つてるんだが、このうらなり先生の樣に在れどもなきが如く、人質に取られた人形の樣に大人しくしてゐるのは見た事がない。顏はふくれて居るが、こんな結構な男を捨てゝ赤シヤツに靡くなんて、マドンナも餘つ程氣の知れないおきやんだ。赤シヤツが何ダース寄つたつて、これ程立派な旦那樣が出來るもんか。

「あなたは何所か惡いんぢやありませんか。大分たいぎさうに見えますが……」

「いえ、別段是と云ふ持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが惡いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分御丈夫の樣ですな」

「えゝ瘠せても病氣はしません。病氣なんてものあ大嫌ですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにや〳〵と笑つた。

所へ入口で若々しい女の笑聲が聞えたから、何心なく振り反つて見るとえらい奴が來た。色の白い、ハイカラ頭の、脊の高い美人と、四十五六の奥さんとが竝んで切符を賣る窓の前に立つて居る。おれは美人の形容抔が出來る男でないから何にも云へないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つて見た樣な心持ちがした。年寄の方が脊は低い。然し顏はよく似て居るから親子だらう。おれは、や、來たなと思ふ途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見てゐた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がつて、そろ〳〵女の方へ歩行き出したんで、少し驚いた。マドンナぢやないかと思つた。三人は切符所の前で輕

く挨拶してゐる。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で發車だ。早く汽車がくればいゝがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つて居ると、又一人あはてゝ場内へ馳け込んで來たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべら〳〵然たる着物へ縮緬の帶をだらしなく卷きつけて、例の通り金鎖りをぶらつかして居る。あの金鎖りは贋物である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかして居るが、おれはちやんと知つてる。赤シャツは馳け込んだなり、何かきよろ〳〵して居たが、切符賣下所の前に話して居る三人へ慇懃に御辭儀をして、何か二ことと、三ことと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例の如く猫足にあるいて來て、や君も湯ですか、僕は乘り後れやしないかと思つて心配して急いで來たら、まだ三四分ある。あの時計は慥かしらんと、自分の金側を出して、二分程ちがつてると云ひながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちつとも見返らないで杖の上へ頤をのせて、正面ばかり眺めて居る。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いた儘である。いよ〳〵マドンナに違ない。

やがて、ピューと汽笛が鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろ〳〵吾れ勝に乘り込む。赤

シャツはいの一號に上等へ飛び込んだ。上等へ乘つたつて威張れる所ではない。住田まで上等が五錢で下等が三錢だから、僅か二錢違ひで上下の區別がつく。かう云ふおれでさへ上等を奮發して白切符を握つてるんでもわかる。尤も田舍者はけちだから、たつた二錢の出入でも頗る苦になると見えて、大抵は下等へ乘る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナの御袋が上等へ這入り込んだ。うらなり君は活版で押した樣に下等ばかりへ乘る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の體であつたが、おれの顏を見るや否や思ひ切つて、飛び込んで仕舞つた。おれは此時何となく氣の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乘り込んだ。上等の切符で下等へ乘るに不都合はなからう。

溫泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りて見たら、又うらなり君に逢つた。おれは會議や何かでいざと極まると、咽喉が塞がつて饒舌れない男だが、平常は隨分辯ずる方だから、色々湯壺のなかでうらなり君に話しかけて見た。何だか憐れぽくつて堪らない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸つ子の義務だと思つてる。所が生憎うらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乘つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかも其